

# 家庭と子ども・青年の文化

## 第1委員会「子どもと文化、家庭と学校のかかわり」中間報告

### 目 次

はじめに .....	2
第1回夜間公開研究会 「家庭の学校化」を問う .....	3
ヒヤリング 青年たち、親・家庭を語る .....	18
第2回夜間公開研究会 いま、子どもの文化は... .....	27
座談会 家庭と子ども・青年の文化 .....	44

# はじめに

永畑 道子

日教組の先生たちを、私は、日本のシンクタンクと呼んでいる。これからの未来をつくる子どもたちに知の刺激を与え、教え、伸ばしていく人たち。かなりの学問の素地があり、日々学ぶことを仕事としている人たちだからこそ、その集団が、考える人の象徴であることは、まぎれもない。思想は熱く渦巻き、討論が日々交わされているもの、と親の私は想像し、信じたいと思っている。

かつて東京都北多摩郡国分寺町第一小学校に子どもを送りこんだ親たちにとって、当時の北多摩の先生たちは、ほとんどが日教組の組合員であり、そして親の私たちに本当の教育とは何かを熱烈に語りかける人びとが学校のなかにかかなりの数、存在した。これは私の実体験である。

その人たちによって、親は目をひらかれ、我が子だけしか見えなかった親が、隣の子に、町の子に、心を注ぐことを覚え、先生たちと手をつないで学校をひらくことに立ち上がった。それは、子どもが学校に通っている間の、まことに刺激的な体験だった。

「教育委員会とは何か」の講座をたびたび開いて、教育の主権者が子どもであり、それを代行する親、教師が何をしなければならないか、を、教育委員会の人たちと激しく討論もした。

国分寺町の行政は変わった。なにも見えていなかった親たちに、ほんとうの教育とは何かを切々と語ったのは、実に現場の先生たちであった。

それまで取材の記者であった私にまったく見えていなかった、血の通った教育のありかたを、ひしひしと感じ取ることがようやくできた。

いま、あのころの先生たちはどうされているのだろうか。あえて敬語を使いたくなるのは、人間として、人生の生き方まで教えてもらった、と、私は思うからである。

ここ何年かの組織としての悲しい争いを、人ごとでなく親の私は見つけ、なによりも、現場の先生の翼の下に抱かれて育つ、やさしい子どもたちのことを思った。

何がこんな状況を招いたのか。子どもたちの、あたたかな、生きている感覚が、どこかで先生たちに伝わらなくなったのではないか。頬をよせると子どもには太陽の匂いがする。そのいのちのうったえが、いつのまにか組織そのものに失われてきたのではないだろうか。

日高六郎先生が、この総研のしごとに関わられるときいたとき、私はそのことをまず思った。思想信条の自由、全くの無党派で通してきた私にとって、なによりも子どもたちが学問の面白さに目覚め、人間として成長する、胸もときめくような日々が過ごせるようになるには、頼るのは組合の先生たちよりほかにない、と思い、この運動に関わることを決意した。子どもと親、現場の先生の訴えが日々よせられる「親と子の教育相談室」の再開は、もっとも切実な願いだった。

第一委員会は、女性民教審のイメージでいくことを、まず思った。どこの党派にも左右されず親と学校の間をつき、日教組を、多くの子どもと親の前にひらく。そしてこの世のなかを変える。子どもたちに生きる力をとりもどす。なによりも子ども自身の声をきく。ほんとうは十代の彼らが作るべき集会をイメージして、夜間公開研究会を開くことにした。

これまで仕事があっぴやおうなしに傍らにおかれた働く人たち、そして父親たちも、ゆっくりと関わることのできる時間である。子ども時代を過ごしてきたばかりの十代の人たちが率直に私たちと向かいあい、なんの飾りもないことばで、生きるための思いを、この場所で語りつづけている。教育行政そのものへの問いかけも、この第一委員会の夜間公開研究会がつねに基調としているテーマである。私たちはそれを、みんながわかることばで話し、考えあいたいと思っている。

ここに掲げるのは中間報告であり、現場の先生の意見、投稿を、心からお待ちしている。

## 第1回 夜間公開研究会

# 「家庭の学校化」を問う

1992・2・7  
P.M6:00～8:30

お話 奥地 圭子氏(東京シューレ主宰)

鈴木 暁氏(東京シューレ)

式町はる子氏( 同 )

司会 永畑 道子氏(教育総研メンバー)

第一委員会の課題のひとつ、「子どもと家庭」は、まず子ども・若者たちのことばを聴くことから、作業が開始された。

この20年間、子どもたちの生活基盤であるはずの家庭は、次第に学校的な単一価値にとりこまれる度合いを増し、いまやほとんど学校の下請け機能を果たすところと化しているのではないか、という仮説を私たちは持っている。学校的価値の支配に対して、さまざまな形で異議を表出している

と思われる不登校の子どもたち、またその子どもたちや親たちと深くかかわってこられた奥地圭子氏をゲストに迎えて、このテーマをめぐる話し合ったのが、第1回公開研究会であった。

さらにその後、高校生、大学生たち4人を招いて、「青年たち、親を語る」という座談会を持った。そのような試みのなかで、家庭、親の学校化の実態は、子どもの側の言葉を通して明らかにされつつある。(小沢 牧子)

### ■主報告

## 「家庭の学校化」を問う

奥地 圭子

皆さん今日は。私は教師を7年くらい前に辞めまして、現在、子どもたちが自由にやって来る、子どもの居場所とっておりますが「東京シューレ」という所で主として、学校に行かない子ども

とつきあい、また不登校の子を持つお父さんお母さんと付き合っています。その立場から、今日のテーマについて私なりの物語といたしますか、話をしてみたいと思います。

「家庭の学校化」というテーマですが、私がよく学校批判をするものですから、もしかしたら家庭に対してはあまり問題意識を持っていないというふうに、勘違いをされている方もいらっしゃるかもしれないと思ったのです。事実は逆でして、私たちが毎日受ける電話や手紙の相談の90%は、親の立場から子どもが学校に行かなくて悩んでいる、どうしたら学校に行くだらう、高校中退というけれどもどうしてそれを止めたらいいか、そのような相談が大部分ですので「家庭の学校化」は私の主たるテーマで、喜んで引き受けました。ですから、登校拒否・不登校というよりも、その角度から見た「家庭の学校化」と言うことに焦点を絞ってお話したいと思います。

### 学校は絶対的な場所ではなかった

「家庭の学校化」というのは、何も登校拒否・不登校だけの問題ではなくて、日本の大人社会すべてに充満している状況ではないかと思えますので、私自身がそのことに気付いてきた経過からお話したいと思います。私の子ども時代は、昭和20年代、1950年代ですね、私は父が復員してくるまでおばあちゃんに育てられたんですけど、私の祖母は家庭と学校と言うものをはっきり区別しておりました。あの頃を思い出すと、確かにお上っているのは学校と同じってような所もおばあちゃんにはあったんですけど、でも自ずからテリトリーがはっきりあった。

たとえば「今日は学校休みなさい」、「どうして？」という、「今日は本家の法事だから」という。そういうもんかと思って、私はおばあちゃんについてお茶出したり、座ってなさいとかいうのを一生懸命勤めたっていうか、それで当然だった時代です。もう一つ、私は本が好きだったんですけども、「女がそんなに勉強せんでもいい」ってよくいわれました。「何で？」って聞くと「嫁のもらいてがなくなる」とかかっておまして、女性差別というふうになってしまう方もあるかもしれ

ないけど、でも今から考えると、庶民にとって学校というのは絶対的な場所ではなかったなっていうことをいろんな場面で思い出します。

私が教師になったのが1963年ですが、60年代の学校ってというのは、たとえば学校から帰る時にお母さんたちに会うと「先生、お陰様でうちの子あやって元気に遊んでます」っていう挨拶が普通だった。子どもが元気に遊んでいたら親は幸せを感じたという時代があるんです。それが1970年代後半から、私はほとんど宿題は出さない教師だったんですけども、だんだん宿題を宿題をっていう声に私自身が悩まされるようになりました。新学期、とくに5年生6年生を受け持つとそういう声が出るわけです。私は、私が宿題を出す出さないを決めるんじゃなくて、子どもと話し合いたいと思って、お母さんたちにそんなふうに返事し、次の日「もう6年生だからもっと宿題を出せって、5年生のようじゃだめだってお母さん達が父母会でいってるけど、どうしよう」なんていうと、子ども達は「よくいうぜ、やるのは俺たちだぜ」とかいます。そこで「じゃあやらないようにしましょう」といって、そのまま文句が出なくなった時期を経て、次第に「先生は子どもの言うことを一方的に聞いて、教育に責任持たないんですか？」なんて話も出てきたりして、勉強とか学校に対する家庭の意識が変わってきたなって思いました。

これは今考えると私も恥ずかしいんですけど塾通いも増え始めて、学校の行事、たとえば新聞作りとか、ドッチボール大会とかなかなかうまく出来ないの、「塾と学校どっちが大事？」とかいって、今考えると冷や汗ものですが、ずいぶん学校を絶対化していた。子どもにとっては塾は塾で大事で、学校は学校で大事なのに、私も学校絶対化の考え方に、はまっていたと思うんです。

### 受験戦争の加熱と家庭の学校化と

このような動きの中で、受験戦争が加熱してくる。そうすると、学校からの帰りに親たちに出

でも挨拶が違って来るんです。「あら元気に遊んでるじゃないの」って私がいうと、「もう6年生なのに学校から帰ってきたら遊んでばかりで大丈夫なんでしょうか」っていうふうに、同じように遊んでいても15年くらい前だったら本当に喜んでいたのが、心配の種になっちゃう。遊ぶことそのものが心配という状況が出てきたのが70年代後半から80年代にかけてだったというように思います。

私も、学校が家庭の中で絶対化してくるといふか、家庭が学校化してくるといふことに気が付き始めました。父母会でも、学校は教育機関の一つなんだから、絶対的に思わないようにと、たとえば通信簿の2だって「あぁ2で大変だ、何とか3にしましょ」というふうに思わないで、「あぁ先生から見たらそう見えるんだな」ぐらいでもっと親独自の目をもってほしいと。本当は、通知表のつけ方とか、通知表の存在自体の問題なんですけれども、その枠の中で「もっと相対化してみてください」みたいなことをいったり、ある子が「お父さんが仕事でスキー場まで行くんだけど、私もスキーやって来たいな」っていえば「あぁ授業よりもはるかにいい経験できるから行ってらっしゃい」といったり、私としても家庭の学校化ということを何とか少し考えたいと思ってやってきました。

私が本当の意味で「家庭の学校化」に気が付いたのは、わが子の登校拒否なのです。これは今日の主たるテーマではないので、簡単にお話しますが、私の長男が3年生の頃から朝になると頭が痛い、おなかが痛いといい、はじめは体の状態が悪いのかと思い、そのことと学校に行きたくない、学校を拒否してるっていうことがよく見えなかったんですね。体がよくなれば学校へ行かせようと、励まして行かせたり、学校に行かないとか、休む方法があるなんて夢にも思わないですから、本人が頑張れる日は頑張ってるうちに、拒食症に追い込んでしまうんです。

アフリカの飢えた子どもたちのような姿に自分

の子どもがなって、自分の子どももそんなふうにはか育てられないんだったら教師も辞めなくてはならないかもしれない、他人の子どもなんてとても育てられないというふうに自信を失ったり、非常に辛い思いをしました。いろんなことがあったんですけども、児童精神科医の渡辺位さんと面談の日、2時間弱でしたが子どもが先生に心の中につつかえたことをしゃべりまくったのです。そうしたら、スッと拒食症が治ってしまったんですね。今までどんなに御馳走しても、工夫してもたべなかったのが、心が受けとめられるとおにぎりを「うまい、うまい」と二皿平らげてピタッと拒食がとれてしまうっていうのは、信じられない風景でした。人間の心と身体が本当に一つで、心を受けとめないということは、体だって本当の意味で健康で自分の存在感があるということではないことを突き付けられました。

### わが内なる学校信仰に気づく

そのときに私が一番問われたのは、子どもがここまでして学校に行きたくないというサインを出しているのにどうして受けとめられなかったかということでした。私は教師として、管理教育が進んで学校が子どもの場ではないということを感じていながら、それでもやっぱり行ってほしいといふか、行かないと心配なんですね。学校に行かないと社会人になれないみたいに思い込んでいる。目にウロコがかかって、子どもの命のサインを受けとめられなかった。その中に我が内なる学校信仰っていうのがあったことに気付かされました。

もう一つの側面として気付いたのは、子どもが学校に行かなくなって、学校を辞めてみて分かることなんですけど、学校に子どもが行ってる時はものすごく家庭が学校中心になっていることです。起きる時間から寝る時間、持ち物のこと、宿題のこと、班競争があるから班の中で文句を言われないようにやんなきゃいけない、これを縫わなきゃいけない、もう本当に学校中心の家庭生活に

なっている。学校を辞めてみると、本当に不思議なくらい楽なんですね、ゆったり家族のペースでやっていける。学校に行かないことはだめだって悩んでるうちは気が付かないんですけど、行かないで成長してもいいんじゃないかというところに立ち始めたとき、実はこれが自然な生活ではなかったかって気が付いて、思いっきりやりたいことをやって子どもが成長していく幸せに気が付いたわけです。

「家庭の学校化」というのは、今二つのことをいったのですが、それを仮にAとBと名づけるとAは、いわば学校信仰という価値の問題です、価値観がすごく学校化されている。後半で言ったことをBとしましょうか、それは家庭空間そのものが学校と同一になっているというか、学校の下請けになっている。AとBは密接に関連していて、そのことがどれくらい子どもを追い詰めるか、という例をお話します。

可能性がないと見切り発車というか、親もまあこの程度で、となりますけど、少し頑張ってる学校についていく子は、とくに家族が名門校といわれるところを出てるとなると「あなたもそのような学校に入ってちょうだい。それが我が家の家風だ」とか「恥をかかないことだ」というふうになる。一流校に入れるなんていうのは極くわずかだとは考えないわけです。それに向けてやっていけば、何か未来が開けそうに思うということがかなりあると思います。

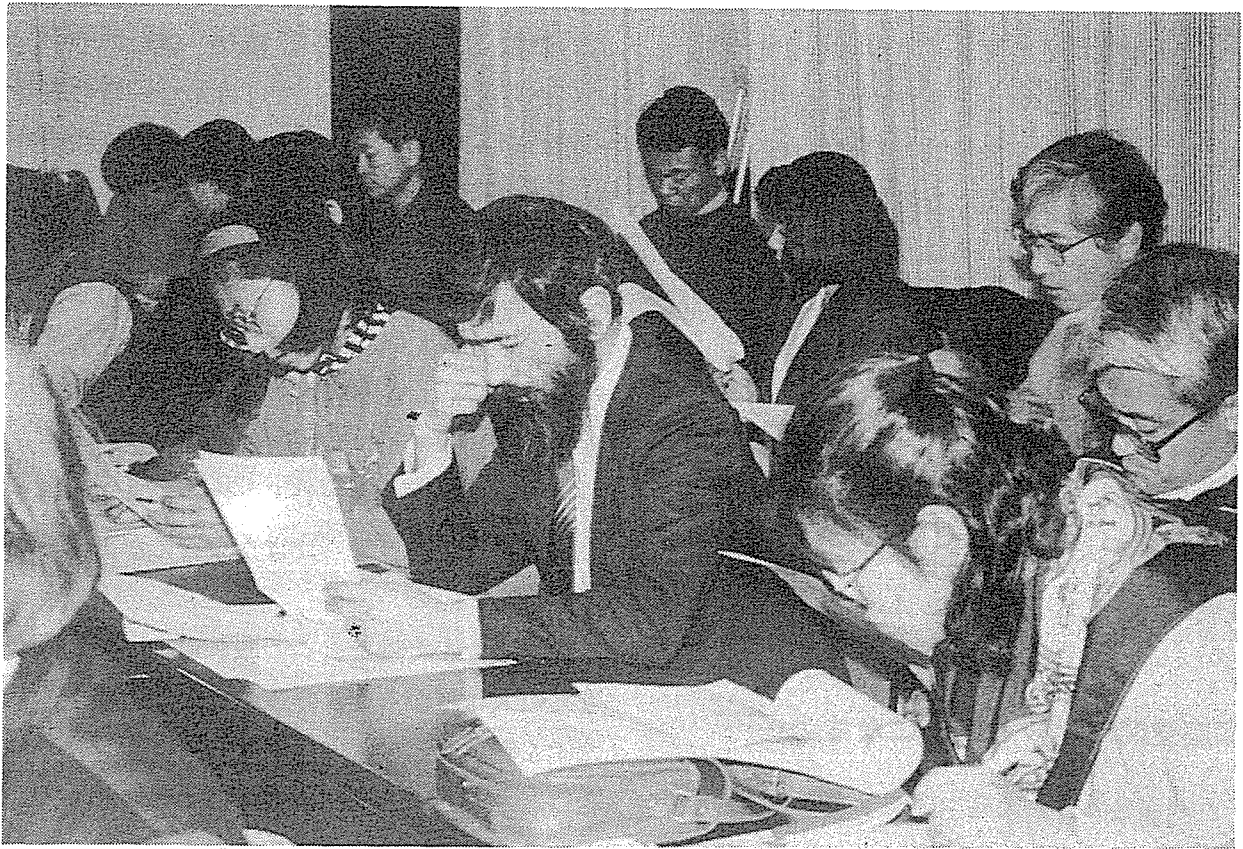
ある男の子は、小学校4年くらいから塾をいくつも掛け持ちで、そして最近の進学競争は単なる勉強だけじゃなくて、体を鍛えるとかいったことも底力になるというのでボーイスカウトにも行く。子どもはお母さんの期待に添うように頑張るんですけど、そういう生活を続けて高校に入学してやっぱりエネルギーが尽きるっていうか、目的は達成するんですけど、入ってすぐに学校に行かなくなってしまいうんです。行かなくなってから、学校、学校ってやるわけで、その価値観といい、学校か

ら帰ってからの家庭生活といい、全部学校に受かるということに向ってやってるわけですから、学校に行かなくなったら子どもはすごく大変です。もう自分はだめになったと、それは家族からも見捨てられるかもしれないし、それから自分自身のプライドがそこにあったのが、学校の成績がダウンするどころじゃなくて行かないでも勉強ができなくなっちゃうっていう恐れはものすごいことで、その子はしばらくしたら暴力とか、神経症とかを出し始めるんです。お母さんに対して「おれの子も時代を返せ」といって殴ったりした時期もありました。「家庭の学校化」の中でバランスを失うと、子どもたちの大変な状況が生まれてくる実例が幾つもあります。

### 学校信仰が生む子どもたちの状況

もうちょっと細かく考えてみますと、まず価値観の方の問題です。家庭が学校を絶対化し、学校信仰を持ち始めていろんな状況が出るんですが、一つは親が先生的になる、先生化してしまうということです。とくに不登校の子どもにとってつらいんですけれども、学校とうまくいってるうちは親とすごく関係がいいんです。だけど学校とうまくいかなくなると親の表情が陰しくなる。たとえば連絡帳に「今日は授業中落ち着きませんでした」と書かれ、学校でも散々怒られて帰ってくるんですけど、また家で連絡帳を読み上げられて親にやられるもんですから、子どもとしては心の居場所が無くなってしまいうというか、浮遊してしまう。学校に行く振りをしたり、学校に仕方なく行くけど、帰りにゲームセンターとかに回って家に帰らないとか、いろんなことが出てしまうことがあります。

不登校状態になるともっと大変で、学校へ戻るように、直される対象になっていくんですね。たとえば精神病院に入院させられるとか、風の学園とか戸塚ヨットスクールみたいな施設に入れられて、スパルタ的な訓練を受けさせるとか、ある



いは何とか療法といって受けさせられたり、いわば学校に行かないことが非常に異常視されるわけです。その異常視がまた差別につながり心の病といわれて遊んでもらえなかったり、私の子もうつるっていつて遊んでもらえなかった時期がありますけど、学校に行かない子はまともじゃないみたいな考え方も出てきます。

家庭の中でも辛くなります。「学校行かない子はうちの子じゃない」とか、「よく学校行かないでテレビ見てられるわね」といつてテレビも自由に見られないとか。そのような、学校に行く子は正常だけど行かない子は異常だみたいな考え方が、「家庭の学校化」が進むと出てくるわけです。

そして無理に学校に戻らせようとする親もいますから、またそういう指導をなさる専門家や学校がありますから、むりやり学校に送って行くんですね。「庭にチューリップが咲いてるよ。今日持っていったら？」とソフトに行かせようというのもあるし、それからむりやり車に乗せて送りつけ、子どもが学校に着いて車から出るときに大暴れす

ると、「うちの子すごい暴力が出ました」とおっしゃるけど、暴力しかないくらい子どもを追い詰めて、子どもの行きたくない気持ちを認めないということも出ています。

その中で、子どもたちは自己存在を否定的に見ていく。自分はだめな子だとコンプレックスを持ったり、自己崩壊感っていいですか、学校に行かないことはその子がだめなことでもないし、そんなに自分を否定的に見ることでもないのに、世間との関係で自分について、恥ずかしいとか、だめとか、将来がないとかって思って閉じこもったり、暴力や神経症などさまざまな辛い状態があります。この前、死にたいと石油をかぶった子がいましたね。大人は「学校行かなくなつて道はある」とかいつても、否定される当事者としては本当に死にたいぐらいのときがあるわけです。そのようなところに子どもたちを追い込んでいる社会だということ、私たちは知らないといけないと思うんです。

学校に行かない罪悪感のために、病気が増える

んです。人間誰にでもプライドがありますから、自分が学校へ行かないことをだめだと思っているときには、プライドを合法的に手に入れるのは病気がない。どっか病気になることによって「じゃあ学校休もう」というふうに子どもが思うわけですね。ですからずっと病気が離せない。病院に行ったらけろっとよくなって家に帰される。家に帰ってくると病気。これは親に甘えてるからだなんていう説明がされるけど、実は家に帰ると「元気になったから学校へ行きなさい」と対応しちゃうので、元気であれば学校へ行かされるからずっと病気がはずせないというふうになっている子までいるわけです。

### 家庭空間が学校と同一になると……

それからBの方、家庭空間が学校空間とおなじようになっていくという問題です。これは学校を非難することじゃなくて、客観的な事実として、なにもかもが学校優先の家庭生活になっているということはあると思うんです。先生がいったとかじゃなくて、学校のことがすまないとやりたいことはやっちゃいけないという家庭がほとんどです。「宿題やったの」「持ち物は」「点検ノート書いたの」そういうことが終わってから自分の好きなことしなさいというように、そして大きくなったら親のいうことも聞かないから、子どもは逃げたりしてますけど、時間も空間も本当に学校の占める位置が高くなっている。映画館からスーパーマーケットまで学校が「こっちは行っていいが、ここからこっちはだめ」と決めて、家に近いスーパーマーケットに行けなかったり、変なことがたくさん起こっているわけです。私のおばあちゃんたちが、家には家のやり方があると思っていた頃と比べると、ものすごく学校の占める位置が増えていると思います。

その中に、もっと深い問題があると思うんです。二、三日、電車に乗ったら、私のまわりに制服を着た中学生たちがいっぱい来た。みごとなく

らい制服、バッグ、靴下、靴が一緒なのです。その子たちと話したくなって「みんな一緒に服を着て一緒にバッグ持って、そういうことに違和感持たない？嫌いじゃない？」っていったら、「別にいい、決まってるほうが面倒くさくないもん」「考えなくて済むもんね」というんです。「自分のファッションやりたい人いないの？」っていったら「やりたいんだったら日曜日にやればいい」、「校門圧死事件とかどう思う？」「わかんないよねえ、わかんない…」って感じで、とにかく考えなくて済むのが一番いいってような答えが出てきたんです。

私思ったんだけど、この服装についてしっかり考えた人は誰だろう、学校の先生だと思うんです。たぶん職員会議で延々とかかって、形は、色は、靴はどうのって、先生たちは考えたと思うんです。考える人が先生で、従うのは子どもたち。家庭で今日は雨が降ってるからこれを着て行こうか、これもって行こうかっていうようなことを考えなくて済む。家庭は何も考えなくなって、学校が考えているものを受け止めていく場になっている、そんなところが最も怖いと思います。

「東京シューレ」は発想が違って、もっと自由でいい、やっぱり自由だったら子どもは育つなって実感しているんです。で、自分らしくやれる空間を創っていきたい、大量の学校離れが起きている時代ですから、否応なく親たちは揺さぶられてます、私もそうであったように。そして凝り固まった価値観が、子どもたちによって変えられつつあって、すてきなお父さんお母さんたちもたくさん出てきているんです。子どもたちの動きが私たちの価値観を変えていく原動力になって、もっと価値観が広がって、学校が相対化される時代が来るんじゃないかなって思っています。



# 子どもたちの報告

## なぜ一色の学校に

鈴木 暁 鈴木暁です。17になりました。どうして登校拒否をしたかを話したいと思います。ぼくの場合は小学校5年生に町田から新宿に引っ越したことがきっかけでした。町田にいた頃は結構田舎に住んでいて、ママシとかでる山のなかで遊んでたんですが、いきなり新宿に来てギャップを感じました。小学校の6年生の3学期くらいから休み始めたのですけれども、中学にあがるときに、「中学に行ったら友達も全部変わるし。制服も買ったから行ってごらん」と親に言われて中学に行きました。中学でも結局公立の中学に行っただけで友達もほとんど同じで、結局同じような環境になっちゃって、1年の6月くらいで行かなくなりました。そのあと僕はシューレにいったんですけども、結局シューレの中で1ヵ月もない間に疲れちゃって家に閉じこもったんですね。その時はまだ新聞とかに載っているのは登校拒否は病気だとかいうことだったし、一晩中吐いてたりとか、頭痛しちゃって朝起きれなかったりしたもので、親が病院につれて行って、脳波を測ったりしました。いまシューレに来て2年か3年たったんですけど、いま登校拒否ってどういうものか自分で考えてみると、今学校にいつている人は小中高あわせて何百万人っていう人がいるわけですよ。今学校の形っていうのは、多少校則が違うとか、行く時間が違うとかあるかもしれないけど、時間的にはほとんど一緒だし、内容的には一緒のことをやっていると思うんですよ。よく大人の人は一一人個性が大切だとか、一人一人違うといいますが、何百万人もの人たちがたった一つの学校に行っているということはおかしいことだと僕は思う

んですよ。今学校という形が好きで学校にいつている人はいて当然だと思うんですけども。そうじゃなくて学校というものがおかしいと思ったり、自分に合わないと思ったりする人もいて当然だと思うんですよ。登校拒否っていうのがでてきて、学校に行かない子がいるというのが今の現実だと思うんですよ。僕は学校に行っている人たちはそれで別にいいと思いますけども、登校拒否をしているってことで差別されて、「登校拒否してるんだぜ」って悪口言われるのはちょっと嫌ですね。

次に、これはカンパの願いになるんですけども、今奄美大島の80人くらいの部落で10人くらいで共同生活をしている3家族の人たちが追放運動をされています。追放運動をされている理由のひとつとしては、子どもたちが登校拒否だからってことが言われています。村のなかの他の子どもが登校拒否になったら困るだとか、不安だとかいうことで追放運動が起きてます。それで、その裁判とかも起きてるんですよ。僕は登校拒否を理由とした差別や追放運動をされるのはおかしいと思うんですよ。で、シューレの何人かの子どもたちから直接意見を聴いてみたいと思うんです。その交通費のカンパをお願いしたいと思います。

式町はる子 みなさん今晚は、東京シューレの式町はる子です。15歳で、今中学3年生です。学校に行かなくなったのは中学1年の時です。小学6年までずっと学校が大好きで、学校行かなくなるなんて考えたことなんてないんですね。学校に行かなくなった時はやっぱり大変でしたね。シューレに来たのは去年の6月くらいなんですけど、それまで学校に行かなくなってからシューレに行くまで、家庭の中でもう、家庭内暴力をやった一

人です。大変でしたね。お母さんなんかと葛藤したりしたのは、やっぱり自分を認めてもらえなかったと言うのが一番の理由です。親戚のうちなんかにも「なんであなた学校にいかないの」というようなことを責められて泣いた覚えもあります。私がそれまで学校が好きだったからお母さんは学校にあってほしいと思ったんでしょう。最初は「学校に行きなさい」って責められましたけど、今は学校に行きたいんだったら行ってもいいし、行きたくないんだったらシュールにいなさいっていう状況です。

### 学校から拒否される障害児

**司会** これから討論に入りますが、その前に梅村浄さんに発言をお願いします。梅村さん、ちょっと自己紹介を。

**梅村 浄** 梅村です。子どもの親として話します。私の一番上の子は18歳ですけども障害をもっているんですね。この子どもが高校に行きたいって思ったときどういうことが起こるかという、この3年間、この子自身は行きたいと思っていても制度的な枠組みの中で学校に行くってということが阻まれているという立場にあるわけです。自分から学校を拒否している子どもたち、それと学校に行きたいのだけでも拒否されている子どもたち、というところをどのような線でくくればいいのか、と考えてきたんですけども、やっぱり学校が示す一定の子どもの像、教育像にはまっていく子どもだけを受け入れていく今の学校の在り方が問題なのだと思います。とりわけ高校の選抜制度というものが中学校にすごい影を落としています。そして、それが小学校にも影を落としています。そういう状況の中で、私は親としてですけども先ほど発言された二人の当事者の子どもたち、それから、先生方といった人たちが学校を変えていけるかな、どうかな、と思いながら、毎日やっています。一昨年の秋から都立高校への入学を求めて、自主登校ということで学校へ、毎日大人と本人と

1時間くらい行くという状況です。ある意味では逆方向の動きをしているようですけども、しかし根っこにあることは同じだなあと思ってお話を聞いていました。

**司会** ありがとうございます。学校の硬直化をどうやわらかくしていけるかが課題です。ここで今日のテーマである「家庭と学校化」についてどうおもうか、ご発言をお願いします。

**女子大学生** 和光大学の学生です。私の家庭というのは私が病気がちであったこともあったんですけど、とにかく学校にいなさいっていうことを強く言われていました。家のなかの私の居場所ってというのがほとんどない感じでしたから、家には帰ってきたくないから部活にあって、病気でも学校に行っていました。家では私が入っている場所というのが感じられなくて、夜に庭に出て美術の宿題をやった記憶があります。とても強力な家庭の学校化があったという気がします。高校受験の一番厳しい時期には私と両親の関係が悪化して全然話さなくなって、口を利けば喧嘩になるという状態になってきました。学校には親と子を引き裂くものすごい圧力があるなと感じていました。

### 不登校で施設に入れられて

**男子大学生** 僕も学校を休んでいる時期があったのですが、3日か4日行かなかったという理由で“風の子学園”みたいな施設に入れられ、なんとか1か月でそこから戻ってこられたのですが、そのあとは学校というのは行かなくちゃいけない、それ以上考えちゃいけないんだ、今度学校に行かなければ何されるか分からないという気持ちでずっと行きました。それで中学3年の終わりになって、本当に学校に絞りとられたという感じを味わいました。今考えると学校というのはやっぱり自分が楽しいから行く、自分がしたいことがあるから行く、友達がいるから行くというところではなくて、と思うのです。僕のお母さんなんかは高校に行つてなくて、「私は学歴がないから先生とたたかえな

かった」と今でも言うんです。やっぱり学校とたたかってくれる親がいないと、学校にいて身としては非常に辛い。とにかく学校に行かないという選択をしなくてはならない時に、自分がいて良い場所というのをもっともっと作ってほしいと思います。

**司会** ここで共同通信の横川さんにご意見をうかがいたいのですが。いろいろな現場を取材されたと思うんですけど、どのような感想をお持ちでしょうか。

**横川和夫** 日本の学校というのは明治以来、国家や企業の発展のこのために、手段として位置付けられているということで、子ども達一人一人を大切にするとするのは実にインチキであって、結局そのインチキを見抜けない私たち大人はずっとその悪循環の環のなかにぐるぐるはめこまれてしまったというか。悪循環が行き着く所まで行き着いてしまって、今皆さん方が言ったように学校から離れるとか、その中で悲鳴をあげているというのが実態じゃないかと思います。ですからその悪循環の環をどうやって断ち切るかということが一つと、それから学習指導要領という形で国家が難しいカリキュラムを決めて、一方的に押しつけてくることに対して、じゃあ私たちはどうやってこれを断ち切るかということが問われているのだと思います。

### 学校にもどれるのが良いのではないか？

**蔵田(男)** 大学で教育学を教えています。ちょっと奥地さんに質問したいのです。学校に行かない生き方もあるのは私も同感で、いろんな生き方があると思うんですけど、しかしやはり実際の解決は、やはり最終的には学校に行くようにもっていくのが一番良いという結論を持っているのですが。

**奥地** 私は学校に行くとか行かないというのは、どっちが良いという問題じゃなくて、その子自身が選ぶことだと思っています。ですから行くも行

かないも価値のうえでは対等です。こっちの方がいいだろうというのは絶対的なレベルでないと思うんですね。よく今は学歴社会だからというように行くほうが生きやすいというふうにおっしゃるんですけど、行くことで傷ついたり、この子が行かなかったらどんなに後が本当に良い人生だったかなというような例だってあります。今相当学校がストレス空間になってて、命そのものが伸びやすい空間って言えなくなっているんで、まあ昔もそうですけども、どちらが良いたろうというようには言えないということです。その子の人生はその子を選ぶという選択ができる、その選択というのはこっちが絶対的に良いんだといわれて選択するのは本当の選択にはならないのであって、対等な価値観の中から選びとれることの方が大事じゃないかと思います。それで学校に行くのが良ければ行けばいいし、私たちは学校否定では全然ないですし。

登校拒否は学校に戻すことが解決だという流れというのはものすごく強いんですね。だけど、「今は休んでて良いよ、でもできるだけ学校に戻った方がいいのですよ」と言うのは行かないことを認めているのではなくて、戻ってない自分というのはやっぱり駄目だという自責の念や劣等感、罪悪感を解決しないのですね。私は国家が作った制度に乗るか乗らないかは自分が選べばいいことで、こっちの方がいいだろう、と言えないと思います。**蔵田** 分かりました。私はこれまで、人間との交流の面から学校というのは非常に意味があると考えていたのですが、勉強はもう駄目だから学校行って、友達と楽しくあそんだほうがいいんじゃないの、というのが駄目だということが分かったのですね。やはり子どもにとって学校とは、まったく単純でオーソドックスなんですけど、勉強するところだと。それで行かなければ駄目だと思ったのですね。勉強というものを核にして学校を指向していくことが、実は子どもにも沿っているのだと思うのですが。

司会 これは論議が渦巻くところかと思えます。群馬のある先生方が学校に行かない子を集めて教室で勉強を教えようとして学校の中に一部屋設けたのですよ。そうしたらその壁にいっぱい落書をして遊びました。先生たちは学問をさせようと思ったんでしょけれど、子ども達はまったく違う反応示したという例がありました。その学校ではいかに自分達のやっている勉強へという方向が本当の子どもの心を汲んでいないかということ話を話されたという話を聞いています。

小沢(牧) 一つ質問なんですけど、先程成功という言葉をお使いになったんですね。どういふことを以て成功とお考えになるかちょっとうかがいます。

蔵田 外面的なことですけど単純に学校に行くようになったということです。私が言った、勉強を核にするということは、学校の勉強を核にするということじゃないのですよね。知識を学ぶということの大切さを知るようになって、学校に行くようになるということなんです。親は、さあ友達を作りなさいというようなことで学校に行かせようとしていた。けれど、やはり知識を学びたいという欲求は子どもに厳然と存在するという事なんですよね。

### 学校は学べるところではない

女性 五歳の子どもがいる一主婦です。今知識を学ぶところが学校とおっしゃられたのですが、私が小学校から大学までずっと感じてきたものがあるんです。私は国語でも英語でも何の教科でも勉強したいなって思ってたのですね。でもクラスの中にいると本当に先生に手を挙げて聞きたいということも、クラスの友達やクラスの雰囲気にも阻まれたんですよね。手を挙げることもできない。手を挙げると「あー、あの子は本当に勉強ばかりしているのね」とか「ちょっと変ね」という雰囲気がずっとあったので、学校は本当になにかを学びたい、なにか知識をえたいと思ってもそういう

場でありえなかったんですね。本当に日本の学校って、学べる所なのかということもいつも疑問に思っています。

女性 昔の登校拒否児です。いま14歳の息子が数か月の登校拒否をしております。小学校の娘と息子達は適当におやつを取りながらのんびりやっています。仕事としては世田谷にあるプレイパークという冒険遊び場のプレイリーダーの仕事をしています。「あなたにとってこれは体にいいから食べなさい」と行って毎日無理やり食べさせられたらだれも食べたくはないと思うんですね。体に悪くても子ども達はすごい着色料や毒々しいお菓子を食べます。その時期何がしたいかは本人の選択権の問題ですし、解決の仕方もいっぱいあると。学校に行くっていう解決の仕方もあれば、学校に行かないという解決の仕方もある。もっと違う解決の仕方もある。それが全部ある意味では並列なんですね。どっちがいいとか、どっちがうまくやっただとかそういうことでは全然ないと思います。

女性 『婦人しんぶん』の記者をやっています。私は中学2年生の時に友達にいじめられ、3年生の時に先生に裏切られて学校が嫌だったのですが、登校拒否という手段は知らなかったの(笑)、結局塾の方に突っ込んでいったタイプだったのですね。塾は週5日行ってました。それからその先生は大好きでした。やっぱり勉強したいという気持ちはあったものですからひたすら塾に通って、受験の知識ではありますけども学び、そして学校は復習の場のような感じにしていました。やっぱり自分が信じられないとか、不信感を持つ所にはいたくないというのは学校に限らずどこでもそうだと思います。信頼関係が成り立たないところで学ぶ気になれるかということが疑問です。

女性 高校2年生の娘が5月に疲れ果てて倒れまして、登校拒否になりました。どうしてうちの子は疲れたかというのは、私の干渉のしすぎとか、過保護とか家庭のこともいろいろあったと思えますけども、受験のことも考えて女子校に入ったん

ですね。行事をすることが好きな子なのですが、学校は受験一本で行くというやり方でして、そういうのにだんだんプレッシャーを感じてくたびれ果てたと。いろんなことを子どもから教えられ、今頃になって受験校というのがいかに子どもの心をむしばむかという事を本当に感じまして、今頃になって私の方が「そんなに受験、受験って言わなくていいじゃないの」というようになりましたが、子どもの方は学校で洗脳されているんですね、受験ということに。来年どうするのかいろいろ私も迷っている段階なんですけど、今日いろんなことを考えさせていただきました。とても参加して良かったと思ってます。

### 多様化路線のもつ問題

**男性** ある私立大学で工学部の教員をやっています。実は私の娘も中学3年生で登校拒否をやっておりまして、大学の教員の面と親の面ということで簡単にお話させていただきます。最近の大学はご存じのように受験競争が激しくなっており、これはとりもなおさず多くの人が大学に行くようになったという結果であります、その善悪は別にしてね。ところがもう一つの見逃せない面として、特に私立大学では一芸に秀でた人を入れようというのが出てきております。これは日本が価値観が多様化してきたことと一致していると思います。ところが問題はなにかといいますと、大学が塾に「どうしたら良い学生が集められるか」と相談する所もあると聞いております。私立大学のマーケティングみたいなものがあるのですね。そうしますと塾は大学に対して例えばもっと受験科目を減らさないというような指導をすることさえ聞いております。そうしますと、とにかく大学に入るために1科目だけでいいとかというようなことをやっておりまして結局高校で勉強することがどういうことなんだろうかと、大学から見た場合の問いかけも出てくるわけです。本当の意味で勉強というもの、もっと生きた勉強がで

きないかと、受験を離れて違った観点から抗議してもいいんじゃないかということを感じているのです。あと親の立場としてなんですが、はじめやっぱり学校にいかないということでショックを感じました。本人は勉強したいという気持ちがあるのですけれども学校でいじめにあって嫌になったことに原因があるようです。今の受験から外れたところで子ども達が自分がやりたい勉強を自由な形でしていくという姿がだいぶ出てきたように思いますが、私の場合も娘はそういう場に行きたいということをおっしゃっています。そういう可能性がわずかながらも出て来たということです。

**男性** 教職員組合の執行委員です。昨年の12月まで中学校で授業をしておりました。私は秋田県のかなり大きなマンモス中学校の教師を去年までやってきました。まず、学校で教えている教科内容というものが本来的な学問であるのかということ、私は十分確かめてこなかったという反省も込めてですけれども、子どもたちは学校だけに通用する知識、それはさらに受験という体制の中でテストに合格するための知識という形で教えられている部分がある。したがって勉強が好きで勉強ができるようになれば子どもたちは学校に行くのかということ必ずしもそうならない、ということについて私はすごく反省しています。二つ目として学校にはさまざまな子どもがいます。例えば中学の1年生でもひらがなが書けない子どもがいます。そういう子どもたちに授業をしていく、分からせていくには、少なくとも半年くらいのサイクルがいります。かなり前ですが、中学に入ってきた子どもが1週間で休みましてしばらくこなかったのですがそのうち母親がタクシーで連れてきました。私はその頃若くて力一杯でしたので、無理やり抱きあげて2階の教室に連れていきました。その日はたまたま5時間目は体育で、6時間目道徳でした。私は道徳をやるのは大嫌いで、遊ばせるのが趣味の先生でしたけれども、5時間目の先生は厳しくって体育用具、トレパンシャツを忘れてきた

子どもはパンツ一つで走らせるという先生でした。そうしたらたまたまその日忘れてきた子どもが3人おりまして、その子もその仲間と4人一緒にグラウンドを走った。次の時間は私も入ってサッカーをして遊びました。それから1年間その子はずっと来ました。よく分かりませندどうしてなのか。ただ答えになるようなことが一つだけあるような気がします。卒業してから高校に入ったある女の子とたまたま会いましたら、「一番嫌だったのは先生何も教えなかったことだ！」(笑)「先生が何にも干渉しなかったから良かった」、そういいました。このことが一つあるんじゃないかなって思いました。

### 学校の方が子どもを拒否している

**男性** 品川の小学校の教員です。登校拒否とか不登校とか言って子どもの側が学校を拒否する前に、実は学校の方が子どもを拒否しているんだという実態も私たちが認識しなくてはいけないんじゃないかなと思います。行政レベルで登校拒否を考えるとどうなるかという、学校によくないところ、改善しなくちゃいけないところがあるという発想はまずないんですね。適応ができていないということで子どもたちの心理的な面を強調します。学校に子どもたちがこれないというのは家庭に問題があるんだ、子ども自身に問題があるんだという形で、教員が指導されて、教員もそんな風に思いがちになるケースも少なくないようです。

では、どうして子どもが学校に来たくないようになるかということで、ひとつ例をあげたいと思います。それは夏のプールに入る際に、一人の子どもが言葉を理解するのに時間がかかるというような場合があると、その子どものためと言って水泳帽に印を付ける。それを拒否しても親やその子どもに対して、教員が一致団結して、「お宅のお子さんを見ているんですよ」という形で押しつけがましいことをやっています。こういったことが学校の中で往々にしてあることと思うんです。制服

にしても、頭髪にしましてもそうだと思います。すべてのことが、あなたの幸せに結びつくためにこれはやられた方がいい、と。私たちが努力しなくちゃいけない問題としては、印を付ける前に、その子どもがどういう状態なのか、私たちが何を努力しなくちゃいけないのかを考えることなのです。やっと去年何にも付けなくてやれるようになりました。しかし学校が子どもを拒否している現場があるんだということを私たちが認識しないと、親御さんたちの子どもを見守る姿勢が云々、親御さんが共働きしている、というようなところへもっていかれるのです。

**司会** ありがとうございます。たしかに麻痺するんですね、教師というのは。私は教研集会に何度も出ているのですが、良い事例ばかり報告されるんですよ。そうではなくって、もっと問題がいっぱいある所をなぜ突かないのかと思います。今日は日教組女性部の先生方もおいでですので、その辺りについてはどうお考えですか。つらい質問かもしれないですけど、お願いします。

### 日教組教研も「成功例」ばかりでなく

**上田(女)** 中学の教師をしておりましたけれども、その時のことも含めて述べさせていただきたいと思います。中学3年生を受け持った時に1人の男の子が不登校になってしまいました。そのことを考えてみますとその子は大変にスポーツができ、運動神経がいいというかバドミントンで県大会優勝という経験も持っていましたけど、秋頃からずっと学校に来なくなっちゃったんですね。その時に気が付かなかったのですが、いろんな本読んで相談する中で、初めての経験でしたので友達を迎えにやれば良いとか、教師が家庭訪問すれば良いとか必死で繰り返したわけですね。家庭訪問したり、お母さんと話しするようになったりしてやっと出てくるようになって、成功した、と思ったわけですね。でも皆さんの話を聞いてからだったらもっとうまくやれたかなって思うんですけども、

結局その子は私立の高校に行って途中で中退しちゃったわけです。それを見て一時成功したと喜んでいたことは間違いだったんじゃないかと。ちょっと私が救われるなと思ったのは一生懸命さが子どもに伝わったといいますか、中退はしちゃったけれどもいつも様子を話しにきてくれるというのがあるんですね。

教研の問題と絡めますと、私はこれでも成功したと思いがちです。教研なんかでも成功した例が多く出されるという傾向がありますけれども、一朝一夕に解決するものでもなければ1年の実践で成功するものでもないと思うんですね。だからそういう面で言えばもっとどろどろしたものとか、不成功の例を出しあうような集会であって欲しいし、それからぜひ親の参加も欲しいですね。

**司会** 本当に、何か先生たち同士でやってもしょうがない状況である、という気がするのですね。

**上田** ある会でお母さんが半分になりますと、非常にいろんな意見も出ますし、見方も多様になって、非常に勉強になるというのが実感です。

**女性** 社会人一年生です。先程のお子さんが倒れちゃったというお話を聞いて、すごく心が痛みました。自分は登校拒否してるんだって言える子はまだいいと思うんですけれども、そうじゃなくて悩んじゃって本当に苦しんでる子どもが多いと思うんですね。先ほど知識をつけるために学校に行くという発言がありましたけど、果たして今の学校で生きてく力みたいなものがつけられるのか。私が一番大切だと思うのは、例えば学校に行かなくてもそれでいいって認めてあげるといのは、生きていく力とかにつながっていくと思いますし、知識ということよりも大切なことだと思います。そういう中で、自分を見極めていく力がつく。奥地さんがおっしゃったように、何も感じないほうがかえって怖いと思うんですね。

**司会** はい、ありがとうございます。小沢有作先生お願いします。

## 子どもたちが学ぶ中味を決める学校に

**小沢有作** 僕の少年時代のことをお話しますと、僕は1932年生まれで1945年3月まで小学校で天皇のために死ねという教育を受けました。疎開もしました。そして敗戦になりました。敗戦の後は民主主義のための教育を受けました。その頃は疎開先で食物もなくなりました。ですから私の学校体験の一番基になるのは1944年から47、8年の小学校5、6年から高等小学校に入って中学校の2、3年までの4、5年間というのはそういう意味ではまともな学校の勉強をしてこなかったのですね。ですから私は今でも漢字を間違えますけれども、学校を相対化したおかげでいろいろな社会のなかから学ぶとか、生活のなかから学ぶということを少し覚えていったのですね。

ぼくが今思うのは空想なんですけどね、一年のはじめの4月に「ぼくは何を勉強したいんだ」「わたしは何を勉強したいんだ」ってことを1週間子どもたちが話し合っ、そしてこういうことを勉強しよう決めていけばいいと思うんですね。ところが今は教科書を全部与えるわけですね。それを勉強しなさい、そして成績をこう付けなさい、ということになっているんですね。僕は学校をもう少し相対化してみるという子ども時代の体験がありますから、それを思い合せて、今の子どもをを考えられたらなと思って聞いていました。

**蔵田** ちょっと誤解されるといけないので。先ほど知識を学ぶという子どもの要求と学校はすぐに結び付けられないんじゃないだろうか、私の意見に対してご意見があったのですが、私もその通りだと思うんですね。しかし子どもが本物の知識を身につけて賢くなりたいと、そして勉強もしないで家にいたりすることをずっと続けていけばまともな人間になれないということにだんだん気が付いているわけですね。ですから知識を身に付けたいという考えはあるのだけれども、それは学校では無理だという考えもあるけれども、相対的に

言えばやはりそれがいい道であると。親も先生も学校といえば成績だとか進学だとか、あるいは社会性を身につけるとかをすぐ考えちゃって、本当に子どもが知識欲をもっている、それを満たしたいということに関してあまりに触れられないというのが奇怪な感じがするのですね。

司会 あ、これは続編をやることになっていますので(笑)。みんないっぱい言いたいことがあったと思いますが、せっかく今日ゲストで来ていただいた奥地さんに最後にまとめをお願いします。

### 人間の育ちを広い視点で

奥地 まとめではなくて、いくつかのことを大急ぎでお話したいのですけれども。まず、勉強をめぐってということいろいろ出たんですけど、学校に行かない子と付き合ってる立場から言うと非常に不思議なんですけど、学校に行かない子というのは知識欲も満たされないし、学力も付かないし、もしかして生きていく力もないかという、それが不思議に学校に行ってる子と行かない子で変わらないのですね、結果として。これは実践上の話でして、学校に行かない時期を持ってその後学校に復帰する子、大学に行く子はいっぱいいますけれども、でもどの子も知識欲はそれなりの形で持っていたり、興味をいろんな所に持っていたり、まったく倉田さんのおっしゃるとおりなんですけれども、その知識欲を学校でしか伸ばせないということはないと考えるとまた非常に固定した狭い考え方に陥ってしまうと思います。勉強しなかったらまともな人間が育たないというけれども、勉強とは何だろうということも問わなくてはいけません。シューレとか学校に行かない子達を見ますと、逆にうんざりするほど勉強してないわけですよ、学校に行っていない時期があったり、やらない時期があったから。だから逆にものすごく知識欲を持っていたり、勉強しはじめるとものすごくエネルギーが出たり。トータルで何年か見たりすると、学校に行かなかったことが勉強にとってそ

んなにマイナスではないと。それはなぜかといいますと、私たちは学校の中を通ってくと学校で力を付けて来たとか錯覚するんですけどね、実は小沢さんがおっしゃったようにね、人間どこで何を身につけているか分からないのですね。特に今情報化社会のなかで、大人と同じ情報を子ども達は手にできますから、学校できちんきちんとカリキュラムを積み上げたから学力が付いていると思っ込んでいると、実はそうではなくて、逆に学校で勉強嫌いになっている。例えばシューレの数学の先生は県立高校の先生がお手伝いに来てくださっているのです。学校と同じプリントをシューレに持ってきてくださるのですけれど、学校では2枚目を配ると、生徒が「また〜」っていうんです。ところがシューレは1枚終わると「もうないの、もっとちょうだい」というから自分はシューレにくるのがずっと楽しみだ。一所懸命押しつけるよりも、やりたい子が勉強するという中で教えること自体も楽しいなんておっしゃってたんですけど。これは一例ですけど、学校に行かないと勉強できないとか、学校に行ってるって勉強できてるということではなくて、もっと広く人間が育っていることを見た方がいい。そのことからつなげていくと、さっき教研集会の話も出ましたけれど、私は教師の頃はお恥ずかしながら、自分がこんな実践をしたら子どもたちがこんな力を付けたとか、こんなふうに育ったというふう実践報告をしたのですよ。そうしないと教師の存在感がなくなるのですね。ところが学校に行かない子と付き合い始めて、私達が付き合ってる子ども達、親達のその学校に呼ばれて、先生が研究発表なさる時があるのですよ。そうすると裏から見るとまったく違うのですね。先生はこうはたらきかけたからこう子ども達は変わったんだとおっしゃるんですけども、私達付き合っていると、全然別のことで子どもは動いたりしていて、やっぱりそういう気持ちになっているだけのことで、教室のなかから見るだけでは違うんじゃないかなと。いろんな側面



から人間は育っていることを考えなくちゃいけないと思います。最後に、子どもが学校に行きたいとか、勉強したいという言葉ってというのはそう言ったから本当にその気持ちなのか、というのはちょっと疑問符です。私たちの社会は本当に学校化された社会だから、学校に行かなくては駄目と思って、そうしたいと思っていることが8割だと思っています。本当の気持ちでやっていける、自分らしい社会を作っていくということが大事じゃないかなと思います。

**鈴木** 僕は中学、高校と登校拒否をしてきて、登校拒否ということを通じて自分の考えを発展させて、登校拒否だということでは差別しないとか、差別とかに対して考えを発展させてきたことは、もしかしたら学校で知識を得ることよりも大切だったんじゃないかなと思っています。

**司会** ほんとうに貴重な発言ありがとうございました。

# 青年たち、親・家庭を語る

1992. 4. 28

〈参加者〉

- ・メインゲスト…嶺、松下、T(和光大学生)、吉岡(東横学園高校)
- ・第一委員会…永畑、小沢(牧)、小沢(有)、山部、原田
- ・教育総研…日高、西沢、小橋、大和田、石川、染谷

## 発題——子どもの立場から親・家庭を捉える

小沢(牧) 第一委員会のテーマは、「子どもと文化、家庭と学校のかかわり」という範囲の広いものなので、様々な角度から追求していかなくてはなりません。子どもと家庭ということを考えてときに、いつもは大人たちからの論評が中心になってしまうのですが、今日は、子どもたちの立場から、家庭の中で何を思い何を考えているのかを語ってもらい、そこを出発点にして議論を進めていきたいと思っています。

永畑 親をどうしようもないもの、この時親を見切った、ということがもしあったなら、そのあたりからお話にはいっていただいたらどうでしょうか。

## 息子と父の間

嶺 僕は1年間浪人して、ある大学にはいって、そこをやめてから和光大学に入りました。3年ほ

ど遅れてしまっていることになります。

今は妹と一緒に住んでいます。妹が帰省した時に、父が「あいつは人と同じことをやるのに7年かかった」と言っているのを耳にしたというのです。父はいわゆるエリートサラリーマンで、日の当たる場所を歩いてきた人です。僕が和光大学にはいって3年経つ今も、「あいつはせっかく入った大学を途中でやめて、名も知れぬ三流大学にいて…」というようなとらえかたをします。その時、「この人にとって、俺って何なんだろう。やっぱり違う人間なんだ。親子という関係がなければ、恐らくこの人と親しく話すこともないだろう」というふうに思いました。

小沢(牧) それは大学というレッテルで見るからということですか。

嶺 ええ、それもありますが、大学をやめるときにも入るときにも、それなりの思いがあるのに、それを捨象してしまう。その時に、「この人、俺のことをどう思っているのかな」と考えてしまいま

すね。

日高 和光に決めるときは、かなり選んだのですか。

嶺 僕は、偉ぶるわけではないのですが、大学には行って勉強をしたいと思いました。いまの大学は専門が分化する傾向が強いと思うのですが、「人間」ということを考える場合にも、非常に多岐な分野にわたっているので、一つの専門とか専攻に区切って勉強してもよいのか、という疑問を持ちました。人間のことをいちばん広く考えられるのは何かな、と考えたとき、哲学とか思想に興味もあって哲学科に1年間いったのです。けれどもそこでやっていることは、博物館に陳列するためのような事でした。そうではなくて、もっといろんなことを広く勉強できる場としての大学はどこにあるのかな、と考えているときに、お亡くなりになった梅根悟先生の事を知り、和光大学に行けばそういう場が得られると思ったのです。

小沢(有) そういう理由をお父さんに説明しましたか。

嶺 しました。最初の大学を受けるときに、父は哲学をやることには絶対反対していましたから。「文系なら法学か経済だ」と。それで、なんで自分は哲学に興味を持つのかということは、説明したつもりなんですけど伝わってはいなかった…。

小沢(牧) よりよく飯が食えるためということは、はっきりしているのですね。

永畑 父親についてはもっと深く掘り下げたいですね。お父さんとはなぜ会話していないのか。お父さんはすごく言葉が不足しているのね。そこはあとで極めましょう。

## 娘と母の間

松下 大学には行って、私にとって大きなウェイトを占めていた道を変えたな、と思うことは、家を出たということです。両親とのけんかが絶えなかったからです。

私が家の中でどんな位置を占めているのかな、

と考えたとき、親が手を掛けなくては自分のことが何もできない子ども、という目で見られています。過干渉な事に耐えられません。兄の言葉に傷ついたこともあります。それを母親にいても「お兄ちゃんなんだから、そんなふうには傷つかなくてもいいじゃない」とたしなめられます。私は何か考えついたことにも、「またそんな浅はかな！」と言われ、何か言うと私は傷ついてしまうのです。学校でいいことがあって、家族に言っても考え方が違うので自信を無くしてしまいます。そんなことを考えると、私は認められていない存在なのだなあ、という感じがしましたね。

だんだん大きくなっていくにつれて、親に言えない秘密ごとが多くなっていくように思うんです。言いたいんだけど、言い出しにくいということもあると思うし…。そういうことが、両親にはなかなか解ってもらえません。親は我慢しきれなくなって、私の見えなくなった部分を教えてほしい、見せてほしいということになってきます。掃除を装いながら私の部屋には行ってきて、結局いろいろ見ていたりするのです。そうではなくて、私が話し出すまで待っていてほしかったな、実際に私に聞いてほしかったな、という思いがあります。

家族は、父、母、兄と4人ですが、こぞって私や、私の友人のことについて口を出してくるので、いたたまれなくなり、けんかになってしまいます。その時、母と兄から「おまえなどもう出ていけ」といわれてしまいまして、家を出ました。もう丸2年になります。

父親とは以前から全然話さなかったもので、今どんなふうを考えているのかも、母親を通じてしか伝わってきません。

私は、距離をとりたくて、関係を改善したくて家を出たのですけれども、2年というのはまだ短いなということを感じています。私はまだ学生という身分、養われている立場で、そこを握っている両親に、なにかの機会につけて揺さぶられてしまいます。奨学金申し込みのために、就職したば

かりの兄や、父の所得証明書が欲しかったので、母親に相談したのです。ですが「やめてほしい、お金が欲しいなら家に帰ってきなさい」っていわれました。私は、家族との今の位置付けから離れて、ひとりの人格としていい関係が保てる状態になったときなら、もう一度、家庭に帰ることはできるのですが、今の状態だと前の関係に戻ってしまいそうで、こわくて、とても困っているのです。

そのへんのことは、きちんと話していないので、なかなか解ってもらえません。今朝も、「あなたは自分の事ばかりしか考えていなくて…、社会は甘くないのよ」という言葉を受けました。でも、今4年でもう就職ですし、アルバイトをして行けば食いつないでいけるだろうと甘く考えて生活しています。

原田 家出してから、親からは経済的援助はなし？

松下 母親から3万円、月一回家に帰ったときにもらえます。家を出たばかりの頃は全然帰らなくて、3、4か月に一度、3万円もらっていました。学費は父親から出してもらっていて、それで助かっていますけれども…。前から家を出ようと思っていたので、貯金が30万円以上ありました。それをくずして生活していきました。

▼ここで、永畑さん、小沢(牧)さんから、松下さんの紹介がありました。松下さんは、2人の登校拒否の子どもの家庭教師を続け、大学合格に導いたキャリアがあります。彼女の「子どもと付き合う力」〈小沢(牧)〉は抜群です。「親の知らない」素敵な側面をお持ちのようです。

### 親の気持・子の気持

小沢(有) 親と子のいい関係といわれたでしょう。どういう関係がいい関係だと思いますか。

松下 思ったことを率直に、同じくらい力で言い合えたらいいなって思います。

小沢(有) 僕も3人の子の親ですが、親は、いろいろへたな言い方をしますけれど、心のいちばん

底では、子どもによって生きることを励まされているのですね。そのような事を想像したことはありませんか。

松下 そういったかたちではあまり…。

小沢(牧) 松下さんは、「家族じゃないか」という台詞がいやなのよね。その言葉で、小沢有作さんが今いわれたような人間関係を丁寧に積むということをサポートしてしまうというのかしら。

松下 そうですね。自分の気持ちが家族の中では全然生きていないというか、つぶされてしまうのです。

小沢(有) でもね、僕は自分のこともいっているのだけれど、父親っていうのは子どもに対すると、発言が不器用にぶっきらぼうになる。「家族じゃないか」と言ったとき、家族だから子どもの気持ちを認めないといっているのではなくて、だまっていたわろうという気持ちがあるわけでしょう。何で、子どもに対していちいち学生に講義するように丁寧にいわなくちゃいかんのか？(笑) 子どものほうだって親のことを解ろうという気持ちをもってほしいと思うのですよ。(笑)

松下 そうだと思いますけれども、傷ついた時に、傷ついた気持ちを家族だからということできくって欲しくないと思いますし、家族の中でもやめてほしいことはやめてほしいし、言うてはいけないこともあると思います。

小沢(有) でも、言うてほしくないということ、言われないと気がつかないということがあってはないですか。

小沢(牧) そうというのは、松下さん、さんざん言っているのよね。

永畑 だから、ずれ、ですよ、ここは。

松下 母親や兄とは、高校時代かなりたたかっていました。私の中学時代は、ほとんど人生を母親が決めてきたところがあるんですね。部活とか塾、習いごと、高校さえも全部。そのことの意味はいったいなにかな、と問い始めたのが高校のときで、かなりたたかたり言ったりしてきたつもりなの

です。

嶺 さっきと掌をかえすようなことになりますが(笑)、実は父が「あいつは7年かかった」といってもなお学費を出してくれたりしています。やはり子どもが親の生きる力になるというところがあるというのは、その通りなんだろうと思います。

父も決して好きで会社員をやっているのではないよだということが、最近わかってきたのですが、それでもなお働いているのは、自分が生きる上で、家族というのはかけがえのないものなんだなあと思います。

ただ松下さんのいうように、僕の父も家族は一心同体のように思っているのですが、それは幻想なのではないか、家族という幻想の中で父は生きているのではないか、と思うのです。なんでかなといま思っていたのですけれども、親は自分で配偶者を選んで、自分でつくった家庭なのだという意識があるわけですね。だけど子どもにとっては、自分で選んでその家庭にはいつてきたわけではない。そこに意識の差というものがあるのではないかと思うのです。

子供からみれば、親というのは小さい頃は親だったのですが、年をとってくるにつれて、だんだんだだの親ではなくなってきました。月並みな言葉で言えば、一人の男性であったり女性であったり、というような言い方ができるようになるのです。ですが、親にとってみれば、いつまでたっても子どもは子どもという視点に立ってみている、と今思ったのです。

### 親の学校化と子の不登校

T 父に、あるとき、「おまえが結婚相手を決めるときは、親のほうが人生経験を積んでいるから親に任せたほうがいいんじゃないか」っていわれました。俺は、「俺の生き方があるんだから」と返しました。半分は冗談だったのでしょうけど、目がみように真剣だったような気がして…(笑)

僕の母さんは今年で51歳になりますが、女に学

問はいらないという家庭で育ちました。結構成績は良かったらしいのだけれど、親が学校には行かせてくれなかった。勉強はしたかったのに、学校へ行くための自転車も買ってくれなかったし、辞書の1冊も買ってくれなかった。今でもたまにそう言います。

父さんのほうは、僕のおじいちゃんという人が女をつくって家を出ていってしまって、おばあちゃんという人も男をつくって出ていっちゃって、僕の父さんがおじいちゃんから生活費をもらいながら14、5歳のときから妹と弟を養っていたらしいのです。父は本当に大変な生活をしていただと思います。

そのおじいちゃんが1年くらい前にひょっこり尋ねてきて、新しい事業を始めるための借金の保証人を父に頼みに来たのです。おじいちゃんは借金をしてもなかなか返さないけちな人らしいのですが、僕の父さんは「親子なんだから保証人になるよ」というのです。父さんにとっては、それだけひどいことをされても、親子という結びつきのほうが強かったみたいです。

僕はそういう両親の下でものごく期待されて育ってきたのです。両親は結婚する時に、自分たちの経験から、お互いがひどい人でも絶対に別れることはやめようということだったらしいのです。そして理想というのでしょうか、子どもをいい学校に入れて、いい就職をさせて…。僕も小学校の時だけはまあまあ成績が良かったので、そう思っていたみたいです。

そのあと僕は学校へ行かなくなったりして、去年「風の子学園」事件ってありましたけれど、僕もああいう所に行くことになりました。それから親を信じられなくなりました。小学生や中学生の頃は、親は最後には助けてくれる存在というイメージがありました。施設に行くことになったとき、助けてほしかったというのは変だけど、死ぬまでつきあってほしかった。それがそうじゃなかった。今になって、親がその施設の人にだまされたと

ということがわかりましたけれども…。

僕のおやじはまじめを地でいくようなひとで、酒は飲まない、煙草は吸わない、賭け事なんかはまったくしない。それで、僕だけが生きていく上で楽しみだったみたいで、そのおやじが2年くらい前、「もういいかげん仕事をやめたい」と言い出したのですね。「ほんとうに疲れた」そう言いながらも、今も仕事をしているのですけれど。そのおやじは僕から見て、日本そのものという気がするのです。家族のため、人のためになることがいちばん生き甲斐になる人ですから。そういう人がもう疲れたなんて言い出したのですから、これから日本はもう伸びないなんてちょっと思いました。

これからどうするかということも決めてなくて、親に甘えて生活しているのだけれども、親も死ぬときがくるし、僕も一人で生きていくだけの力をつけなくてはならないし…。今、そこのところをどうしようかと思っているところなのです。

山部 お父さんはどんなお仕事をされているのですか。

T 郵便屋さんです。今は勤務表、シフトを組む仕事です。労働基準法に違反しないように、年休や週休を調整します。でもおやじは、家に帰ってまで仕事しないとおいつかなくて、いったい何のために勤務表を書いているのだろうと思ってしまいます。

▼Tさんは、自らの足で、北海道からあちこち自分の入った施設の事を調べているということが小沢(牧)さんから紹介されました。彼はその過程で、自分と同じ境遇の人達と出会い、その親と話を交わす中で、時に共感を覚え、時に自分たちの想像もつかないような過酷な時を生きだした世代があることを学びました。

T 風の子学園事件ってありましたけれど、ああいう所ですね。死人がでなかったというだけで。昔自殺した人がいるということは聞いたことがあります。宗教、キリスト教とか仏教とかいろいろなことがごちゃ混ぜになっていて、わからないとこ

ろです。また、悔しいことにまだそこがやっているのです。やっぱり捨てられたというか…。今はそうは思わないのですが。親子が切羽詰まった時に、その施設のの人に商業的利益から一つの罟を置かれてすがりついた。でも、そういう所だからこそ、捨てられたと思ったのかもしれない。

小沢(有) それは、あなたのほうからすれば見放されたという気持ちかもしれないけれど、親のほうからすれば、この一本の藁にすがればわが子が救われるかもしれないという気持ちだった。

T それはほんとうについてこの冬あたりにわかったばかりです。親とその話をすると、お互いどんどん険悪に、暗くなっていくので、しないようにしているのです。

小沢(牧) さっき小沢有作さんのいわれた「救われる」というのは、親にとっては、子どもが学校に行くようになるということだったのじゃないかなあ。学校へ行かないというのは、大変なことで、そこに親と子のギャップがあるのかもしれませんが、彼がそこところにこだわっていかに苦闘してきたか…。

T いまだに言われるんです。こうやって「あちこちふらふらするのにお金つかうのはもったいないけれど、専門学校なんかで何か身に付けるのなら無駄じゃない」って。

永畑 Tさんのいまやってらっしゃる仕事は、是非まとめてかたちにしてほしいですね。3人のお話に共通しているのは、「親の学校化」というテーマに結びついていきますね。

▼Tさんは大学には在籍していませんが、小沢(牧)ゼミに毎回出席する熱心な青年です。〔小沢(牧)談〕

### 親と子の喧嘩 —高校生の場合—

吉岡 親とは意見が合わないことが多くてよく対立します。大喧嘩して3か月くらい口をきかないこともあります。喧嘩をしたり、仲良くなったりの繰り返しですが、週に2、3回は喧嘩で、ほん

とうに家を出ていきたいと思うこともあります。

原田 どんなことで喧嘩するの。

吉岡 台所で弟と二人でいるようなとき、母は私にだけ家事を手伝うようにいうのです。「女の子らしくしなさい」とか「おとなしくしなさい」といって。でもそういうのって好きじゃありません。男女差別ということもあるし、弟にもどんどん家事をさせてもいいと思うのだけど、いわれるのはいつも私ばかりで、それで喧嘩になってしまうんです。

けんかをしていると、いつのまにか話はズレていって、あのときはどうだったとか、昔の話などが出てきて(笑)、それで大喧嘩になってしまうのです。それから1か月くらい何も話さなくなって、最後には母のほうから「ずっとこのままでいいの」って言ってきて、少しは話すようになったのですが、それでも必要なこと以外は話さなくなってしまうました。

原田 弟さんとお父さんお母さんは喧嘩しないの。

吉岡 全然しません。両親は差別しているように思っていないらしいのですが、私からみると弟ばかりひいきしているように見えて…。

小沢(牧) 松下さんの所に似ているのねえ。

松下 おにいちゃんと母はすごく仲良しなの。二人で結託して…(笑)。一人一人離れているとあまりひどい喧嘩にはならないのですが…。私と兄が喧嘩していると母がサッとはいってきて二人に問い詰められてしまうから、私は余計に辛くなる。私もそんなときは手伝いなんてまったくしませんでした。

▼ここで原田さんから吉岡さんの紹介がありました。吉岡さんは気丈で、母親とも対等に喧嘩する。嫌いなことは絶対にしない。自称ちょっと変わった女子高生です。

吉岡 喧嘩するたびに出ていけって言われるんです。

永畑 ひどいわよね、それ。私もそこにいたらどうしようかと思うわ。それでいまたたかっている

のよね。

吉岡 最近、差別しないでとか、どんだんいうので少しは変わってきていると思うのです。

小沢(牧) そういうことがあの子はいやなんだなあ、ということがわかってくるのよね。

### 装いあう親と子 —大学生の場合—

日高 実は、僕には子どもがいなくて、いないのにそんなことがわかるかっていわれると困ってしまうのだけれども…。今日来てくれた人たちは、わりと不満児が多いけれども、他の友達とかはどう？

松下 不満のほうが多いです。

日高 すごく自分の家庭に満足している子がいるとすうでしよう、大学生であれ、高校生であれ。そんな子を見ると、あなたはどんなふう思う？ ずいぶん嫌らしい人だと思う？ それとも羨ましい、いいなあと思う？

松下 率直に言って楽ですから、家庭にいて安心できるというのはいいなあと思いますね。

日高 ベタベタして嫌だなあって、そういうふうには思わなかった？

松下 昔は思っていました。『大草原の小さな家』みたいのは必ず消していましたね。(笑)あんなのは理想だ、現実じゃないといって。今は普通にみることが出来ますけれども。

T 高校時代の友達で今はオーストラリアにいますが、彼女の家庭は、両親共に愛人をつくりたりして、なんども崩壊しそうになりました。でも、その家庭にはなんでも話せる雰囲気というのがあります。そうした、自分がいても大丈夫だという空間があることは、お金があるなんていうことよりも、大きいことだと思います。

日高 逆にいうと、反抗しないと人間って自立しないところがあるね。

永畑 いちばん楽なのは、いい子でいることをぶっている、ことかしら。それと、夫婦共にいい父親、母親であることをなんとなく装っていると、

そこの家庭は波風立たないで維持される。楽かもしれないですね。それが今では非常に多いのではないかという気がするのです。

日高 でも、さっきは、わりと不満を持つ人達のほうが多いと。

永畑 親にはそういう顔は見せない、友達には本音を明かすのよね。

松下 うまくやっていますよ、みんな。「そのほうが賢いにきまっているじゃない」って言います。

永畑 そうね、きょう来てくれた人は正直な生き方をしたということなのかしらね。

小沢(牧) いま日高先生が言われた、「反抗しないと自立しないのではないか」ということなのですが、大人のほうは、反抗期であるとか青年の自立のために必要なことというように、上から余裕をもってみていますけれども、必死でやっている子どものほうは、やっぱりズタズタになっているのではないかと思うのです。

時が問題を解決して、やがて子どもが親を許すときがやってくるのだけれども、それは親の子どもへの甘えであると感じますね。

### 親の生きざまを知ることをめぐって

小沢(有) 僕が学生に要求していることは、父、母の生きてきた道、生活史を聞き書きせよということ。子どものほうから親に近づいて、生活者としてどういう苦労を経てきたかということを引き出してほしい。他者の苦労がわかるようになれば、自分で自分に卒業証書を与えてよい、といっているのです。

▼この後、西沢、上田、石川、大和田さんの発言の中から、「親の生き様というのはどうすることによって子どもはつかんでいくのだろうか」という話題になった。

小沢(牧) 親の生き様というのとは語られてわかるというのではなくて、一緒に暮らしている中で感じるのですよね。だから子どもは漠然と把握していて、親から面と向かって自分の生き方は

…と言われると、これはもう嫌味になる。子どもは、聞きたいことは自分で聞いてくると思うのですね。聞くことが必要なとき、親をつかまえて聞いてくる。その時、隠さず一生懸命に答えるしかありません。親から語るという場合、多くは、子どもは我慢して付き合ってくれている以外の、なにもものでもないのではないかしら。

小沢(有) 僕も親から押しつけたら逆効果だと思います。ですから、小学生の時には小学校の先生が、中学生の時には中学校の先生が、一度は親の生活史を聞いてくるように組織してほしいのです。そういうチャンスをつくる。これは大事な教育だと思います。

それと、にじみであるというのは解らないですね、やっぱり言語化しないと一。

▼はたして、親の生き様というのにはにじみであるものなのでしょうか、問い尋ねて初めて引き出すことができるものなのでしょうか。

嶺 僕の場合には、どちらかということはいけません。父のほうからは話してきません。権威者ですから。父のことを知るのには、祖母、あるいは母からです。さっきの、「人が4年かかってやることを7年かかった」というのは、実に父らしい言葉だなと思うのですけど。

ただ、父が考えるうちの家庭というのは、父が生き様を語る場としては決して機能しないと思います。自分の生き様を語るというのは、「ひとりの人間として」だと思いますから。

松下 私は、父親が自分のことを語るときに、苦労話をどちらかというと思を着せるような言い方ばかりされて、耳にタコができるほどでした。もしかして、また聞いたら別の話が聞けるかもしれないけれども、その話しばかりだからもういいやとなるかもしれません。それと、そういう話しを率直に聞けるような関係が父との間にはできていないので、聞いてみたいとは思っているのですけれども、まだ実現してはいないですね。いざ語られるとなると、照れ臭くなるという部分が私にはあります。



母親には以前に聞いたことがあるのですが、どうしてもいいたくない事があるらしくて、なんでなんだろうとは思いますが、あまり聞こうとはしません。

小沢(牧) 子どものほうが親を尊重しているのよね。

▼Tさんは、お父さんの働く郵便局で、一緒にアルバイトをしたことがあります。時は正月、郵便局が一番忙しくなります。

T (親の生き様が)にじみでてくるのかどうかということは解りませんが、親父が真面目だということは家でわかっていました。職場でもそうでした。昼休みにみんな話をしたり休んでいたりに、親父と同僚の2人は電話の対応なんかをずっと働いている。うちの親父はこんなに働いているのかと思いました。

そういう真面目な親父が、いつだったか急に「僕は若いころは植木等が好きだったんだよな」っていうのを聞いて(笑)、イメージが全然合わなくて、知らなかったなあと思いました。

### 「以心伝心」から言語表現へ

日高 ヨーロッパの親は、親のほうからひとりの大人として、積極的に自らの経験を子どもに語って聞かせますね。有作さんの言葉で言えば「言語表現」を大切に、それがなければコミュニケーションができないという信念があるのですね。これはヨーロッパ社会が異民族から成り立っているため、教育の場でも討論が非常に重視されます。比較的、等質的な側面の強い日本と異なるところです。日本では、以心伝心ですからね。そうした習慣のないところで、親から語ることも、子どものほうから聞くことも、照れ臭くてなかなかできないのでしょう。しかし、表現のないところで相手のことはわからない。ただ、いま、そうした背景を持つ日本で、親に注文ができるのかということなのでしょう。注文したほうがいい、というのが有作さんの提案だと思うのですが。

▼日高さんのお話を受けて、永畑さんが表現することの重要性、それを育む教育のありかたを力説されます。

永畑 日本の小学校から大学に至るまでの、討論の全く行われぬ授業のあり方は間違っていますね。学生に意見発表の場がありません。ゼミ形式でやっていかななくてはならないのに、そこをカットしてしまえば、表現力が身につけません。教育総研の一つの目的にもなると思うのですが、子どもの側からどんどん意見をいえるようにする授業への改革がなされなくてはなりません。

▼親と子のあいだの「言語表現」の欠落。それを埋めるものは、何なのでしょう。

原田 仕事で疲れきっている親は、子どもと充分なコミュニケーションがとれず、時には拒んでしまうこともあります。最近の親はそうしたことの穴埋めに、子どもを海外旅行に連れていったり、大きな物を買ってあげたりするのですね。

でも、本当に子どもが求めているのはそうしたものでしょうか。親とすれば、「それだけしてあげているのだから満足でしょ」「朝はつらいのだから、かってに起きて御飯食べていって」となってしまうのですが、子どもは、ほんとうはお母さんが眠くても起きてくれて、一緒に御飯を食べてくれること、これが子どもにとっては楽しいこと、幸せなのですね。

### 日本の親子・ヨーロッパの親子

▼「会話」のままならぬ家族、親も子もお互いに、心の底では様々に語りかけているのに、それが「声」としてはとどきません。

コメントを求められた学生側、松下さんの口元からふと漏れた言葉は、人間関係の絆を最も強く保つはずの家族の中で、今は逆に自分の存在が遊離していくことへの不安を訴えているように思えます。

松下 家を出てから、私は家族に何を求められていたのかなあ、ってずっと考えていたのです。

永畑 それはすごく大事なところね。その辺のところをひとりずつ語っていただいて、そろそろ時間がやってきたようですから、最後にいたしましょうか。

嶺 いい生き方、いい人間になってほしいということを、父も母も思っていることは間違いないと思います。父は父のかたちとしてですが…。エリート志向というか、父親の基準で考えたものの言い方を僕にしてくる。僕は、父をもう、そういう価値基準を持った人だと思っていますから、そのことに対して腹は立ちません。けれども俺は絶対そういう生き方はしたくはないし、認めない、という形に変わってきていると思うんです。

日高 ある意味では、子どものほうが親のことをわかっているのですね。

松下 家を出て、これからひとりでどうしていかうかというときに、親はなぜそれほどまでして帰ってこいというのかなと思っているのです。

小沢(牧) 松下さんの理解では、“やっぱり世間体”ということなのよね。でも、もしかしたら、実はもっと深いものがあるのかもしれない、思い直しているところなのですね。

T 親にいろんな不満をぶちまけていた時期があったのですが、その時、母さんに「あなたはさぞかし立派な親になるでしょうね」と言われて(笑)、何も言えなくなったことを思い出しました。

吉岡 これからは、意見が分かれることがあったら、喧嘩をしないでなるべくなら話し合いで終りにしたいです。そうすれば家族の仲ももっと良くなるし、出ていきたいと思うこともなくなるからです。

今までは相談したいことがあっても、全然違う事が返ってきてしまうのではないかなと思って、話すこともなかったのですが、親の気持ちなどを考えて、それにあわせたりとか、趣味などにも付き合っ、親のことをもっと知っていこうと考えています。

▼有作さんが乗り移ってしまったかのような発言

に、会場は笑いの渦につつまれます。

小沢(有) それで、夜、クリーニングの仕事にお母さんが疲れているとき、「お母さん疲れた?」と行って、肩をポンポンと叩くと全部解決するよ。(笑)

小沢(牧) 小沢有作さん、そんなふうで解決する必要はあるのですか。それでは終わってしまいませんか?(笑)

小沢(有) いやいや、そこが始まりなんです。心が優しくなるんです。

永畑 お母さんをひらいていくのですね。

小沢(有) あなたのほうから心を開いていったら、親のほうはもっと開かなくてはどうかって、あなたの言う事もよく聞いてくれるようになると思いますよ。

日高 いま話し合われている親子の関係というのは、たいへん日本的なものです。たとえばヨーロッパでしたら、18歳になって大学に入るようになったら、子どもは必ず家から出るわけです。でも日本、特に女性の場合でしたら、家から通えるような距離なら出しませんね。習慣ですね。

子どもというのはどうしても自分たちからはなれていくものであるから、夫婦を大事にしますよ。日本の母親は、親父さまには全然興味がなくなってしまって、子どもにしがみついているのです。困ったことなのです。

家を出たからといって決して親子関係は悪いわけではなくて、むしろ逆に、しょっちゅう家に帰って親の様子や面倒を見てね、年をとればとても大切にします。日本よりずっと親孝行です。

山部 出してやりたくても、東京の住宅事情などを考えるとね…。きょうはもっと突っ込んで考えていきたいこともありましたが、それは今後の課題としてやって参りたいと思います。どうもありがとうございました。

## 第2回夜間公開研究会

# いま、子どもの文化は…

—学校との大きなズレのなかで—

1992. 5. 22

P.M 6:00～8:30

お話 齋藤 次郎氏(『三輪車疾走』主宰)

伊藤 書佳氏(ロックシンガー・「造反有理」)

原田瑠美子氏(高校教師)

司会 小沢 牧子(教育総研メンバー)

司会 今日第2回目の公開研究会になります。第1回は「家庭の学校化を問う」というテーマでいたしました。

学校はもちろん学校的ですが、家庭などの学校の外の社会が学校的、学校っぽくなっているということ、そして家庭は学校の下請けをする場になってしまっているのではないかと。学校5日制がスタートするわけですが、5日制を取り巻く状況は、どうも社会全体が家庭も含めて学校化しているのではないかと、ということがあります。そのあたりを第1回研究会で報告して下さったのは不登校の子ども達の居場所を5年間主宰してこられた奥地圭子さん。それから今日もみえている東京シュールのみなさんに話していただいたわけです。

今日のテーマは「いま、子どもの文化は—学校との大きなズレのなかで—」というものですが、1回目を受けて今日の2回目を考えますと、社会全体の学校化は確かに存在しているし進行しているのだけれど、でも決してそれだけではない。そ

の学校化した社会のなかにそうではない部分とか、学校の内と外との大きなズレというのが一方では確かに存在している。それはどういうことかと言えば、非常に保守的な学校が社会に支持されているということと関係していると思うのですけれども、非常に保守的な価値観、風土を抱えた場所になっている。でも学校の外は非常に大きく動いていて技術革新だとか消費文化であるとか、あるいは若い世代の自発的な動きとか、いろいろなものが渦巻いているのも事実なんです。その新しい動き、学校的でないものと学校の中と非常に大きな亀裂があって、その狭間で子ども達はさまざまに苦勞したり、そこを渡り歩きながら擦り抜けながら、いろいろなものを生み出しながら暮らしている。そういう文化の現実があるわけです。その辺りを今日は3人の方に発題者として来ていただいてお話を手がかりにして、じっくりとみんなで話し合ってみたい。それぞれの立場を生かして、つまり子ども、若い人の立場、親の立場、教師の立

場そう言うものを引き合わせながら十分に話し  
ていきたいと思ひます。それではさっそく発題に  
移っていきたく思ひます。

最初に伊藤書佳さんにお話ししてもらひますが、  
伊藤さんは「トーキング・キッズ」というものを  
2年間主宰されてきた23歳の若者です。そして本  
を書いていらっしやって、一番最近の物は『子ども  
も発、知りたく国連 子どもの権利条約』、『超ウ  
ルトラ原発子ども』とタイトルがやっぱりナウい  
ですが、そういうものを書いたり、いろいろな所で  
若者代表というような感じで活躍されておひます。  
それではよろしくお祈ひします。

### 子どもにも言わせて

伊藤 こんばんは、伊藤書佳です。チラシにロッ  
クシンガーと書いてあったと思うんですけども、  
私はバンドをやっている、ライブをやっているとき  
に永畑道子さんとお会って、永畑さんはシンガー  
とお思ってくれているので(笑)、そう書いてありま  
すが、今日私は歌を歌いにくるのかなとお思ひたの  
ですが、ここでは演奏ができないので一人で来ま  
した。私はバンドをやっているのですが、同時に  
「トーキング・キッズ」というテレホンサービスを  
やっています。資料の中に「子どもにも言わせろ  
ホットライン」という紙があると思うんですけども、  
そこに詳しく説明が載っているのでお後で見ても  
もらえたらと思ひます。私は中学2年生の時に学  
校に行かなくなつてから、学校って嫌だと思ひな  
うようになって、学校に行かなくなつてからはい  
ろいろな人とお会ったり、いろいろな所に出かけたり  
して、自分でおもしろいとお感じることをやって  
きました。今私は23歳なので、学校に行つて行  
つてないということは会話のなかに出てこないの  
だけけれど、同じように学校に行つてない人が4万  
8千人と新聞に出てたりして、実際はもっといる  
とお思ひし、高校を中退しちやった人はすごくたく  
さんいるとお聞いています。実際私の周りにもすご  
くたくさんいるけれど、私が学校に行かなくて苦し

い思ひをしたのと同じ思ひをしている人がまだた  
くさんいるんじゃないかとお思ひて、そういう人  
に出会つて一緒に楽しいことをやっていきたくお  
思ひてやっています。どんなことをやっているか  
という、留守番電話に小学生から高校生くらいま  
でいろいろな声が入ってくる。その声を聞いて、  
たとえば学校に行つてない子について考える番組  
の時には、学校に行つてない人のいろいろ声を電  
話で流したりするのです。実際どんな声が入つて  
いるのかちょっと聞いてもらひたいと思ひます。

(テープ放送)「僕ってさあ、いじめたんだよね、  
ずっと。いじめられている人も明るくした方がい  
いとお思ひんだよなあ」(男)、「えーとミワです。さ  
っき聞いてたら登校拒否しているのも勇気いると  
お思ひたけれど、そういう勇気があるんだつたら学  
校に行つたらどうなんですか」(女)、「登校拒否と  
かしてみんな言っているけれども、本当の登校拒否  
つてのは、私はそうなんだけれど、本当に学校に  
行こうとすると、吐いたりしちゃうのだけれども、  
ただ行かないことを登校拒否つて言わないでほし  
いとお思ひます。そういう人たちもいるということ  
を分かって、勝手に登校拒否とお思ひていじめない  
てください」(女)、「登校拒否とかやっている人は  
家でなにをやっているのかなつてお思ひ」(男)、「えっ  
と、私今登校拒否をしています。この電話に何回  
かけても話し中のことが多くて、私みたくにずつ  
と家にいる人がたくさんいるのだからお思ひまし  
た。それに私たち学校に行けない人たちを弱い者  
つてきめつけないで欲しいです。だれも弱くて行  
けなかつたりしているのじゃないし、自分の意志で  
そういうことをやるんじゃない。弱いつて決め付  
けないでほしい」(女)

もっといっぱいあるので聞いてほしいのだけれ  
ども時間がないのでこれくらいで。

今は学校に行つてない子の声が入つてたけれど、  
他にもいろいろなテーマで番組をやっている、い  
じめを解決する「いじめバスターズ」とか、恋愛  
とかセックスについて話す「ボーイ&ガールズ」と

か、学校の困った先生についてその先生を退治しようという「こま先行動」とかの番組が電話番号を回すと流れるんですね。1990年の3月から始めているのでもう2年たっているのですけれども、そこで電話を聞いていた人たちが事務所に遊びにきたりして、スタッフになって、いま12、3人くらいいて、だいたい小学5年生の時から学校に行っていなかった子とか、高校生の子とか。学校に行っていない子は結構時間があって、来て一緒に番組を作ったりします。

電話を聞いて自分が思ったことを留守番電話に入れていくというのは、直接的なコミュニケーションではなくってあんまり私の好きな方法じゃなくて、本当は直接会って話ができたら一番いいなと思うのですけれども、いきなり自分が学校に行っていないこととか自分がいじめられていることとか言えない人が多いので、電話を通じてそういうことを話してもらえる。先生とか親とか友達とかだと今後の付き合いのこととか考えちゃうと本当に苦しい気持ちとかをさらけ出して言えないけど、電話だとあんまり利害とかないから言えたりする。私も学校に行っていなかったということも番組で何回も言っているのです、そういう人なら平気、自分が思っていることを言ってもおかしいと言わないんじゃないかと思ってくれる人も多いみたいです。こういうふうに分の本当に言いたいことを入れてくれるのですけれども、それだけじゃつまらないので、聞いている人同士が会える機会というのも、イベントをしたり、旅行にいくツアーを組んで集まったりして、電話の声だけしか聞いたことのない人とか70人くらい初めて会うことを2回やって、今年も夏にやろうかなって思っています。

みんな日本の中とか世界の中で起きていることにすごく敏感で、たとえば兵庫県の高塚高校で校門に女の子が挟まれて亡くなったときには、ぜひとも「トーキング・キッズ」で取材してくださいという電話が入ったりして、スタッフの人が高

塚高校まで行って取材してきて、みんながそのことに声を入れたりした。風の子学園という所でコンテナに閉じこめられちゃって2人の子が亡くなった時にも、それについても学校に行っていない子の施設を作ること自体が、厳しくされることが嫌で学校に行かなくなった子達なのに、そういうふうに厳しくしたり、なにか直そうとするのはやめてほしいという声も入ってきいたりしました。あと湾岸戦争があったときに、戦争が嫌だと思うから自分たちでなにかできないかといって電話を通じて呼び掛けたりして、毎週30人くらいの人が原宿の歩行者天国で戦争を止めようというパレードをやったりもしました。そういういろいろなことを毎日ラジオを放送しながらやっています。

### 学校現場から見た子どもの変化

司会 どうもありがとうございました。人と人との新しい出会い方だと思うんですね。私なんかの年代では決してなかった形ですね。でもやっぱり人は人に出会いたい、そして出会って何かをやっていく、作り出していく、行動していくというのは同じなんだろうと思います。後で話を広げていただきたいと思います。

次に話していただくのは原田瑠美子さんです。22年間学校の先生をしてきた方です。私は女性民教審という活動をしていたときのお友達なのですが、全然先生らしい感じのしない先生の少数のうちの一人だと思うんです。原田さんは理科を教えてこられて、どういうふうにして子ども達と理科の授業を通して出会っていくかという本も書いた人です。『ルミ子先生のわくわく授業』を出していらっしゃいます。それと性の問題、これは大人でも子どもでも性の問題というのは一生あるわけだけれど、人間と性の問題を長らく取り組んできておられます。単に性教育ということだけじゃなくて、そういうテーマで考え、活動しておられます。もうひとつどうしても紹介したいのはフラメンコダンスの名手で、もう10年ほどやってきておられ、

さっきうかがったらアマチュアコンクールに今度出られるので、入賞して新聞にも載るかもしれない、フラメンコダンスの名手でございます。

原田 原田瑠美子です、こんばんは。今お話がありましたように、女性民教審で小沢牧子さんや永畑さんと一緒にやっていました。紹介の中にありましたけども、教師になってもう22年、最初は男女共学の学校にいました。その後自分の出身校である、私立の女子校の東横学園中高校にいます。理科を教え、そして教師になって10年くらいたってから自分の担任をしている生徒が妊娠したということのをきっかけに性の問題を子どもとともに考えていきたいということで、性の問題にもいろいろ関心をもって研究対象として活動しています。

### 「生徒する」子ども

この22年間の生徒の変化について話したいと思います。私が教師になったのは1970年なんです。そのときは化学の授業の中でも、「先生、沖縄返還についてどう思いますか」って質問が出るほど、高校生でもかなり社会や政治の問題に関心を持っていました。文化祭なんかでも社会的なテーマを取り上げたりして、むしろ私は教師になって子ども達と接する中で、そういう問題に気付かされたという感じだったんです。ところが大人達は、こうした子ども達の社会や政治に対する一途な思いを潰しちゃったわけですよ。だから、その後は政治や社会に目を向けるのではなくて、学校の中で、教師に反抗するためにつっぱってみたり、校内暴力という形になって現れました。私の勤務している学校でも、長いスカートをはいて、パーマをかけて髪を赤く染めて体育座りして、教師から注意されると「うるせいよお」と、女子でもそういう言葉を使って、教師に反抗する生徒がいました。ずいぶん生徒とやりあった覚えがあります。その時は生徒と体ごとぶつかっているなど手応えを感じましたね。それも学校に警察権力まで導入して押さえてしまった。その後はどうなるかとい

うと子ども達の中で、大人、両親といった権力のほうには立ち向かえないで、弱いほうへと目が向き、いじめの問題が出てくる。私の勤務する学校はいじめは少ないほうだけれど、いくつもそういう事例に遭遇しています。今は、いじめも表向き沈静化している。

では今何が出てきたかという不登校ですね。以前は何かあったら学校の方が、教師の方が処分という形で退学させてきたというのがあったのですが、そうではなくて子ども自らが学校に来なくなる。私は現在高校2年の担任をしていますけれども、高校1年の時5クラス中、7名の生徒がやめています。一人一人ケースは違うんですが、何か非行の問題があってやめさせたというんじゃなくて、生徒の方から学校に見切りを付けてこなくなったということですね。そして今子ども達を見ていると、一時期のような丸ごと学校の中で本音で教師にぶつけてくる事は少なくなりました。今の日本ではルールに乗らなければ幸せに生きていけないんだという思い込みなのか、そういう価値観しかなくて、ルールをおりるすべも知らずそれにただ乗っているという感じです。だけど学校では本当の姿を見せずに、まあ私はそれをレジメで「生徒する子ども」と使ったのですけれども、裸の人間の姿を見せるのではなくて、しょうがない学校に渋々来ている。だからそこでは生徒という役割を演じている、という形になっているという印象を私は受けています。ですから昔だったら校則違反をする生徒を注意すると、そこではかなり反発が返ってきたりして随分もめたりするケースがあったんですが、今は表向きはとても素直で「はあい、ごめんなさ〜い」って、でも後向いてペロをだしている。教師の目の届かないところで制服という枠はあるけども自由におしゃれを楽しんでいる。

### 目あてのない学校生活

今日の研究会の前に、生徒たちの状況をなるべ

く摺っておきたいと、クラスの生徒に「あなた達の読んでいる雑誌をちょっと見せて」と言って何冊か借りました。高校生がわりと読んでいる雑誌に『セブンティーン』というのがある、その中で「学校破りの術」「あなどれ校則」「あざむけ先生」(笑)が特集になっています。校則で注意されたときどうやってごまかすか、学校をどうやってさぼるか、さぼる時も母親の声真似をしたり、後で資料を読んでいただきたいのですが、こういうふうに知恵を絞って擦り抜けていくわけですね。22年間の長い私なりの教師生活で見ると、結局今の生徒がそうなのは、私達教師なり社会なりの側の問題じゃないかなというふうに受けとめています。授業は静かですね。騒ぐってことはないですね。以前だったら授業が成り立たないくらいおしゃべりしたり騒いだりしましたが、今は静かですね。教師が黒板に書くときただ黙々とノートに写します。知識を暗記するより、科学する楽しさが理科の勉強の醍醐味であって、いろいろな法則なんて暗記したってそんなのは科学のかすにすぎないのだから、自分で発見する楽しい授業ということで実験とか観察とか多く取り入れようとしているんですけどね。なかなかむずかしいですね。それでひたすらノートに写して暗記し、テストがおわったら全部抜けちゃう。本当の自分の力、生きる人間としての力にはなってないんじゃないかと思います。部活動もしんどいのでさっさと帰るといって、帰宅部という生徒が多いですね。もちろんそうじゃない生徒もいますが。そしてむしろ自分たちの楽しみは放課後の生活にある、と。本当にサラリーマンみたいな感じで、6時間おわると「はあ～、今日終わったなあ、疲れたなあ」という感じなんですね。それで放課後友達とマクドナルドなど、どっか寄っておしゃべりを楽しんだり、ショッピングをしたり、カラオケボックスに行って学校でのストレスを発散して家に帰るわけです。生徒たちがよく疲れた疲れたと連発するから「あんたどうして疲れるの」と私

は聞くんです。よく電車のなかでも若い女の子が居眠りしていますよね、なんでこんな疲れるのになって思いますが、生徒たちはなにしろ疲れる、疲れるって言う。何か自分に目当てがあって目的があってという学校生活ではないんです。私も生徒の側に身を置き換えて、6時間くだらない、くだらない授業もあるかもしれないけれど、黒板をただひたすら写して、何のためになるか分からない、でもこれを覚えてテストで点数とらなければ落第するし、大学行きたいという時に困るし、やらなくっちゃ、ということでやっているだけ。だから疲れるんでしょうね。そうやって疲れ疲れで高校を終え、大学も本当に学問するためじゃなくてやっぱり一つのブランドというか肩書きというか、最近女子でも4年生大学志望が非常にふえています。それ自体はいい事なんですけどね、やっぱりその中で何かを見付けようと目的もって大学に行ってほしいといつも生徒に話をしています。

### 先生も疲れている

そういう生徒を相手に先生もすごく疲れているんですよ。教師間であんまり教育論議というのはたたかわせなくなって、職員会議も上からの伝達だけで済んじゃうんですね。たしかに雑務が多くて物理的に大変だってこともあるんだけど、生徒と同じように教師も教育への夢が描けないんですね。昔すごく手応えを感じたことのあるベテランの教師ほど疲れているんですね。昔こういう授業をやったらこう跳ね返ってきた、自分の人生とか夢を生徒にぶつけたら、反応があった。ところが今は生徒たちはしら～としている。自分はなんで教師をやっているのかと自信を失ってしまう。だけど、じゃあ教師をやめて何かやるか、潰しがきかないからしょうがないなあ、給料をもらうために、教師も「先生」しているんですよ。この間、朝通学路で道いっぱいに広がって歩いていた生徒たちに、近所の人に迷惑かけるから「みんな右寄って歩きなさい」って注意したら、「あっ、今

日は先生してるね」とか言うんですね。だから「生徒」している生徒と「先生」している先生が表向き見える所だけで付き合っている。教師が注意したら「はいごめんなさい」と素直に従う。そして勉強も試験の時だけ真剣にとりくむ。教師の方も授業で知識を切り売りをしている。目に付いたところだけは注意をする。本当に丸ごと人間としての子どもと教師のぶつかり合いは、今の学校の中ではなくなっちゃっているのではないか、これは私自身の反省でもあります。私も22年間何回も教師やめたいなあということもあったけど、今一番つままないんですよね、教師をやっても。とてもじゃないからフラメンコで食ってくかって(笑)。でも、されど教師というか、学校の中で嫌なことはいっぱいあるけども子どもと触れ合えて新しい発見もあるしね、そういう状況の中で生徒とのふれあいを一番大事にして、管理職にいろいろ言われるけども、うまくすりぬけながら、子どもと本当のふれあいを作る、そんなことでまだ何年かやっていこうかなと思っています。

### 性教育を始める前に

今日は子ども文化ということで、性についても何か話してほしいと言われたので、次に学校での性教育の問題について私が考えていることを話したいと思います。今年の小学5年生の理科で「人の発生と成長」が取り上げられ、保健では「体の発育と心の発達」ということが取り上げられます。今まで日本の場合には初潮の指導とかという程度で、あとは性の問題を人間の生き方の問題として子ども達に語っていきこうという問題意識を持っている少数の教師が性教育に取り組んできた非常にマイナーな部分だったのが、指導要領の改訂で文部省で新しいものが作られるということなんですね。文部省版の「性教育元年」と称されていますが、これはある意味では性教育を進めていくチャンスであるんだけど、下手すると今まで以上に問題になるんじゃないかととらえています。今まで

はマイナーな部分ただだけにね、やっぱり問題意識を持った教師が性について深く考え、自己変革する中で子ども達に語っていくというところがあったんです。だから良かったけど、これからは教師全員が小学5年生を受け持った時、語らなくちゃいけないわけですね。だから教師たちは、この4月前にあわててしまい、私の所属している性教育の研究会のビギナーコーナーも超満員だったんです。どうやって性教育を教えたらいいのかということでも何かしたいという。でもやっぱりそうじゃないと思うんですね。子どもを取り巻く性の状況はどうなっているのか、さらに大きく言えば日本の性の文化はどんなのか、それからもっと言えば大人の性の今の問題は何なのかということをも十分踏まえた上でないと語れないと思うんですね。だから下手をすると上から、文部省から言われたからみんな一斉に性教育をする。一番プライベートな部分が、他の教科だっていろいろな工夫をした授業展開が期待されるけど、一番人間として大事な性の部分が画一的に教育されるのは非常に恐ろしい気がします。ですから性をどういうふうにとらえて、性のどういう部分をどうやって教えるかという討議が大人の側、教師の側で十分ないとなかなか子どもに語れないんじゃないかと思えます。

### 性情報のシャワーをあびている子どもたち

子どもを取り巻く性情報はふんだんにありますね。私が生徒から借りた女子高校生向けの雑誌には、ほとんど性の問題とおしゃれとダイエット、そして、占いとかが載っているという状況です。生徒から借りた雑誌を見るとね、ある意味ではいいんじゃないのかなというような気がしています。なぜこれだけ子ども向けの雑誌に性の問題が取り上げられたかということ、子どもたちが知りたいことを学校で教えないからです。少女雑誌の特集号だったのですが「知っておきたい女の子の常識」という性の問題を取り上げ、自分のことやみんな



の意識などが載っていて、「みんなのH意識」、Hというの性交のことを言います。昔は性行動をAがキス、Bがベッティング、Cが性交ですね。いまはABHと言ってなかなか妙を得た表現で子どもらしい軽いノリなんですね。大人側からすると性交までいく男と女の関係は人間と人間の一番濃い部分のぶつかり合いだからそんな軽いノリでHじゃなくて、もっと違うイメージで私なんかはとらえるのだけでも、若い子達は、Hなんですね。また初体験の時の気持ちを考える、避妊のこととかいうことが特集号で出ているのですね。たしかに露骨な性描写もあるけども、学校できちんと教えなかった、とくに性交切りはさけていて、生殖という位置付けの性教育だったのが、男の子と女の子のコミュニケーションとしての性とかで、子ども達の方が先にそういうのを受容し、またそれに応えてこういう雑誌が作っている。ある意味で開放されている面もあるんじゃないかという風に思います。とくに女子の雑誌にこういうことが載るといのはいいんじゃないかなと思います。下手に男の子からの受身じゃない、女性が主体の、そんな匂いなどもこういう雑誌の中で感じました。

でもマスコミからの性情報について気になることはあります。私が気になっているのは3点あります。もし何でもしていいと言われたら性行動の中で何をしたいかって、男子にアンケートをとっているんです。そしたら1位はバイブを使う、バイブというのはバイブレータのことですね、2位はビデオを撮って、それからSMプレイをやる、顔面射精をやる、とみんなアダルトビデオの影響ですよ。小学生辺りでも父親の借りてきたのを見ちゃったとかそういうのをクラスで見せっこする。小学3、4年生くらいでアダルトビデオを見た子どものお母さんからちょっと話を聞いたことがあるんだけど、その後その子はものすごく傷ついたらしいのですね。頭の中が本当におかしくなって僕は異常じゃないかという感じで。そういうものの影響はどうなのか、そういうものを

見てそれが性だと一面的にとらえてしまう問題が出てくる。性はいろいろ多様だからいろんな楽しみ方があっていいと思うんだけど、商品化されたものだけで性をとらえるというのは不幸じゃないかなと思います。二点目は若い女の子が平気でアダルトビデオの女優になるという。昔貧しくてどうしても売春婦に出ていったという背景でなら分かるんだけど、今の日本社会で普通の若い女性が売春と同じことをする感覚が私は気になります。それから三点目は、こういう性情報はセックス＝性交だけで、セックスということは同性ということもありうるけど男と女の人間と人間の一番のふれあい、コミュニケーションとと思っているのだけでも、そういうふれあいというところがないと思うのですね。

だからといってそれを子どもの目から見えなように規制するというのは反対です。いろいろな情報があってそのシャワーを浴びながらも、子ども自身が自分で選択権をもって、またそういう子どもを育てていくというのが親なり教師なりの課題じゃないかと思っています。だからもし私達が学校で性教育をやるとしたら、人間と人間のふれあいなんだということを大事にしたものを、と思います。私は理科の授業、ホームルームの授業で性の問題を取り上げるときに性教育をどういうふうに語っているかという、人が男に生まれたこと、女に生まれたことが生涯の障害にならないで、不当な制約に縛られないで、女は女、男は男それをどう生きていくか、それを考えるのが性教育だと考えていますから、女子校で女性を相手にしているから、まず体をしっかり知ること、自分の存在、自己認識をしっかり持つこと、そういうことをすごく意識してやっています。完璧な事実を教えることは性教育のスタートだけど同時に、性はすごくプライベートな自己表現、自分が女である、男であるということを受け入れて肯定していく、そしてそれを表現していくことが性だと思う。そんな性教育をぜひこの4月をスタートに進めてい

ってほしいなと思います。でもすぐにそうはならないと思いますから、まず教師が変わること。教師がそうならなければ親の方からどんどんつついていくことだと思います。

### 子ども文化を長年テーマにして

司会 ありがとうございます。二つの柱にそって話してくださいました。前半の子どもと学校の関わり、生徒をする、教師をするという話を聞いて、学校の表舞台になるところはどんどん形骸化しているなということを改めて感じました。学校は中身がなくなって「がっこう」が「かっこう」になったと言った人がいたのですが、そういうことが進行しているのですね。長時間にわたって教師も生徒も演技をし、それに耐えているというか。学校とは耐える所と定義した不登校の子どももいたのですけども。そして「かっこう」が終わった後が本当の生活だと原田さんはおっしゃっていたのですが、そこには二番目の話の性情報が氾濫していて、そこはそこでさまざまな問題が渦巻いているところですね。また討論の中で性の問題というのはいろいろ議論されるという予感がします。

三番目に斎藤次郎さんに話していただきます。斎藤さんは『三輪車疾走』という雑誌を主宰されていますが、その最近号に斎藤さんの性教育観をエッセイ風に書いておられ、その辺りも触れてくださると思います。今日は名古屋から駆け付けてくださいました。子ども文化のことを長年中心テーマとして取り組んでこられ、そのなかで『三輪車疾走』という雑誌も発行されてきたのです。今日のテーマに絡んで『子どもたちの現在—子ども文化の構造と論理』という題の本を出版されています。

斎藤 斎藤です。書佳と原田さんの話と無理やりつなげて言えば、やっぱり人間関係の問題なんですよね。子どもの文化というより、子ども同士が、あるいは子どもと親の、子どもと先生のつき合い

がうまくいなくて、いろいろな問題が起こってきて、混乱を起こしてくるのでしょうか、いろいろな子どもが死んだり殺されたりするような悲惨な例が新聞を賑わしているのですけども、そうではない、もっとありふれたことで、しかし当事者は苦しんだり、悩んだりしています。書佳の所はQ<sub>2</sub>のような感じでやってるの？

伊藤 Q<sub>2</sub>じゃなくて、普通の電話で。

斎藤 あ、そう。そういう所で子ども同士、改めて出合っていくのだろうなと思います。ただ電話を介して付き合うということは、直接ではない所に不安というか懸念というかがあるけれども、今の子は、離れているから、仕方がないから電話で話すというんじゃなくて、電話で話す方が話しやすいと言いますね。昔は電話というのは間にあわせのものだったのですが、今は電話で話す方が話しやすくて、本当の自分がだせるというようなことがあり、長電話をする。直接ではなくなぜ電話の方がいいのかでしょうか。嫌なやつに早くケリを付けたいときは電話に限りますよね、でも本当に親密な間柄だったら顔を見て話したいと思うのが自然なわけですから、それが直接ではなく電話の方がいいというのは、その親しみというのか、人間と人間の距離の問題だと思うんですけども、そこに新しいセンスが生まれてきている、と考えるを得ない。それが良いのか悪いのか性急に決めちゃわないようにしたいと思うのですけども。

### ファミコンと子どもたち

ファミコンの話に移ります。ファミコンをやっている子どもは、モニターの前でべたべたと張りついて、目と指しか動かない。イメージとしてはあんまり可愛くないですよ。よく言うとかわいそう、悪く言うと馬鹿みたい(笑)、という感じがついしちゃって好感を持ってない人が多い。写真なんかで見ると、なんか哀れな子どもの見本、あるいは時代の犠牲者というイメージがします。画面を見てボタンを押しているだけでは、遊んでいると

いう感じがしないと思うんですね。だから見た目が悪いんですけど、本人は結構いけてるんですね。「殺せ」とか叫んでいますがね。そういう時、ひとりでゲームをやっているわけなんですけども、背後に友達がいるんですね。一人でやっている時って、いわばハーサルです。今度何人かでやっているときに裏技を駆使して、敵をやっつける、高得点をあげたくて、ガンバル。むろん、本番はギャラリーが見ている所でやります。だからひとりでやってる時も客観的には孤独な少年のように見えていても、そんなことはなくて、子どもの心の中にはつながった仲間みたいのがいるんじゃないかと思います。実際集まってやる時は、親がうるさいから時間は限られていて、一人でやれる時間は少ない。一人ならその時間全部やれるわけですから、その方がいいようなのですが、子どもは友だちといっしょにやる方が好きです。寄り合ってやるのはいわば晴舞台ですから緊張感を持ってやる。いや、大人の目にはギャラリーは『コロコロコミック』を読んで自分の番がくるまで関心がないみたいに見える。これもまた実は複雑なんですよ。『コロコロコミック』を読んでいて全然熱心じゃないように見える子どもは、実は『コロコロコミック』の攻略法のページを、「おぼっちゃま」を見ているように見せながら（笑）、読んで、自分の番がくるまでに学んでることもあるんです。よく見ていると。だから子どもは機械と遊んでいてかわいそうだというのも、話半分にしておいたほうがいいんじゃないかと思います（笑）。

でも、それでもやっぱり嫌なんです。僕はやるのは大好きなんですけど、子どもがひとりでやっているのを見るのは嫌ですね。なんかそこはかたなく哀愁が漂って、しかもなんか腐ったというか、今の大人社会の汚濁が少年の背後に忍び寄っているという感じの哀しさを感じるんですね。手放してやっぱり誉められない。そこのところは、哀しみつつあいまいにやっていかなければいけないと思うんですね。ファミコンをやらなくなれば

子どもは元気に遊べるというような粗雑な幻想を持って、玩具産業と敵対するというのもばかばかしいし、そうかと言ってファミコンのどこが悪いんだとって任天堂のまわし者みたいに（笑）やるというのも考えものだし、ちょっとクールな目で子どもとファミコンのつながりを見つめながら、子どもの進んだ分を、よしオレも今日中に追い付いてやろう（笑）とって、頑張っていた方がいい。この頃は一生懸命に涙ぼろぼろこぼしながらやってるんですよ、目が痛くて。

今日のは仕事による寝不足ですよ。言いたいことは、子どもは一人で遊んでいるときでさえ、いつも誰かを心の中で呼び出してなければいけない。そしてだれも呼び出せないと、固有の名前を持っていない、顔も分からない友達みたいな、そういう架空の子どもを呼び出すこともある。その架空の世界では自分がヒーローになります。

### いつかは本当の人間に出会うために

前回学校に行けないはなしをしておりましたけども、長くそういう「登校拒否」していた人が、自分の少年時代のことを思い出すままに書いたものを最近読みました。学校に行って傷だらけになって帰ってくるその子どもが、帰宅後自分の遊び道具を全部動員して遊ぶんです。そこでは自分が優越的な立場に立つストーリーを作っていた、とその元少年が克明に書いているんですね。怪獣やウルトラマンが敵味方に分かれて戦う。そのSF的なストーリーを作っていく。自分は正義派の指導者です。長い時間がすぎて、最後は敵味方が和解するようになった、といます。これを読んで「ああ、これを読ませたい」と思う人が6人いました。「あっ、僕みたいな人間がいるんだ」と思う人を6人、僕は知っているのです。高校生の例では、自分で「こんなことしてちゃまずいんじゃないのか」って思っている。僕は「そんなことはない」と言って、肯定しました。それで彼も僕にそのストーリーを話してくれたのですが、彼はいわばS

Fの作品を書いているのですね。これは彼が苦肉の策で編み出したものですが、いつかいずれ本当の人間と出会うのだらうとぼくは思います。だんだんと架空の世界が色褪せてきて、「なんであんなことに熱中していたんだらうか」ということに気が付いてくる。そして一人前の大人として生活するようになっていくんでしょ。そういう人と人との付き合いというのは、穏やかに仲良くやっていく方がいい。そんなことが一番いいに決まっているんですけども、しかしみんな仲良くなんてできそうでできないのですよね。僕は絶対仲良くしたくない人間はいますからね(笑)。どの人とはどのくらいの距離をおいておけばいいか、この人と本当に密着していこうねというのがありますから、まあいろいろな角度でいろんな人と付き合い。それは処世術というのではなくて、そのたびに自分を見つけていくプロセスでもあるんですよ。

### 少女たちの性と自分探し

セックスのことも話したいのだけでも、僕が付き合った危なくなってる女の子は、男の子と仲良くなるとこの人に捨てられたらもう世のなか終わりみたいな思い詰め方をする傾向があって、そういう子は簡単にHの世界にひきこまれていくみたいです。女の子から「Hしよう」というのはやっぱり数的には少ないと思います。断れないんだって言います。「どうして断れないの」ってきくと、「だってそれっきりになっちゃったら大変。せっかくつかまえたのに」、中学生がそう言っていました。だから「それはそうじゃないって、恋というものはそんな単純なものじゃなくて、のぼしのぼしたほうが男の方は夢中になって(笑)、いくんだよ」って言うんですよ。きらわれたくないばかりに、「いいよ」なんて言ってしまう。気持はわからないではないけれど、自分を安く見積もってほしくないな、とぼくは思います。つまりさっき言ったように、好きな人もいれば嫌いな人もいるわけで、そのだんだら模様の中で人間は生きている。

自分というものは、子どもなのか大人なのかも分らないようなあいまいなものです。だから鏡に映すしかないんです。つまり他人と付き合い、自分をどう思ってくれるのか、自分にどう対応してくれるのかを見て、感じて、自分はこういう人間なんだな、と自分をつかまえる。そのプロセスをとばしていきなり15歳で濃密な関係になっちゃうと、彼の要求を断って切れてしまうと、もう不安でしょうがなくなってしまう。その子のほかにもうちょっといい加減な男がなんんかいて、また真剣なものもいて、その間には年齢もまちまちになっていて、いわば一人の少女を取り巻く男達の布陣というようなものが出来上がってれば、その子は自分を探しながら、そこを擦り抜けていけるでしょう。

僕はこの5年くらい地方新聞に「何でも相談」というコラムを書いています。親より子どもの投書が増えてきて、みんな世間から誤解されて「本当は私はそうじゃないのよ」という訴えが多いのです。そこでおもしろいと思うのは、僕に手紙を書くというのは、あんまり濃密ではない関係で、相談だけしたいということなのです。極端な子どもは自分の住所も名前も書いてきませんから返事のしようもない。多分、それを書いている間でも自分を整理するのでしょう。僕は一番遠い鏡になるんです。返事を新聞に書いてやれば、子どもは遠い所でセンサーを働かして自分を確かめる。電話の方が話しやすいというのはそういう所にも関わりがあると思うんです。やっぱり遠い人の方が相談しやすいというのがあるんですね。相談で返事のほしい人は封筒を入れてくるんですけど、その封筒の差出人のところに、友達の名前が書いてあるんですね。つまり僕から手紙が行っちゃうと親にばれちゃうので困る。自分は悩んでいて苦しんでいる上に、それを人に知られたくないという苦しみもあって。

子どもたちが悩みを抱えると二重苦になるという構造があるんですね。悩んでるけど助けてよ

て言えない。だれにも言えないということとちよつと違って、自分が悩みを持っている気配さえ人に知られたくない。そういうものを知られたら弱みを握られると思うんです。僕だと遠いから弱みを握られたってなんにもできないと安心できるんです。そういう意味では社会全体が学校化しているのと同様関係しているのかも知れません。相互に無関心と言いながら、わりと意地悪な目付きで人を見ている。こういうようなことを何%かの人は強く意識しているような気がします。

### 生活の基盤から出発して

だれしも嫌な思いをしたらなにか楽しいことをして取り戻さないとはいけません。じゃどうするかって言うと、「これは楽しいよ」と言ってる物を買ってみるしかありません。結局強制される勉強に対する商品というたのしみで今の子ども達はようやくもっているという気がします。遊びの世界でも自分で作っていくという余裕も力もない。この問題をどういう風に考えていったらいいかということがこれからの課題になるのですけれども、もうすでにこういう方向でやっていくのが、いいんだという路線がたくさん提案されているわけで、それをいろいろな所で実践していくということじゃないかと思います。もっともっと気軽にいい加減に、思いついた所でやってみる。駄目だったら駄目でしょうがない、というようなことをともかく必死にやっていく。ぐちゃぐちゃしたなかでみんなぐちゃぐちゃやっていく、そういう中で子どももバランスの取り方を一緒に学んでいけるのではないかなと思っています。新しい処方箋なんかいない。やれる限りをやるっきゃない。

学校をよくしようという運動は、もちろん正しいけれど、だいたい学校というのは昔から良い所じゃないんです(笑)。日本の学校が子ども達にとって良い所だった時代はないと僕は思います。ぼくは1946年の4月から小学校にあがったバリバリの戦後派ですが(笑)、だけど戦後民主教育だって

ぼくはそんな評価していないですね。僕は実際学校が楽しいなんて思ったことはほとんどなかったし、非常にゆううつでした。学校は子どもの抑圧装置だった。戦後のすぐからずっとそうだった(笑)。だから急に学校が良くなって、子どもを解放する方向になるなんてことは想像しても仕方ないと思います。そういうものに期待するのではなく、じゃあ商品の世界で親子で消費しまくって幸せになっちゃおうかというのも、カード破産が恐くて(笑)。そんな夢も見ず、ヤケにもならずクールに行こうぜ、と思う。カテゴリーに入らない所で、どういうふうにつながりをつくって行くのかということだと思います。

学校教育ではこれが正しいと、整合することしか教えてこなかったわけですよ。いちおう学校で教えてくれることは正しいことだという感じですね。性教育ということの本気でやるとすれば、大人社会でもまだ結論のでていないまだ生々しい問題を子どもと一緒に考えるという、教育の発想としても新しい段階を迎えるんじゃないかなと思うんですけど、それはやっぱり無理でしょうね。正しい性、正しい性生活(笑)なんてのを教えるしかないんじゃないかなって。

もう一つの学校の性教育として「有害図書」というのもでてきますよね。アダルトビデオと学校の性教育という両方からの「有害」さから、子どもを立直らせて(笑)、やっていくのはしんどいことだと思ってます。つまり僕が言いたいのはここがこういうことをやってくれるからって飛び付くなよということ。そういうことはだいたいさんくさいことだから、もっと本当に生活の基盤という所で考えついたことをただ、ぐちゃぐちゃとやっていく、そのことが現実に子ども達との新しいつながりのネットになると思います。

### 学校を見限っていいのか

司会 ありがとうございます。あてがわれたものにとらわれず、ぐちゃぐちゃと生きることの

切さをのべていただきました。斎藤さんは本気で子どもと生きていこうとしておられる数少ない大人の一人だなと感じました。学校で教えることについて一言触れていたのですけども、『三輪車疾走』の最近号で学校で教わることって、みんな時効にかかったもので常に過去の物であるという言い方もしておられます。この特集号はテーマが「子どものためとはどういうことか」ということで、今日の話ともつながり、私は大変おもしろく読みました。私も敗戦の時小学2年生で、私も学校がそんなに良い所だったなんて気はしなかったけれど、斎藤さんとちょっと違うなと思って聞いていたのは、やっぱりゆとりというか、ぐじゃぐじゃした所があったな、だから「子ども」ってやってこれたんだな、ということです。また斎藤さんの問題提起がいろいろありました。その辺りについても討論をしていきたいと思います。では、以上の3人の発題をふまえて、会場からご意見をいただきたいと思います。

**男性** 学校時代には、良い成績を取っても、学校を出たらこれまで経験していない世界に入っていくわけでして、偏差値教育でやってた子どもはどうしようもないと思っています。私も商売をやっけて、若い人に手伝ってもらうのですけどもまず大学生は取りたくないですね。消極的に登校拒否というのじゃなくて、どうせ拒否するなら積極的に拒否してもらいたくて。負け犬じゃないし、たくさん仕事があるんだと、自信を持って積極的に拒否してもらいたい。そういう子も増えていますし、ネットワークを作れば力がつくと思います。

**司会** ありがとうございます。お仕事は？

**男性** おでん材料を作って、会員しか買えない形でやっています。あと自宅で6月から「コロボックル学園」というのをはじめます。主に社会人が集まって、本当の勉強というのをやろうとしています。学校でやるのは本当の勉強じゃないと思ってるんですけど、講師の人がフェミニズムのことを分かりやすくやって、夜間部をやっちゃおうと。

できれば将来は子ども達が黒柳徹子さんが行った「ともえ学園」というような学校をめざしています。

**司会** ありがとうございます。最近子どもが分からなくなったと言われ、子どもが大人を見限ってきたのかなともいわれますが、このことに関してでも、ほかのことでも、どうぞ。

**女性** いろいろな話をきいてて私なりに思ったことですが、大人が子ども達に本当に愛情を持って接しているのだろうか。まして学校の先生が月給のためだなんて、原田先生がおっしゃってがっかりしたのですけれどもは、月給をそっちのけにしてでも、子ども達のためにみんながなんとかしてやろうだとか、偏差値なんかじゃ生きていけないという言葉が絶えずでてくるといいのですけども、親達を見てると本当に子ども達の性格をのばしてやるためじゃなくて、いい学校に入れるためしのぎを削ってお金をかけているでしょ。そういうことを子どもたちは感じているんだと思います。そういうことを大人はもっと振り返って、本当に子ども達に愛情を持った教育を注いでいってほしい。私も自分の子ども達に対してそうしてきたつもりでいますけれども。うちの子は登校拒否で最終的な学校を終わることはできませんでしたけども、そんななかでいろいろな試みはされてきているのですが、学校をもっと大事にしていくというのもひとつじゃないかと思います。私も見限っちゃおうかと思うこともたくさんあるのですが、でも見限っちゃっていいのかな、やっぱりみんなでいろいろな形で育てていかなくちゃいけないんじゃないかなと絶えず考えて運動を続けているのです。どうなんでしょう、みなさんのご意見をきかせていただけたらと思います。

**男性** 今子ども達が大人を見限っているんじゃないかと、あるいは大人が本当に子ども達に愛情を注いでいないんじゃないかという意見がでましたけれど、すべての人がそうではないと思う。必ずしも良い高校、良い大学、良い会社に入ることが

幸せではないというのは分かっている。子ども自体も思っていないと思いますが、なんであんなに塾に行くかという、大人が責任ののれのために塾に行かしているからだと思う。みんな塾に行っていて、一人だけ行かないでその子だけ受験に失敗してしまったら、親としても塾に行かせなかったからその子は受験に失敗してしまったと思いますし、近所の人からも「あの家は塾に行かせないから落ちちゃったのよ」みたいな形で白い目で見られるような、それが恐くて、とにかく塾に行ってくれば親は安心だと。最低限の役目ははたしたと、それだけで塾に行かしているという例が多いわけです。僕は塾に行かなかったけど、行かなくても同じだと子ども達もわかっています。音楽をやってて修学旅行にいかないという「おまえは集団行動の和を乱すのか」と言われた話があります。先生は本当にそう思っているのですよ。体育の先生で体育会のような環境にいたのだと思います。体育会はある意味で民主的じゃない方が強いというのがありますから。ひとつの目標にむかって全員で、という感じで。ただ修学旅行って勝った負けたがない(笑)のに、その先生はその所を混同しちゃっているんじゃないか。そういった先生自身の変化しなくちゃいけないのではと思いました。

### 教師は迷いつつがんばっている

女性 西多摩の方から来ました教師です。先程お母さまから先生は本当に生徒に愛情を注いでいるのかという疑問をいただいたのですが、今年19年目で、この頃すごく思うのですが、本当の愛情ってなんなのかということをいつも考えています。最近ベテランで52、3歳の先生がやめちゃうかなと言われるものですから、一緒に考えてみました。それは1年生を持ったのですが、やたらめったら噛むのだそうです。先生や友達を噛んだりして、それは私の力が足りないからだ、どうしたらいいのかと悩んでいました。それは家庭の

方がつらい状況を持ったお子さんで、そういった中で私ができることはなんなのか。私達も働いておりますから毎日仕事、家庭がありますし、そういった中で私が学校教育でできるのかと考えてしまいます。子ども達が家事労働を、私は勉強をおしえてあげると夏休みに20日ほど2、3人引き受けたことがあります。そのときにこういうことは長く続かないなと思ったのです。気心が知れた子ども達で一定の成果を得られましたけども、私自身がその子たちにすごい愛情を持っているから夏休みを引き受けたと思っているのですが、それから10何年たって今の私にそれができるかなというともうできないと思います。やっぱり当たり前の人間として自分が幸せに毎日学校に行く、余裕のある精神状態で子ども達を受けとめて聞いてやることくらいが私のできることなのだと思います。この頃は「熱がない」とか「月給泥棒」と言われても開き直って、毎日子ども達を眺めたりすることが楽しいです。いろいろ教えこんだりするよりも、本当に子ども達が自分の経験をいろいろな形で語ってくれるので、ここまでいっちゃいけないという場面にもあります。例えば虐待されている子どもの親に対しても学校教育の限界を感じたことがありました。いろいろな先生が「あなたのやることはもうない。あとは祈るだけだ」と言ったんですけど、「そんなんじゃ学校教育の敗北じゃないか」ということもありました。頭を割ってきたりすることもあって、これだけはいけないと思って、その子の未婚の若い母に「今この子はきっとお母さんの愛情を欲しがっているから、ぜひ私も頑張るから一緒に頑張っていきましょう」と言ったら、「先生に私の気持ちが分かるか」と怒鳴られたことがあります。そのお母さんは施設出身で自分も頑張ってきたんだから、この子もできないはずはないんだと言いながら泣かれました。私は、「お母さんの時代と違うから」と言って説得したのですが、分かってもらえなくて私の力は至らなかったなと思いました。私

はその子が学校に来たときにしっかり受けとめてやれば良くて、その子の家庭に入り込む立場じゃないんだなっていうことを敗北的に学びました。一生懸命善意でやったことですが、そんなに人間が人間を説得できないんだなと思いました。歯痒いように思ったりするけど、でもそんなこと言う自分だってたいしたことないなって思って、悩みつつ、体を壊しながら頑張っている人もいますので、許してもらえないかって思います。

**司会** ありがとうございます。本当に先生も大変だし、それはみなさん分かっていると思います。生徒も、親も一生懸命なんですよ、ある意味では。でもさっき見限るという言葉を使ったけど積極的に見限ってるわけじゃなくて、あきらめている。それはズレなんだと思うんですよ。その辺りを埋めてくのは子ども達が大人に求めていくもの、その言葉を少しずつ聞いていくことから少しずつなにかが変わるんだろうなと私達は思っているのですから、子どもの立場からこういうことを求めているんだよということを話していただけたらありがたいですね。

### 子どもと大人のズレを埋めていく

**女性** 子ども達が大人を見限ってるとか、あきらめているという言葉が聞こえて来て気になっていたんですけど、決してそういうことじゃないと思うんですね。世の中とか、大人の言っていることと実際のギャップが見えだしてくるということがあると思う。だんだんそういうのを見てくると大人の言ってることって違うんじゃないかと思って、苦しむ時期ってあると思うんですよね。それでその時期を越えると大人もやっぱり自分と一緒になんだなって思うようになり、そこまで行かないと、だから、あきらめてるんじゃないって、そこでいろいろな価値感を学んで子ども達と大人の関係が変わっていくのだと私は思いました。

**司会** ありがとうございます。書佳さんはたくさん子ども達の声の聞いているんだけど、どう感

じていますか。

**伊藤** 大人にも子ども達にもいろいろな人がいるんで、話にならないなと思った人には私もごめんなさいと謝っちゃったことがあるんですけど、そう思うと結構冷たく遮断してしまうことが多いんじゃないかなって思うけど、私もそうだからしかたないと思います。大人の人も話にならない、とか思うときは適当にあしらっちゃったりしてる。あんまり子ども達が大人を見限っているとかいうと、よくわかんないというか……相手になんない人もいるし、すごく相手にしてもらいたいと思う人もいると思うんですけども。

**永畑** うちの息子はロックを仕事としてやっていますが、「ロケット・マツ」といいます。自分の本名を使わない。そういうことすべてが親に対する抵抗だったんです。あるとき、子どもの部屋に『ジャズ』という雑誌があって、それを読んだら、ドラッグというのは人間に今までにない世界を開いてくれる、という記事があったのです。私あわてふためいて編集長に電話したの。こういう記事、本当なんですか、もっとデータで示してください、これは影響力をもちます、と。それが第一の始まりで、この子は現在30歳を越えてるのですけれども。ロックというのが社会の中でどう扱われているか非常に微細に見渡すようになって、私はいまコンサートに行くたびに、親の自分の目をひらいてもらっている。はじめは、サングラスをかけて自分が分からないようにして見にいました(笑)。そういうときに、子どもは親を変える立場にある。さっき甘えている親という発言があったけど、私なんかも最大に甘えてる親なんだろうと思うのね。そういう意味で親の資格はないのだけれど、子どもを産んだことでなんとかロックを理解できるような親に、少しずつ近付いていった過程を持っているのです。朝のNHKドラマの中でロックは実に下らない存在だと扱われていると、私は投書しようかと思ってしまう(笑)。そういう風に親って分かってないんです。それをま



ず原点におかないと今日の話はわかっている親ばかり、のりこような発言になってしまう。私は「だんだん親になっていく」という表現が好きなんです。子に巡り合ったことで、親は変わってきたなあって感じてます。尾崎豊さんが亡くなったときに、「お母さん尾崎豊って知ってる？」と息子に言われて、私は『月刊カドカワ』のグラビアの格好良いのしか知らなくて、あの人の詞とかメッセージというのは実は読んでなかったんです。この人によって救われた子たちがたくさんいるというのは、あとの情報で知ったのです。あの人は麻薬で捕まり、あらゆることをやったんだけど、あの一生は輝いていたんだと思うのね。前に書佳さんの歌をききました。その歌から彼女のことをぜひともロックシンガーとして紹介したいと思ったの。風のようにさり気なく、魂をゆさぶる歌です。ここにいる方々だってまだまだロックへの偏見はあると思うんです。つまり文化というのはそういう風にして新しい風に吹かれる。またその所が変わっていかないとおもしろくないんじゃないですか。論議を展開するにはどうしようもない世代を直視することが必要で、それがあから成長すると思うんです。

**司会** 私の息子もロックで、息子を通していろいろな新しい世界を見せてもらって。でもドラッグのことは気になりますよね。そういうテーマがすごくあるでしょ。やっとな最後の方になって文化の話に戻ってきたんですけども。

### 子どもも大人も変わらない

**女性** 味岡です。ここのテーマの「子どもの文化は」も、子どもへのメッセージのように話したとき、私は48歳なんですけど、聞いてて私自身がいられているとすごく思う、いつも感じるんですよ。というのは子どもも大人も変わらないんじゃないか、個々にはいろいろだけど同じなんじゃないかなってずっと思っているから。だから自分がどういうふうに人との関係を作っていくか、自分

がどういうふうな生き方がしたいか、そしてそれをどのくらい大事にできるかということなど、私も子どもがいますけども、子どもにそれを教えるとかいうんじゃないで、私がこういうことをこういうふうに思っているという。子どもは批判をいっばいしますよね、口で言う批判もあるし、心の批判もひしひしと感じたりすることもある。でも私はこういうことを大事にしてこういうふうにして生きたい、それは小さい子どもでもあるんじゃないか。私は自分のそういうものを大事にしていきたいから、子どものそしてよその子どももみんなお互いに大事にしていきたい。解決できない問題って大人も子どもも同じくらいある。だからその時に共有できるものは共有しあってひとつの方法を見付けていく。共有できない人はまた誰か共有できない人と共有を作っていく、そういう関係で作っていくんじゃないのかと思えます。

**司会** 大人と子どもってほんとはそんなに変わらないんじゃないかって、私の大好きな考え方です。

**男性** 横浜から来ました。中学の教員で、横浜で「がんばれ日本国憲法」という憲法劇を、毎年5月3日の憲法記念日の辺りに公演をやっているんですけど、今年で6回目で延べ1万人を超える人が来てくれて、100人くらいが出演者などで関わる。その内の半分くらいは中高生なんです。いろいろな学校からやってきて、その憲法劇のなかでは労働者や教員や看護婦さん、弁護士さんなどいろいろな人がいますが、日々の稽古というのは憲法ということで一致しています。あまり憲法について分からない人も多いのですが、一緒にやっていくうちに大人も子どもも学習をしていき、変わっていくという感じです。とくに中高生のプロジェクトチームを作り、なにかをやろうということになって学校の校則についてやることになりました。校則についてはいろいろ本がでていてひどい実態が明らかになっているのだけども、それを受け入れる生徒や先生の意識も探してみよう、とアンケートを作ったりして、それぞれ学校に持ち帰り20

人くらいで500枚くらい集めて集計して結果をだしたのですが、その中ででてきたのは校則に多くの子が不満を持っているんだけど、でも校則は必要かという問いに70%を越える子が必要と答えています。また不満な校則を変えたいというのも半分くらいで、さらにじゃあ自分で行動するかということになるとそのまた半分、全体の回答者の10%くらいになってしまう。そういう子達は仲間を作るのがうまい子が多いと思うんですけども、うまく仲間を作っていけて自分たちの所で頑張っていけて、学校の先生やその他の大人も励ましたりバックアップしていったら、また違うすごいものができるんじゃないかなと思います。さっき虐待の話があったのですが、僕自身も親から虐待を受けてきた子ばかりが入っている情緒障害児短期治療施設という施設内の学級を、教師になった年から4年受け持っていて、本当に自分にはなにもできないというか、いつも悩んでいるんですけど、でも教師がどこまで突っ込んでいいのかというのは、どこまででも突っ込んでいいし、でもできないことはできないでいいんじゃないかな。自分一人でできないことでも教師だけじゃなくて、いろいろな親や大人達、子どもがつながってならできる。だから親だけ、子ども達だけが悪いんじゃないかって、それを作っていく社会全体がまずいというか、そこにアプローチして、変えていくことがいいんだろうなと思いました。今度はぜひ横浜の中高生たちもつれてこれたらなと思っています。

**司会** ぜひ中高校生をお連れになってください。いろいろな大人がいろいろな所に行って、いろいろな子どもがいて、いろいろな活動があることがこうやって少しずつ見えてきます。時間なんですけどもちょっとだけ延長させていただいて、どうしてもという方、ありますか。

**女性** 浦和から来ました。実は子育てが終わって孫が小学校2年になります。これからどういう風に接していけばいいかと思ってちょっとみな

さんのお話をうかがわせてもらいながら、話の流れを追ってますと、偏差値偏差値という言葉があれこれできておりますけど、うちの長男が昭和32年の生まれで、中学のときにこの偏差値という言葉がでてきたのです。それで懇談会の時に先生が説明をしてくださったのですが、どうしても納得がゆかなく、さらに説明を求めたらその先生がその場で説明なされなかったのですね。だから今みなさん若い学生さんや先生等の普段使っているかたはこれはお分りですけど、一般に偏差値偏差値と叫ばれていますけど幅が狭いんですよ。昔みたいに100点から0点という差ではないですから。偏差値が低いからって将来お母さんになられたときに、やっぱり劣等生ということはないわけですよ。うちの娘は「女だから間違わなければ良い」なんて言っていて、それでも高校受験の時はちょっとじたばたしたんですけども。結局は親御さんのものの考え方だと思うんです。登校拒否の場合もうちの場合も事前に親の方で察知しまして、本当に死に物狂いでやって、先生には経過報告くらいでした。

**司会** はいありがとうございました。時間が過ぎたんですけど最後に斎藤さんにお話お願いいたします。

### 落ちこぼれでなく、元気な少数派で

**斎藤** いっぱい話したいことがありますけど、時間がありませんから、偏差値と落ちこぼれの話だけ、ちょっと。だれだってこぼれたくないんです。結構でかいますのはずだけど、必ず全部の豆が入るほどは大きくないんですね、予定数があってそれ以外は必ずこぼれるようにできているわけです。必ずこぼれるんですけど、こぼれる方が多いとやっぱりこぼれると言わないから(笑)、少ないんです。つまり僕らは少数派なんです、僕は1960年の頃学生をやっていたんですけど、安保のまっ最中僕は正しいことを考えていると思ってたんですね、自分で。その僕が少数派っていうのが気に入

らないので、やがて多数派になるに違いないという夢を持って、僕は潜在的多数派なんだと思ってました。30年たっても多数派にはならないんです(笑)。去年くらいから作戦変えまして少数派として生き延びるにはどうしたらいいかということを考えるようにしました(笑)。要は生きていければいいんです。ともかく食べるもの食べてね。もちろん友達とおしゃべりしたり、遊んだりできなければ生きてる甲斐はないんですけども、なにもあの職業やんなきゃなんない、大学でなきゃなんないという程のことはどう考えてもないと思います。すごい勉強していい大学に入っていい就職する人たちはやっぱり苦勞も多いと思いますよ(笑)。僕は幸い何にも資格がないんです、50ccのバイクの免許もない(笑)。僕は資格とか免許とか一切もたないで生きたいと思うんです。免許を持っている人の隣で座ってたいんです(笑)。要するに勉強ができる人がいっぱいいて、いろいろなことができるわけですから、法律を勉強した人は弁護士やっていますし、医学をやった人は医者やっていますからその人たちにやらせておけばいいんです(やっていただくといってもいいけど)。僕は落ちこぼれなんて言ってないで少数派としてね、きちんと希望を持って元気に生きていかないと、いけないんじゃないかなという気がします(拍手)。

落ちこぼれるのは良くないとか、いや、落ちこぼれてないんだとか言い張るのもなんか言葉のあやみたいですね。偏差値は悪いけどあなたにはこの取り柄があるなんて、インチキっぽい！偏差値なんかどうだっていいじゃないですか。学校はこぼすべきではないという理論をたてて、そういう新しい学校制度をどうすべきかってのは、さあ、その辺でやって(笑)下さい。生きてる間に間に合わないようなことはもういい。生きてる間だけのことを考えてやった方がいいなと思います。少数派でつらい目に合いながらも、よく考えてみるとこっちの方が楽かなと、そういう境地をなんとか大急ぎでみんなで作っていったらなと思います。

ともかく時間がないんですから、がんばりたいと思います。もちろんりりしくやるって人の足を引っ張る気は全然ないです(笑)。

司会 教育総研は、みなさんに開かれる教育総研であり、第一委員会でありたいと思っています。りりしくでなく、たのしく元気にやりたいという所で終わりにしたいと思います。今日のテーマまだまだ深めたいことがたくさんあったんだけど、でもやっぱり人が人に出会いたいということは大人も子どもも同じで、今も昔も変わらなくて、その形が違うだけなんだなということがとてもよく分かってきたように思いました。「トーキング・キッズ」というのは活字・通信世代でしたら、投書欄を介してのペンフレンド。昔は時間はかかったけど本質はそんなに変わらないことで、人に出会いたい、学校の中で何がしたいかって言ったら、「人に出会いたい」の一語につくるんじゃないかなと、また改めて今日思いました。みなさま、ありがとうございました。

# 家庭と子ども・青年の文化

1992・6・28

## 1. 家庭と子ども

## 2. 子ども・青年の文化

〈出席者〉

永畑 道子

小沢 有作

小沢 牧子

山部 芳秀

原田瑠美子

## 1. 家庭と子ども

### 変化した家庭・教師・子ども

永畑 道子

教育現場の取材にかかわるようになって、ほぼ30年になります。1982年の暮れから83年にかけて、子どもたちの事件が、次々に起こりました。たとえば82年に女子中学生3人が集団自殺、翌年正月に横浜で浮浪者を次々に襲う事件が起こり、中学生5人をふくむ少年10人が逮捕され、町田のT中で先生が生徒を刺すというかつてない出来事が起こりました。戸塚ヨットスクールの校長逮捕もこの年6月です。

このころ、私は三重の日生学園や根性塾といわれるような現場を取材していたのです。ひどく荒れた感じが世の中であって、親たちがどうしようもなくて子をそこへ預けるといふ、かなしいとき

でした。

それから間もなく臨教審が発足し、私たち女性民教審の運動がそこに対応して始まりました。

#### 学校と家庭に入った亀裂

当時の子どもたちを取材していると、たとえシンナー漬けの子にもまだ何か救いがありました。自分の親を学校の先生が悪く言うことが許せない、と本気でツッパリたちが怒る発言もあったし、悪いとわかっている、いつかは立ち直る、学校や自分を取り巻いているものに対しての、これは抵抗だと……。親孝行したいという子もいたし、父ちゃんかぼくを叱ってくれると一人がいうと、きい

ている子たちがシンとなってしまふ。うらやましいのです。

そんな“願い”みたいなものがどんどん子どもの中から出てきて、私は取材しながらその子たちへ自然に心を寄せていくことが、何どもありました。

このあと、いわゆる管理主義がびっしりと現場を埋めて、子どもたちは操り人形のような存在になっていく。管理主義というのは、かなり早くから、遡れば管理職手当が先生たちを分断したそのあたりからもう始まるのですが、目立って千葉とか愛知とか、そこから全国に飛び火して、教育とは全く異なる“見張り”“校則”が子どもたちをがちがちに縛ってしまう。1980年代後半のころから痛感したのは、学校と家庭、つまり教師と親が、完全に不信の中にある、亀裂がはっきり入った、ということです。もう先生たちは、親を自分の見方にして連帯していこうということは、捨ててしまったような気がして仕方ない。日教組が掲げる「父母との連帯」、これはまるで看板か、死んだ言葉になったようです。美談とでもいいでしょうか。私たちは親ですから、PTAはどうなっているか、に目がいくのですが、PTAなんていうのも、先生たちにとって、何の問題でもなくなってきた……。

では先生たちの目はどこを向いているか。子どものほうを向いている。それは管理主義として、向いている。先生たちの出世がどうしてもそこには絡んでくるのですが、たとえ出世を考えなくても権力にさからわない先生たちがどんどんふえてきたんですね。

子どもたちは、さらに、経済発展の中で親たちが容赦なく蒸発するという、そういう不幸に出会っていきます。やはり1983年ころ、私の友人、ある新聞記者がニューヨークへ取材に行つて、教育の現場を廻るつもりだったのが、それどころではないことに気づいた。ニューヨークの町では、親に置き去りにされた子どもたちが群れていて、背景に家庭の崩壊がある、だから家族の取材に急遽

切り変えたと話してくれたのです。これはよく記憶に残っています。やはり日本でも同じ状況が少しおくれて始まるのですね。

## 親たちの「子捨て」

建前の上では日本はまだまだ家庭は大丈夫だと、そのころ思っていたのですが、最近、その自信が全く揺らいでしまいました。

女親はいま、二つ、両極に分かれたと思うのです。

一つは、子どもへの愛情の完全な喪失というか、自分の生き方というものに強く視点を当ててみると、自分は今何のために生きているかというのがわからない、その実感をつかみたくて家庭をすてるということもあえてやる、そういう親たち、ことに母親たちが存在し始めたということ。特に顕著になったのは、1976年からの傾向です。家族という温かい場所からすべてを捨てて蒸発していく、そういう女たちが警察庁のデータの上で増え続けてきたのです。それは、アメリカで年をとった親を捨て、子どもを捨て、若い夫婦だけで家を出ていく光景とダブってきます。経済発展の爛熟期の果てに生まれてきたこの現象を、ロレッタ・シュワルツ・ノベルという女性ジャーナリストがデータをうんと駆使して『最後のメッセージ』という本に書いています。それと同じようなことを、私は取材先で、そういう女親たち、ようやく男なみに蒸発していく姿を見続けてきました。しかも彼女たちは、蒸発の直前まで子どもを溺愛していた、あたかもペットのように。おそらく自分のさびしさを埋めるために。

男親たちは、昔からしばしば家を捨てました。明治以降の歴史を調べると、飢饉の村から、働き手の男たちはまっ先に姿を消し、自分の親も子どもも、弱いものを見捨てました。女親は残って、独力で老人をみとり、子を育てたのです。それは、そこにしがみつかないと女は生きていられない、そういう生産の形があったことも事実です。それ

が、アメリカと同じような経済発展の中で、76年前後から、とくに工業団地のあたりで女親蒸発の姿が出てきた。主婦のめざめ、ですね。当り前の自立です。取り残された子どもたちは孤独な、たった一人の生活をつづけることになる。父親はもちろん出稼ぎに出たり、蒸発したりする。そういう子どもたちを、例えば炭鉱の町、造船不況の町、東京の下町、千葉の君津あたりで取材しました。地域の人たちや、教師たちが、何とかその子どもたちを助けていました。

そういう親、子どもへの愛喪失の過程があると同時に、片方で、子どもへの異常なまでの密着、その進路に親のユメをかけている姿がみえてくる。

### ひたすら私立をめざす母親たち

父親・母親ぐるみで完全に公立を捨てて私立へ、ひたすら家じゅう受験戦争という状況が広がっている家庭が、かなり多いという実態に気づきます。私たちのいわゆる同志というか、受験戦争を拒否している仲間の中にはそういう家はあまりみつからないけれど、いろいろなところに行って出会う親たちの多くが、本当に多くが、実は子どもの受験のために必死で戦争を展開しているような状態です。

5年くらい前に、ある喫茶店で偶然に10人くらいのお母さんに囲まれたことがあって、そのとき口々に言われたことは、これからの公立はもう当てにしない、公立中学のひどいありさまを見た私たちは絶対に私立へ子どもをやる、そのためにはどうすればいいだろうかと、そういう相談だったのです。私は心の底から思っていることをいいました。公立は、子どもたちに、どんな環境の中であれ、生きる強さを与える場所で、もしもそこが荒れているなら、あなたたちはなぜ今PTAにかかわってその学校を変えないのか、と私たちの世代が切りぬけてきた方法を話したのです。しかし今は、そんなことには聞く耳持たぬ親がとてもふえていることを実感しています。公立の先生たちは、

この事実を正面から受けとめていられるかどうか。とても心配しています。

### 荒廃した公立中学をさけて

私立を志向する親たちにとって、何が理由かといったら、まず荒廃した公立中学校を避ける、ということです。これが親同士の間でいつも話されていることですね。荒廃というのは、がんじ絡めの規則があり、体罰があり、子どもたち同士のいじめがある。そして授業がおもしろくない、将来この子どもたちが生きていくための学問がそこでは期待できない、と、たくさん理由を彼女たちは列挙します。そして子どもが幼稚園に入ったころから親たちの間で始まる会話は、いかにして名門の私立小学校あるいは中学校に子どもたちを入れるか、その段階を詳細に検討する。四谷大塚あたりはもちろん、塾は今あふれていて、天才的な子どもを育てる才能塾に始まり、塾のランクづけが整然とできている、その情報入手に尽きるのですね。

そういう生活が、親の楽しみ、生きがいといひましようか、そんな家庭がかなりあってとにかくそこを目指さないと子どもは小さいときからだめになってしまうんだという思い込み、ごく普通のサラリーマン家庭で、私立へ向けての綿密なプランがたてられつつある。競争の行き着く果てにある人間の崩壊には、親たちは気づいていないんです。しかし、このままでいいのだろうか。私は公立の先生にも訴えたい。まず、すばらしい授業を展開してほしい。子どもたちが私立なんていやだ、というほどの魅力を、公立は取り戻さなければならぬ。たとえば、河合塾の授業とか、私が行った数少ない現場の中でも、これが本当に子どもをかきたてる授業かなと思う、刺激を与える授業の現場を、公立の先生たちは、学校をしばらく休んででも、そこに張りついて、授業の光景を見てほしいと思うのです。

もちろん公立の学校で、そういう授業をつづけている先生はいっぱいいるでしょう。しかし、多

くの学校で子どもたちが自信を失うということは子どもへの励ましが日本の学校ではほとんどない、これは転勤してきてアメリカあたりから帰ってきた友人が口を揃えて言うことです。つまり、外国では幼いときほど励ましの学校であったけれど、日本にはそれがない、と。スペインの学校だってそうです。村田栄一さんが報告されているように、ゆとりがあって、服装の自由があって、子どもはやりたいことをやる、勉強もやる。勉強が本当に好きな子を育てるのが学校のはずです。日本の学校は、勉強嫌いの子を育ててしまっているのです。各地の教研集会のデータがはっきりとそのことを示しています。今の学校は自信を失う場所になっている。それがわかっていながら、なぜ今まで放っておかれているのでしょうか。

私学を志向する親たちの気持ちが、浅いところで子どもの未来をとらえて、将来が楽であるようにと、そういうところから発していることはよくわかりますが、この現状だけを変えないと、日本の公立がだめになったら大変なことだと思います。収入がそんなに多くはなくて必死で働いている親にとって、公立がだめになるなんていうことは考えられない。

ただ、公立の頹廃というのは、かなり前からいわれてきました。私の息子たちが中学に入ったころから、もう問題はいっぱいあったのです。「まさに牢屋のような中学」と私はそのころ表現していました。先生たちは牢番のように子どもを見張って、悪いことをしないかという先入観を持ち、内申書で脅す。この図式はそんなに変わっていないどころか、いっそうひどい状況でもある。この長い“教育の放置”はあってはいけないことではないでしょうか。

その当時、私たちは先生たちに、「これはおかしい」と言い続けて、PTAの改革に取り組んだのですが、今やPTA改革など絵に描いたモチのようなもの、本当の少数派です。一部です。

## 家庭の危機と公立学校の危機

家庭は、親は、そういう学校を、「そうじゃないんだ」というふうに言い続けなければいけないはずのところ。ところが、私立学校を目指している親は、大体高学歴の親なのです。学歴が高いゆえに、自分と同じ道をそこに想定するのかわかからないけれども、たたかうよりもまず自分の子どもの安全を考える、そういう家庭になってきている。先生たち以上に親は、力をずっと失ってきた状況にあるんですね。

その中で、それに染まない子どもたちが少数ですが育っているということ、何よりの希望です。子どもは、親を変えていくひと、なのですから。かつて『教育の森』という雑誌があったころ、1970年代初めに、日教組に対立する組織を取材しました。各地方大学の教育学部に、思想的に反日教組的な先生たちが何人かずつ、本当に1人でも2人でもいたら、そこに現職の校長先生を含めたネットワークがつくられて、教育学部というのは先生たちを育てるところですが、その中で、学生運動などに対する見張りが行われ、日常の思想・行動の情報が記録される。そういう人たちは絶対に教員に採用されない。教育学部がそういうおそろしい場所になっているのですが、このあたりから先生たちの地図も非常に変わったなという感じがしています。PTAなどは、親の介入と受けとめられて、教師になるための必修から外されている。管理主義教育誕生のころ、企業の管理規則が愛知の教育を支配したように、千葉の教育委員会、もっとも民主的な拠点であったところが、激変していくのです。このような変貌の歴史を、親たちは、先生は語ってほしい。教育のプロとして、語る責任がある。それこそ日教組の役割です。

家庭の危機と同時に公立の学校の危機を、日教組はどのように受けとめておられるのか。

親たちの多くが、決して先生たちの仲間になっていないということ、ぜひとも、この関係の回復

を、夜間公開研究会の場ではかりたいと願っています。

## 学校化社会のなかの子ども・青年 小沢 有作

永畑さんから子どもと学校が不幸な関係に陥っていることについて話がありました。ぼくは、それを示す端的なでき事が不登校である、と思っています。不登校は80年代に入ってから教育問題化するようになりましたが、その背景には子どもの生活構造が変わったことがあるように思います。

高度成長をターニングポイントにして、子どもの生活構造が変わりました。それとのかかわりで子どもと学校の間隔をとらえてみるのが大事だと思っています。

なによりも、子どもの古くからの生活が失われてきました。高度経済成長をくぐりまして、子どもがいろいろ物をつくったり、手伝ったり、自然といろいろ交わったり、川で泳いだり、そういう労働と自然から切り離されてきました。ニワトリの足を四本描いて話題になりました。それは、柳田国男が言う子どもの文化や言葉をつくり出してきた千年来の〈村の生活〉の土台が崩れ、そこから子どもが切れたということです。この点では、今は、伝統的な村の子ども文化に取って替って、産業社会型の都市の子ども文化が支配的になりました。われわれのいう子ども文化とは後のカテゴリに属するのでしょうか。

その反面、子どもは学校に囲い込まれました。70年代に入るところには、高校進学率は80%台を越えています。小・中・高と12年間学校で生活をするようになった。子どもの生活の主舞台が学校に移りました。

### 生徒と子ども

子どもは学校に入ると「生徒という身分」になります。原田さんは「子どもは生徒を演じている」

と言いましたが、子どもは学校における自分の位置をすどく見抜いているように思います。生徒になるから、教科書を習わなければならない。テストを受け、評価され、校則に従わなければならない。子どもは校外における子どもとしての行動スタイルと生徒としての行動スタイルを分けているのでしょう。

学校で教えること、しつけること、その総体を仮に学校文化といいますと、学校文化の骨格を決めるのは、日本の場合は国家です。文部省が学習指導要領と指導要録の様式を決める。学習指導要領に基づいて教科書をつくる。教科書に整序された知識や価値観に従って生徒を教える。テストし、その成績と行動の評価を決められた指導要録の様式に書き入れる。学校という所は、国家が統御した文化を教え、評価するところになっています。それも日本では一斉授業・一斉テストですから、馬を川に連れて行って無理やり水を飲ませるように、生徒の関心のあるなしに関係なしに、一斉に教え、一斉にテストするわけです。生徒にとってこれは強制される文化です。

学校文化とは、いいかえれば、生徒として有すべき文化の謂れです。その意味では、学校文化は生徒文化とイコールです。このような生徒文化と子ども文化とは子どもにおいて識別されているのだらうと思います。

子ども文化についていいますと、70年代に入って、いろいろな子ども向けの大衆文化が登場しました。テレビにせよ、漫画にせよ、雑誌にせよ、ファミコンにせよ、それらの多くは子どもにとって与えられた消費文化としてあります。それらは金で買って楽しむということになる。



そう考えると、70年代以降、子どもたちは学校においては知識を詰めこまれる、学校の外においても既成の大衆文化をお金で賄う。文化の生産者としてより文化の消費者として存在するようになりました。与えられる文化を消化する存在になったと思います。

70年代に入ってから受験にかかわって生じた大きな特徴は、偏差値が登場したことです。高校進学者が増え、大学受験者が増える中で、合否の度合や入れる学校を見定めるために、自分の成績が全体の中のどこら辺にあるのかを測定する方法として、偏差値が出てきます。5段階相対評価も成績を五つに階層化し序列化しますが、しかし受験における偏差値はもっと細かく生徒の成績を序列化していきます。偏差値は生徒個々に「お前の成績はこの程度、分相応に」と告知して、「分相応」の意識を生徒に押しつけるものです。これは牧子さんにお聞きしたいのですが、知能検査も偏差値化されているんですね。

生徒身分としてある、子どもは測られる存在になっていると同時に、序列の中で「お前はどの程度だ」と告知されつづけてきた存在なんです。

このように子どもの生活構造が変わって、生徒になればなるほど子どもは受け身の存在になってきたように思います。子どもに戻るとき、かろうじて能動性をかいま見せるにすぎなくなりました。

## 社会の学校化

日本は明治以降だんだんと学歴社会になってきましたが、今ほど社会が学校化されたことはないですね。学校の成績如何で行く学校も決まるし、入る会社も決まる。どの種の学校を出たかによって就職先やその後のポストが左右される。学校歴社会になりました。その前段には、学校が生徒に対して下す成績評価があるわけです。生徒としての評価がその後のキャリアを決める。社会が学校化されています。だから子どもに安定した生活をさせようと願えば、親はどういう生きかたがわが

子にとって幸せな生活を考える前に、学校化社会のルールに乗せることを思うようになった。

社会の学校化の中で、家庭の学校化という現象が起きました。奥地さんは二つの面があると整理されています。一つは、学校の価値や評価がそのまま家庭の価値や評価になってきたこと。もう一つは、家庭の生活が学校の生活に合わせて行われるようになり、家庭が学校の下請け機関になったこと。

こうしてあらゆる場所が学校化されると、学校で受けた傷を治癒する場なくなる。かつては校門の外に出ると、手伝いがあり、外遊びがあり、仲間がいて、そうした子どもの生活のなかで存在価値が認められ、癒されました。ところが、今は、家でも地域でも、その傷を責められて、大きくなる。不登校の子らが地域に出ず、家にこもり、家で荒れるのも無理ありません。傷を癒す場——子どものネットワークが求められるわけです。

## アイデンティティの根

ぼくの場合は生徒としてまあまあやってきた大学生を相手にして生活しているわけですが、大学生たちが根なし草になったという印象をもっています。アイデンティティ、自分を自分たらしめるもの、その根をどこに根差したらいいのか。根差すべき所がなかなか見えない。生活や労働から引き離されて経験を喪失する一方、文化を消費する一方になって、自分を自分たらしめる〈核〉が見えなくなってきました。アイデンティティの根をどこに求めたらいいのかという自問をどの学生も持っています。これは学校化社会の子どもに生じたもう一方の現象だと思います。

解放教育をやっている教師たちの話を聞きますと、被差別部落の子どもたちは部落の水脈に根差し、在日朝鮮人の子らは朝鮮の文化に根差すことで、自分を自分たらしめていく〈根〉を得ていく。それがはっきりしないいわゆる普通の学生はどこに根差したらいいのか。ぼくは父母・祖父母の生

活史を捉え、そこに根差す必要を思うのです。それでぼくは、「3代の生活体験を綴る」という授業をやって、父と母、祖父母の話の聞きとってくることを要求するのです。

子と親との関係のもちかたについてはこの前から議論になっているところですが、子どもにとって親は親ですから、親として見るという面が前面に出ますが、もう一つ、父母を生活者としてとらえ直してほしいと思うんですね。苦労を経していない親はいません。もっともつらいところは子どもに隠しています。それらを知ることとおして、人間として、生活者として、働き人として、父母、さらには祖父母を見直していく。その中に自分を自分たらしめる根をみつけてほしいと願っています。

よく学生諸君に言うのですが、天下国家の歴史は知っている。例えば8・15とは何の日かということは知っています。でも、わが父母・祖父母は8・15をどういう生活の中でどういう思いで迎えたかについては、ほとんど知らない。足元の歴史は知らない。無関心である。それが根なし草になり、自分が見えない一因になっています。ですので、自分を自分たらしめる一番根っこを、家族の生活史の見直しの中でみつけてほしいと思っています。そう簡単に子どもが親を見限ってもらっては困るという気持ちがあります。

## 現代の大学生

今の学生を見ていて気になるのは、PKOが起きても、それからいま大学改革が進行中なのですが、そういう政治や教育の問題に向き合うことをしなくなりましたね。気にしていても、黙っている。無力感があるんですね。動いても、なにも変わらない。これはわれわれの世代の責任ですね。今の学生諸君はデモに行った体験も、大衆集会の経験もない。大衆運動の大波がないから学生も動かないという状況の問題もあるんです。学生運動が社会運動の起爆剤になることは、日本では、60年代

末の大学闘争で終りになりました。

こういう若ものが教師になって、かりに歴史の授業の民衆の解放の歴史を教えても、迫力がないんですね。座り込みの体験や国会を取り囲んだ体験がない教師が「社会を動かすもの」と言ったって実感が伴わない。体験というのはとっても大事なんですね。大衆運動に限らずいろんな体験が、今の子どもたち、青年たちから奪われている。それらが重なって、社会の問題に向き合うということが弱くなりました。組合に入らないというのも、構造的な原因によることです。

もう一つ加えると、今の学生諸君はかっかと怒ったり、激論をしたりしなくなりました。教師と団体交渉すればというと、「いや、そんな喧嘩は私たちは好みません」と言ったり。「平和愛好」になりました。

## 自分の問題を授業に

先ほど永畑さんは、子どもに生きることを励ます授業とは何かを考えなくてはいかんといわれました。ぼくも、今の子ども・若ものが望んでいるのは生きることを励ます授業に出会うことだ、と感じています。ぼくの場合、学生諸君は長らく教科書の奴隷になってきたから、それから解放して、人間を教材にする授業をしています。先週は松代地下大本営にこだわっている山根昌子さんの自分史を伺いました。そういう生身の人間との出会いを通して、自分と出会っていく。自分の問題を発見し、向きあっていく。もちろん、自分のことを話し、自分を教材にします。こうして自分を自分たらしめてきたものを見つめ、新しい出会いの体験をふくらましていくなかで、お互いが生きることを励まし合っていけるのではないかと思っています。

蛇足を加えますと、東大で「解放の教育学」という授業をやっているんです。自分を縛っているものはなにか、どうしたら解放されるかというテーマ。受講生の自己紹介を教材にして授業をやっ

ています。みんな「自分の問題」をかかえています。東大、東大と尻をたたかれるなかで「等身大の自分」がわからなくなったという問題は共通しています。一昨日の授業で、障害をもつ弟のことを話す学生が出ますと、同居する叔母のことを話す学生がつづきました。他方に、障害者と交わったことのない学生もいます。障害者とのつきあいかたがこの時間の内容になりました。

ほくには小学生も不登校の子も東大生もみんな一緒だという感覚があります。どの子・どの青年も「自分の問題」をかかえ、苦しんでいます。な

のに、それを学校の中で話せないんですね。学校は、子どもに対して「学校の言うことに従え」と言います。しかし、自分の問題を学校に持ちこむなと言う。だから子どもは自分の問題を隠して、学校に出さない。学校は子どもにとってますます抑圧空間になる。ですので、「生きることを励ます授業」と関係しますが、自分の問題を話せる人間的な空間を学校に少しずつ入れていくことが生徒の人間化のために必要ではないかと思っています。知識つめこみの授業をしますと、成績に差が出ますが、自分の問題の授業ではみな平等です。

## 教育と生活・共に生きる仲間

小沢 牧子

今お2人のお話を聞いていて、いろいろ話したくなってきたことがあります。その中から、2つ柱を立てて題をつけます。それは現状分析を含めての展望です。1本目の柱は「教育の場から生活の場へ」、2本目は「親子から共に生きる仲間へ」としたいと思います。

永畑さんと小沢有作さんが分析されたことは、そのとおりだなと思います。ここ20年間かかって、国家は、学校を通して家庭を支配した、それに成功したのだと思います。

### 教育の場としての学校を問う

いま家庭はどうなっているのかというと、受験という出来事を通して家庭は成立しているのではないか。学校とか成績とか受験という学校絡みのものを取ってしまうと、存在基盤を根本から揺るがされて、こわれかける家庭が少なくないのかもしれない。学校・受験ということにつながっているけれど、それが取れてしまうと危い家庭が多いのではないかと思います。家庭の質のもろさをもたらしたものが競争社会であり、学校化社会であるという気がしますね。

永畑さんのおっしゃったことを聞きながら思ったんだけど、私は「よりよい教育」というのはもうやめてしまわないとだめじゃないかと思っているんですよ。これは学校を否定していくという意味ではないんですが、よい授業とか、よい学びとか、学力の創造とか、日教組は「たしかな学力」とか「学ぶ喜び」とか言ってきたんだけど、あれだけ言ってきて、教師の人々もがんばってきたのに、学校はちっともよくなってこないんですね。私は、「学力の創造」「学ぶ喜び」という美しい発想自体が、子どもを逆に学校から遠ざけているのではないか、そういう気がしてしょうがないんですね。

学校は「教育の場」であることをやめて、地域での子どもの生活の場であるというふうに、それも子どもたちにとって求められる意味ある生活の場であるというふうに発想を転換していかないと、公立学校は生き延びられないだろうと思うのです。その生活ということの中身は、さっき小沢有作さんが言われた、自分の問題が持ち込めるところ、そしてそのことによって他人と確かに出会っていけるところ、お互い同士が確かな出会いをつくっ

ていける場、そして手ごたえのある生活を創造できる場のことです。

この「生活を創造できる」というのは、トンボを追いかけたりホテルを取ったり、そういう借りものの夢のようなことを言っているのでは全くなくて、例えば、食べることのような生活の基本から出発するということです。子どもが給食を食べますね、そういうことを含めているのです。来週の献立を何にするか、今は何が安いのか。どこで何が取れていて、どういうものを食べたら自分たちは気持ちよいか、みたいなことを含めて子どもたちが一緒に献立を考える。そして、つくるところも一緒にかかわっていく。食べること一つをとっても、子どもたちが絶えず与えられるばかりではなくて生活の場をつくり出すということを、もっと根っこから大事にしていく考え方が必要だと思います。

私は地域の上に成立している学校には大きい意味を感じていますし、重要視しています。公立学校が見限られていくのは、全くいいことだとは思いません。でも今の形の学校は、親にも子どもにも支持されていない。「よりよい教育を」「学びの喜びを」ということの中身を、問いなおきなくては生き延びられないのでしょう。

なぜかというのは、もし後で話すチャンスが与えられたらそこで話したいんですが。

## 私立での体験から

次に、自分と自分の子どものことを話します。

さっき永畑さんが、公立を捨てて私立へ、荒廃した公立を避けて私立へという逃げについて言われました。私の子どもたちは私立中学へいきましたので、そのことはいつも自分の心の中にトゲのように刺さっていることなただけでも。そのころその中学というのは知らなかったんだけど、ある雑誌を通してそういう中学があると聞いて、入学説明会に出かけて行ったんです。その頃世の中にはちっとも知られていない学校だったので、説

明会に来る親も少なく、そして私の方がはきさくな用務員の方かなと思って「きょうの会場はどこでしょうか」とお尋ねした方が主事さんだったというのも気に入ってしまって、子どもに「こんな学校があるんだよ」と言って、子どもを連れて行ったりして、受験を決めていくわけです。

でも私は、永畑さんがおっしゃったような迷いをずっと抱えていました。たしか子どもが入試を受けて、その発表がまだない間に地域の公立中学の説明会がありました。そこで説明された校長さんだったか教頭さんが、「皆さんのお子さんがここで中学に入りますと、3年間は高校へ入るための3年間です。3年間経ってここで卒業式を迎えるときに、みんながいい高校に行けるように、自分たちも頑張る。皆さんも頑張ってください」というようなことを言われたわけです。多くのお母さんはうなずいておられたのね。そこには、子どもの現在を大切にできる雰囲気がない。私は1人でゼットいたたかえない、子どももたたかきれないという無力感を感じてしまった。これは取り込まれるか、でなければ親子でつぶれるだろうと思いました。うしろめたさを感じながら「緊急非難させてね」と自分に言訳をしたわけです。逃げてしまったのはその通りなんです。

でも私は、公立中学が生き返ることを望んでいることもたしかです。今の学校化社会を相対化させるということにずっとこだわっていききたいし、子どもが学校にいようがいまいがやっていきたいと、それは私の決意のようなものです。言いわけがましいようなのだけれど。

子どものほうはどうかといいますと、下の子が中学3年になってから学校にちょっと不満な素振りをしました。高校はそこに行きたくない。「どうして?」と言ったら、「お母さん、民主教育ってもうわかった」と言いました。それは私への批判だったかもしれません。そして公立の学校に行きたいと言って、地域の県立高校に行きましたが、そこでも楽しく過ごせたわけではないようで

す。子どもなりに学校の問題では非常に苦しんだのだと思うし、いろんなことを考えたのだらうと思います。

そういう道程で来ているわけですが、私は、夜間公開研究会を通して思うんだけど、不登校の子どもたちは、学校化された社会、家庭に異議を申し立てることをやっている、そういう学校や家庭や自分を救うための存在だというように見えてきます。社会を救う活力として登場してきたというように。子どもたちが学校に望んでいるのは、人と出会える場であり、自分が語れる場であり、生活がある場なのではないか。それが地域にあるということがいいのだと思います。障害を持っている子ども当然行ける場所として、誰もが受け入れられる場です。そういう場を、実は子どもの親たちも本当は心の底では否定してはいないだろうと思います。そういう場があるならそれは大事なことだ、友達とつき合っていくということは自分の子どもにとって生きていく力になるのだ、そういう場が本当に欲しいんだ、と親たちは感じている。そのことを私は信じられるような気がしています。以上「教育から生活へ」という、学校をめぐる発想の転換をとというのが1点目です。

### 道具化しあう親と子

2点目は「親子から共に生きる仲間へ」ということですが、さきほど言ったように、受験がようやく家族をつなぐ、あるいは学校を通して完全に支配されてしまった家庭の中で、親はどういう存在になっているかという、親という自分の身分を立証するために子どもを学校で成功させたい、ということになっていますね。それが自分を親としてより高いランクに認知してもらおうことなんです。自分の子どもはどこの学校に行っているか、どこの会社に入ったか。必然として、子どもは親の道具になりますね。そのことを子どもたちはよく知っています。これは、わたしたちが子どもから聞き取りをした「親を語る」という座談会の中

で、直接に子どもたちの口から語られています。このような親の期待をわかりながら親を情けないと思っている。「自分の居場所がない」あるいは「自分を人間として見ていない」という言葉が出てきます。でも一方で、子どもはしたたかにそこを利用していく場合もある。いい成績を取ることで、あるいはいい学校に行くことで、家庭の中で愛されよう、得をしよう、社会でももちろん得をする、そして親からできるだけお金を引き出すみたいな形で利用していく。親と子の利用のし合い道具化のし合い、今の悲惨な親子関係だろうと思います。

私は今年、大学生たちに「自分はどんな人間であることを期待されたと思うか」と聞いたんです。どんな発達イメージが自分に与えられたと思うかと。第1位が「良い成績、良い学校、学校での成功」。第2位が「他人と違わないように」でした。「元気に自分らしく」というのはかなり下のほうでした。そこに親と子の関係が子どもを通してみごとに露呈されていると思う。親は「いや、そうじゃない。元気に自分らしくと思っているんだよ」と言うかもしれないけれども、子どもには言葉ではなくて親の本音が伝わっているんですね。でも、そういう中で子どもは親を愛そう、失望させまいと、自分と親の間で引き裂かれながら暮らしてくる。どういうものを犠牲にして暮らしてくるかという自分自身というものをそぎ落としてくるわけです。その犠牲の上に親というものが存在させてもらっているのであり、家庭というものが維持されている。小沢有作さんの言葉で言えば、アイデンティティを喪失する。自分がわからない。これと引きかえに家庭や親というものが残り続けている。家庭というのは社会の秩序維持装置だと私は思いますので、世の安定が保たれている。子どもに課せられた犠牲はずいぶん大きいものがあるのだらうと思っています。

それから小沢有作さんの言われたことですが、若い人たちが社会問題に関心がない、社会の問題に向き合うことをしなくなったと。

私はこの間、PKO問題のときにつくづく思ったんですが、うちの息子たちがデモに行こうとしなかった。関心は持っていましたが。大学生たちも、髪を短く切ってきた人がいて、「短く切ったね。夏だから？」と言ったら、「いや、いつカンボジアに行ってもいいように」なんて冗談絡みに気にはしている。でも、やっぱりデモに行く学生は少ないです。

しかし、私は、息子たちのことを言えない。なぜなら、私もデモに行かなかった。それは無力感に負けているからです。若者も同じだと思う。大

人も子どもも同じように生きていけるんですね。親子という役割を演じて生き合うのではなくて、親として自分はこう苦勞をしたんだぞ、戦争のときはこうだったんだぞというんじゃないで、「どうなんだろうね、いま私はこう思うんだけど」と1人の人間として迷いを率直に語れる親、同じ時代と同じ家という時間・空間をたまたま一緒に生き合っている仲間という関係をめざしたいと思う。そんなところからしか、今の役割演技をし合う家族の貧困から少しでも抜け出られる光は見えないのではないかと、私はそんなふうに思います。

## いつからなにが変わったのか

山部 芳秀

昨日永畑さんから電話いただいたとき、10年前の本『<非行>・学校・家族』のときとなにも変わっていない、と言われたが、私もたまたま10年前の雑誌『ジュリスト』総合特集『青少年 生活と行動』を見たら、小沢有作さんの「学校化された社会」はじめ日高六郎さん、斎藤次郎さんら同じメンバーでそう変わっていないなと思った。

10年前はそうだとすると、20年前はどうだったか考えると、日教組・総評・国民文化会議がよびかけて「民主教育をすすめる国民連合」を結成したのが1971年ですから、だいふ違う。そこから考えたらどうかと思います。

### 中教審答申(71年)の発表

「民主教育をすすめる国民連合」ができるきっかけは、同年6月の中教審答申の発表です。

あの中教審答申は、その直前の全国教育研究所連盟の調査結果というものとセットでした。「授業のわかる子 クラスの半数」とか「小中学生 半数、授業わからず」とかの見出しの新聞に、子を持つ親のほとんどがびっくりした。そして10日後に、中教審の「第三の教育改革」と自賛する「今

後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本施策」答申が発表された。

当時、総評本部はじめ各単産、つまり有力大組合の幹部たちは皆小・中学生の親だったから、大問題になりました。まず自分たちの子どもは母親まかせで知らなかったが、授業についていける方なのか、ついていけない方なのか。5段階評価では3が「普通」ともいわれていちばん多いが、半数といわれるとそれが分裂するわけですからね。まあ普通でいいや、人並みならいいさ、と思ってたのが、どっちなんだ、というわけ。それは父親以上に母親の関心と呼びましたが、続く中教審答申が、「ついていけない子」にはなんの配慮もなくついていける子だけを早くから見つけ、選別して優先的に教育する政策でしたから大問題になったんです。のちに三木内閣の文相になるが、当時朝日新聞の論説委員だった永井道雄氏は、「批判も展望もない 教育改革といえぬ答申」という見出しできびしく批判しましたが、総評は中立労連とともに全参加単産の委員長名で大きなポスターをつくり、選別・差別の教育改革に反対する国民運動を提起した。それが「民主教育をすすめる国民連

合」になったんですが、個々の親としても真剣でしたよ。

## 日教組の教育改革案

また、中教審答申の3日後には日教組の委嘱した教育制度検討委員会の報告「日本の教育はどうあるべきか」が出た。よく、こちらがわはいつも後手、後手にまわってしょうがないといわれるんですが、必ずしもそうではない。この中教審答申に対する制度検討委報告もそれで、74年の最終報告まで、あるべき教育改革案をつくり、提示してきたんです。

その改革案をひろく知ってもらい世論にしようと、日教組・国民文化会議で絵本『お母さんの心配』(72年)、『お母さんの希望』(74年)などつくりました。スジは私が書いたんですが、制度・内容とも画期的な改革案はこっちが提起していたんです。絵本は先生がたが親に手渡して話合ってもらうための資料だったんですが、残念ながら先生のところで止ってしまったきらいがありましたね。一般の組合、国鉄、全通、全電通とか全日通など、婦人部や主婦の会の強いところなどよく利用したし、教育についての講演会や機関紙誌の記事などもどっと増えましたね。民主教育国民連合の集会などでそれを使った会合の報告などもあったし、「できる子・できない子」とか「ついていける子・いけない子」といった題だと、集まりがいいという報告もあった。

しかし、みんな「自分の子」がどうか、ついていけるためにはどうすればいいのか、という関心から制度の問題へ及ばなかった。つきぬけられなかったようですね。教師との対立を恐れるな、なんて言っても、子どもが「人質」にとられている、なんて表現が出てきたし、やはり成績順位が気になってしまう。母親は制度の矛盾をPTAや教組とともに…と考えるが、企業社会のなかの父親は序列の意識がつよいし、子ども自身が競争にまきこまれていますからね。競争相手の友だちが病気に

なったら公然と喜んだというのはこの頃でしょう。

## 「落ちこぼれは非行の予備軍」

そして、「授業についていけない子」が「落ちこぼれ」と言われるようになるのは70年代なかば。それまで教師の間では「お客さん」などという言葉があったらしいが、公然とこぼれたものとされる。いや、落ちこぼしたのは誰だ？ という声もありましたが、5段階評価は当然、5や4のために1や2をつくるわけです。半分を落ちこぼしておいて「落ちこぼれ」なんて言えるか、という声は当然叫ばれましたが、企業は競争主義第一ですから、甘いことをいうな！ というわけですね。事実「競争原理は教育の原理であるばかりでなく、社会の原理でもある」といった自民党の文書があらわれます。そして、77年ごろには「非行」が社会問題化してくると「落ちこぼれは非行の予備軍」と言われるようになる。

これは警察がいったんですよ。77年の警視庁のポケットカレンダーは、王選手や二代目若の花の写真と共に「なくしたい“落ちこぼれっ子”」のタイトルで「7・5・3教育」つまり高校生の7割、中学生の5割、小学生の3割が落ちこぼれて、都内ではそれぞれ30万、23万、31万の計84万人もいる計算になる、とした。また、「学校ぎらい」の急増もあわせて「補導される非行少年」にあげていました。こうして「〈非行〉づくりの学校」にされていくんですね。序列をつくるなという声に対して、「親の方から要求されるんですよ」という教師も増えてきて、5段階評価をするにはいつも全員満点というテストはできないという声もきかれるようになる。

## 企業の競争主義が教育原理に

クラスの半数しかわからない授業をやっていたら、当然わからない子どもたちにとって学校は耐えられない場所になっていくはずで、教師も苦労されたでしようが、遅れている子にばかりかかわ

っていては、進んでいる子やその親から不満が出るという具合に、教師もひきさかれる思いだったでしょう。自信も失うはずです。さらに「教組が教育荒廃の原因をつくっている」「日教組が元凶だ」といった宣伝もなされ、それに対しては、戦後の民主教育とそれを破壊してきた行政の歴史をはっきりおさえれば、決してそうでないことがわかる。その学習で自信をもて、というようなところから『それは青空の下ではじまった』という戦後教育史の絵本もつくりましたが、この75年というのが画期的な年だったように思います。雑誌『文藝春秋』に「国家100年のための新教育宣言」という論文がのる。「明日の教育を考える会」という名で書いたのは、後に中曽根内閣で臨教審委員になる人々だったんですね。その説くところは競争主義の原理と、頭のいい悪いは遺伝できまるという説でした。たしか京都師範附属小学校には学者や医者や弁護士のような知識階級の子弟が多く、彼らはみなやはり大学へ進んで社会的に高い地位についている、といった追跡調査めいたものでIQの高いのは遺伝だとする。つまりこの頃、誰も彼も子どもを大学へやろうとするから“受験戦争”“受験地獄”なんていわれるんだが、遺伝できまってるんだから早くあきらめろ、というものです。中教審答申の選別路線を啓蒙的に説いたものでしょう。

また、企業の採用に指定校制度というのがあって、大企業では特定大学以外は初めから受付なかったが、それを擁護して、某大企業幹部が、わが社が東大卒を採用するのは特別に頭がいいからじゃなくて幼稚園から東大までの受験競争にせり勝ってきた、そのせり合いに勝つ能力を買うんだ、と言ったというのも紹介してあったと思います。まあこういう意見がマスコミを支配するようになり、親も教師も受験競争という一大事に追われるようになってしまうんですね。

「家庭の学校化」も「社会の学校化」も、いい学校ならいいので、企業の競争主義に染めあげられた学校、企業の下請けになった学校の、そのまた

下請けに、家庭や社会がなくなったから問題なんですよ。

## 子どもの「横ならび」意識も

子どもの状態でいうと、私の子どもたちが入学したのは60年代ですが、何しろクラスで幼稚園を出ていないのは2人位ということもあって、目立ったらしい。それに、私が「日の丸・君が代」問題で校長に反論したりしたのが影響してか、下の息子が二年位おくれて入学したら、上の娘が、うちの親は少し変わっているから、わが家でいろいろ言っていることを学校ではあんまりしゃべらない方がいい、といったことを教えてたんですね。周囲と違うことをいうと友だちから孤立したんでしょう。そんなにいじめられたというほどでもないのですが、気にして弟に注意していた。

兄弟姉妹が多かった戦前と違うのは、親の手伝いをすることが少ない。私などは商店でしたから、商売の手伝い、店番をするし、掃除もあるし、小僧がわりになるわけです。ほめられれば嬉しいから、手つだうのが普通でしたが、いまの家庭ではやるにしても僅かなもの、まったくないといってもいい。

それに店を開いていると、いろんなお客がきて、たんにモノを買うだけでなく四方山話をしていくのをきいている。大人の会話は子どもは聞いちゃいけない、などといわれるんですが、そうなりますます聞きたくなる。好奇心がわく。わけの分らない話で、親にきくと、そんなことは知らなくていい、と叱られる。そんなものかどうかの判断もつくようになる。ともかくいろんな大人と接触したことで学んだものはとても多いんですが、今の子どもたちをみているとそれはほとんどなくて、テレビがそのかわりをしているんでしょう。塾通いに忙しくてテレビもそんなに見ていないかもしれないが、マスコミが果す役割はとても大きい。ともかく昔と今とのそうした対人関係の違いを痛感しますね。



## テレビ時代の家庭と教育と

テレビの問題は、また文化のところを出るでしょうが、私が40年ほど従事してきた労働者の文化運動でいうと、敗戦後50年代までは労働者のサークル活動という形で進められてきた文化活動が、60年代を通じて企業のクラブ活動に吸収されてしまいます。企業のレクリエーション活動・クラブ活動に吸収されて、お金はもらえるし便宜もはかれるが、会社、工場の外へは出られなくなる。またクラブのキャップは課長とか部長とか職制になり、演劇なんかだと作品もなんでもやれるとはいえなくなる。〈働くものの演劇祭〉だの〈文化祭〉だのには出られなくなる。出ようとすれば劇団〇〇と称してやる他ないが、援助は出ないし、労務からにらまれる。こういうかっこうで衰退していくんですが、労組の強い全通、全電通・国鉄といったところはがんばってやれた。それが弱くなるのは、やはりテレビの影響だと思いますね。まず鑑賞サークルがつぶれる。映画サークルがいちばん早かった。労演・労音もつづく。まだテレビが高くして何人かで見なくちゃならない、チャンネル

争いなんかしてる時代はよかったが、1人1人がテレビを持ったら、外へ出てサークル活動などしんどいことをやらなくなった。時間を費やすのにこと欠かないんですよ。

一方、教育の上でのテレビ利用は大変なものでしょう。私は正直に、先生がたは大変でしょうね、テレビであんなにやられたら、教科書や教材で立ち向かうのは…というんですが、そうでもないのか、あまり返事はない。

ここまでテレビが発達すると、テレビを使うことを家庭も学校も考えなくちゃと思うんです。具体的にどうこうといえないが、とにかくこれだけ生活の中に入りこんできて、さらに「多チャンネル時代」「24時間テレビ時代」「双方向化時代」になってきたとなると、少なくとも教育現場は相当しっかりととりくむ、利用することを考えなくては、と思うんですが。私も「テレビに子守りをさせないで」と幼児には与えるな、というスローガンでやってきたが、大きくなると逆ではないか、と考えています。

10年前、20年前との対比を考えて、いちばんの変化はマスコミとくにテレビだと思うんですね。

## 公立と私立・現実と幻想

原田瑠美子

先ほど永畑さんから、親たちはもう公立を見限った、公立に幻滅し、私立学校のほうへ流れているという話が出ましたが、私が勤めている学校は私立ですけれど、私立から見て、そういう傾向が顕著になったのは臨教審の後だと思っているんです。臨教審にそれなりに親も教師も期待というか、今になってみれば幻想だったわけですが、期待したと思うんです。当時、いじめの問題をはじめとしていろいろな教育をめぐる問題が吹き出してきて、このままでは日本の教育はどうなるのか、子どもはどうなるのか、何とかしようという熱意が

まだ親にも教師にもあったんじゃないかと思います。

### 学校教育への幻滅

私たちが女性民教審をやったときも、あれは手弁当でカンパだけで賄っていた運動ですが、私一人だけでも結構カンパが集まりました。学校の同僚に呼びかけたり、いろいろな研究会の仲間とか、自分のクラスのお母さんたちに呼びかけるとすぐ反応があって、それなりにカンパしてくれて、市民レベルでそういう運動が支えられていました。

そして臨教審答申が出て、結果的には、その後ますます学校は息苦しくなり、いじめの問題なども、解決したわけではなくて、ただ見えなくなってしまった。子どもはますます学校の中で窒息し、学校に行けない子ども・不登校という現象がずっと多くなったという中で、親も「しょうがないんじゃない、何を言っても変わらない」という諦めに変わってきたし、教師もますますものを言わなくなってきた。学校を変えようとか、子どもをめぐって親と手を取り合って何か変えようという、熱意を教師も失ってしまったんじゃないでしょうか。

前回の夜の公開研究会のときに、私は学校の中で「子どもは生徒を演じている」と言ったけれども、教師は教師を演じている、親も親を演じていて、親と教師の関係もすごく表面的な、学校の成績という面だけを通してのつながりになってしまっていますね。私は自分の父母懇談会のときには、なるべく成績とか受験などを抜きに、もっと子どもを共に語り合いたいということで問題提起をするんだけど、なかなか親のほうの本音で語ってくれないというか、どうしても「成績はどうか、どのぐらいの成績ならこの大学へ行けますか」というほうへ話題がそれてしまいます。

## 「私学ブーム」の内実

東横学園も中学は一時つぶれかかり、1クラスの生徒を集めるのがやっとという時代があったんです。しかし、うちは幼稚園、小・中・高校、短大とありますから、一応“一貫教育”を打ち出しているのだから、中学1学級でも存続させないと一貫教育ではなくなってしまうわけだから、1学級でもずっときたわけです。その後2学級にもち直し、臨教審答申が出たときは中学2学級、高校6学級という形態でやっていたのですが、その後中学を3学級にして、高校を1学級減らして5学級にしたんです。今まで中学は生徒集めが大変だったのが、その関係が逆転して、3学級(40×3=120名)の募集に1000人を超える受験者が殺到するんです。

一方、高校のほうが集まらなくなったという現象が起きています。

そこで経営者は「生き残り作戦」で、他の学校でもやっているようだけれども、来年から中学の学級をそのまま高校ということで、中学4学級・高校4学級、本当に中・高を一貫にするわけです。中学のときから、青田刈りじゃないけど、生徒を集めて生き残っていくという方針をとっています。

その背景は、確かに永畑さんが指摘した、公立に対する親の幻滅があるんだけど、私学は本当にそれに比べられる教育をしているかということ、私はまだ公立のほうが悪いところもあるけれども良いところもあるような気がして、私立の場合はピンからキリまであって、キリのほうが多いような気がしてならないんです。親は公立に幻滅し、私学に幻想を抱いているだけであって、本当に比べられるものを持っているというふうには私は思えないですね。

バブル経済の中で親もそれなりのお金は出せる、しかも子どもの数も少なくなったという要素もあります。うちの子は私学に通わせますという親の見栄、そして私学から良い大学へ行かせれば、親のステイタスというか、自分の社会的な地位の証にもなる。そんな親の中流意識が現在の私学ブームを支えているのだと思います。

そして、私学は生徒を集めるのにいろいろな目玉を考えるんだけど、まず制服ですね。うちも5年前に制服を変えました。コシノヒロコさんのブランドものね。紺の制服のほかにタータンチェックのベストやスカートも揃えいろいろ組み合わせができるようにしました。その他にコート、カバンも親のブランド嗜好に見合ったような高級品にするんです。あと、生徒募集にとって決定的なのは進学状況ですね。中高一貫なら、5年間で高校までのカリキュラムを終了し最後の1年間は受験勉強をさせたり、あるいは能力別の授業や特進コースを作ったりして、大学受験に有利な体制を組むことができます。

## 私学ブームが去ったあとは

うちの場合には短大がついているけれども、女子でも4年制の希望が強くなってきています。そこで、大学の進学率を上げるよう受験指導が強まっています。私は理科の授業を「子どもが科学する楽しさ」ということで教科書にこだわらないでやってきたんだけど、校長命令で、テストをやりなさい、教科書を使いなさい、それをやらなさいと「あなたから授業をとり上げて、他の人にやってもらわざるを得ない」みたいな締めつけがありました。その中で教師は抵抗はしているんだけど、だんだんと私学ブームの現象に乗せられてしまっている。私立学校に勤める教師は、10年ぐらい前から生徒減で私学はつぶれると危機感を煽られていたんだけど、つぶれるどころか集まってきたから安心してしまったんですね。

私は、私学に勤めていて、私学はこれでいいのかというと、バブルが崩壊したこの先は、親も「幻想だった」とわかんと思うんです。それで私学もダメ。そうなったときにはじめて「どうするか」ということで、また問題がもとに戻って、自分の地域の間から公立をつくりかえていかなければならないというふうになってくれればいいと思っています。私も公立に期待してないわけじゃありません。私学は一部の希望する者が行けば良い。公立は無料で誰もが行ける学校にしたいと思っています。しかし現状は厳しいなと感じています。

## 子どもとの関係のつくり直しを

今後どうするかということですが、親も子どもも教師も、学校でも家庭でも役割を表面的に演じている関係になっているのを、如何に人間としてのつき合いにしていくかということですね。

私は発想を変えているんです。前は制度を変えなきゃいけないとか、学校の枠組みを変えようとかいう発想をして、それなりに学校の中で努力はしてきたつもりだけれども、そういう発想ではダ

メだなと思っているんです。私は東横学園教職員組合の執行委員長をやっているのですが、組合の教育運動とか教研集会って何かクサインですよ。丸ごと子どもをつかめとか、学校改革、民主的な教育づくりとか、やはり教師や組合の目ではなく教育を見ていないんです。子どもが抜けているように思えてなりません。教師集団や組合以前に、教師も一人の人間として子どもとの出会いを大事にし、自分のクラスの子どものなり授業なりで勝負というか、そういう発想を大事にしたいですね。日本の教育を変えよう、制度を変えよう、そのために組合として闘おうなんてそんな大きいことじゃなくて、もっと自分のクラスの子どものどう出会っていくか、ちょっと楽しい授業を自分が工夫してやってみる、そのとき子どもの目が輝いたとか、そんなささやかなものを教師がやればいいし、親も家庭の中で子どもと本当に向き合っていくとか、さっき牧子さんが言った「生活を共にする仲間」という発想ね。そういう発想を親も教師も持ちたいですね。

国民教育文化総合研究所の役割も、あまり制度改革とか、提言を打ち出すとかではなく、人間と人間との関係を、親も子どもも教師もどうつくっていったらいいのかという、発想を転換する文化運動というか、そんなふうになっていけばいいなと思うんです。

だから、第一委員会のように公開研究会をやり、そこに出てきた人がちょっとでも「ああ、そうか」と考え直して、子どもとの関係をつくり直していく。そういう大人とつき合っている子どもが少しずつ変わっていく。文部省と対決するとか、制度を変えるとか大上段に構えてしまうと何も展望が見えなくなってきちゃうなという気がするので、私は、組合の委員長なんだけれどもあまり大きいことを言わないで、ささやかに自分の足元で子どもとの関係をつくり変えていきたいと思っています。

## 2 子ども・青年と文化

# 国家ぐるみの子育て

永畑 道子

それでは、「子どもと文化」ですが、前の発言の補足であってもよいと思います。

### 「退学」で保つ私立校の秩序

6年前になります。私立の学校をかなり集中的に回りました。ほとんど男女別学の私立校ですが、地域の名門、ミッションスクールで受験校で有名なところ、ごく普通の学校をふくめて取材しました。そのとき感じたことは、私立という学校がなぜ秩序というか、外から見てきちんとしているのかということ。それを保っているのは、多くの私立に、「退学」という手段があって、荒れる子たちはただちにいなくなるのです。入るときに誓約書を書く。校則に合わないことをやったらいつでも退学するというのを……。そこは親たちにあまり見えないところですね。外側から私立に憧れる人たちには、一歩踏み込んでみれば、そういう私立の状況がある。

私はやはり公立に希望をかけています。子どもを、とことん抱えこみ、苦勞多い現場です。だからこそ、公立は今、しっかりと決意しないと、親の信頼も期待も失っていくと思います。

学校現場を回った感触で言えば、「これはいいなあ」と思ったのは、問題になった子をあずかっている北海道網走の家庭学校、当時の若林繁太先生の篠ノ井旭高校、ここは“全国区非行”と呼ばれる子どもたちとごくふつうの子がいっしょに学んでいるところですね。そして、自ら志して入る山形の小国にあるキリスト教独立学園など。このあたりはほとんど午前中授業、午後は労働の時間です。全寮制をとっています。こんな学校が各県に

2つか3つか出来たらいいな、ことに公立で出来たらいいだろうなと思いました。

独立学園は完全な自給自足の生活です。子どもたちは親を離れて、自分でご飯を作る。男の子も女の子も協力して。農業・酪農・味噌醤油も作る。素晴らしい生活がそこにありました。

公立学校は、自分たちの安住のところに大ナタを振ってほしい。このままではダメだということ、ぜひ先生たちは早急に考えていただきたいと思います。

それから、学問のことですが、私はやはり、学校は勉強が好きになる場所にしてほしいと思っています。好奇心というか、知らないことを知りたいと思う、その気持ちを育てることができたら、そして、学ぶことの方法論が与えられたらあとは本人自身が勉強していく気力を持つだろうと思うのです。「なぜ」という気持ち、小さいときから「あっ、不思議だな」という気持ちを、親たちは子どもに見せて、語って、親自身もいつまでも、この「不思議」という素朴な感性を子どもの前に示したいと思う。ごく自然に、作為的ではなく。

今の情報化社会は、向こうから与えてくるものが多くて、自分は受け身でいても少しも不自由のない生活ですから、なお、自ら、問い、学ぶ力をひらきたいのです。

一昨日、あるロック・コンサートに行きました。久しぶりに足の爪先からゆすぶられるような激しい情熱を感じました。尾上文さんというフォークソングの詩人ですが、彼が歌う言葉のすばらしさ、文学そのものです。決して文化は衰えないのです。大人は、若い人たちが創りだす文化によって刺激

を受けることがどんなにか大事だと思います。日陰者のように扱われているロックですが、とんでもないことです。

### 国家の子育てにふりまわされずに

戦後、国は、子育てに関して、強力なネットワークをつくりました。「母子手帳」を発行して、子どもはこのように育てるべし、これが平均の体重だ、と保健所を通して全国に普及していったのです。その母子手帳は、占領軍アメリカから持ち込まれた育児学の目安がかなり強力に流れていて、それが改められたのはかなり年月がたってからです。きわめて禁欲的な育児、機械的に三時間おきの授乳、乳児はなるべくベッドに寝かせておくといった育児がずっと続いていた、そのことを私は熊本の慈愛園の園長さんから指摘されて、とっくの昔にスポック博士自身が自己批判して、子どもが泣いたら抱き上げてやるというスキンシップが息をふき返したと思っていたのに、「母子手帳」はそのまま、相当な年月放置されていたのです。

若い母親たちは、それによって子育ての情報を得て、隣の子よりも体重が増えたとか減ったとか、大変な関心事のなかで、優良児が表彰される、この国家ぐるみの「子どもの育て方」は、核家族の親たちを振り回してしまっただけで、特に幼児期に。家

庭も学校も、このような形でいつのまにか組織されてしまうんですね。文化は、これから、急速に映像の時代に移っていくことでしょう。

私は活字文化の真ん中にどっぷり浸っているのですが、映像とどう並存させていくか、そこを考えなければいけない時代に入ってきている。子どもの変貌は当り前のこと、時代が招くもの、社会がまねくものですから。

ただ、親がそれに合わせて若い世代にこびる必要はない全くないと思っています。化石と言われても一つの自分の信念を持っておかなければいけない。それが世代交代していく面白さではないか。若い人たちの意見に私たちがあえて同調する必要はない。そこを間違えないようにしたいなと思っています。若い人たちの素晴らしさを受けとめる感性は常に自分の中でとぎすませておきたい。

私たちの第一委員会は、いつも十代の人を中心に、おいて、「いま十代は何を考えているか」を、これからもずっと考え続けていきたい。十代に人生の基礎の部分がほとんど決まってしまうのではないかと、そして、大人という過去をのりこえていく人たちだと思う。公開研究会のテーマをこれからどのようにプランニングしていくか、だいじな問題だと思っています。

## 学校文化からの解放

小沢 有作

ぼくは、「子どもの文化」はよくわからないのですが、でも、どの子ども、若者も学校文化の影響を深く受けているので、自分にとって学校文化とは何だったのか、捉えなおしてほしいと思っています。

求めることの1つに、学校の問題性に向き合ってもらいたいということがあるんです。学校というところは百科辞典のようにいろんなことを教えます

が、ただひとつ、もっとも肝心の「学校とはどういうところか」という問題については教えてもらえないし、議論もしていないですね。そうすることを気がつかないというより、避けている。

それにたいして、子どもたち、青年たちは学校のやり方に対する不満や反発がたまっている、そこから逃げることはあっても、しかし、学校とはどういう構造で成り立っていて、どういう問題

をもっているのか、正面きつた解析を試みていない。学校に対する反発、不満はわかるんですが、そこから出発して、「俺をこういう目に合わせたものは学校の何か」という粘着力のある認識に発展していかない。是非、体験的批判から構造的批判へすすんでほしいと思います。

ぼくには、若ものが自分の生きている場所の問題と向き合ってほしいという希望があります。生きている場所は、家族、地域から始まって日本、世界など重層的ですが、考えてみると、子ども・若ものにとって、学校という場所が、小・中・高、さらに大学まで入れると、自分の人生のなかで一番たくさんの時間を費やしています。これに探求の目を向けないのは、おかしい。文句をいいながらも、学校になじんで意識が同化してしまったので、疑問の心が生じなくなったように思います。

ぼくは、教育原理の授業を担当していますので、昨年度は「学校とはどういうところか」という制度論・構造論をやりました。先ほど原田さんは、制度改革論より子どもとの出会いをといわれました。そうして子どもとの出会いが深まると、かならず学校の問題にぶつかると思います。この地点から新しい目で学校改革を論じるようにしたい。

### 教科書文化からの解放

子どもの問題からみた学校改革は、つきつめて言えば2つあると思うんです。1つは教科書文化からの解放です。もう1つは点数からの解放です。

学校の風景の中で、小・中では教科書は無償配布ですから、教育委員会が採択した教科書を、4月の始業式の日子どもに配り、1年間この教科書で勉強しますよというわけです。教科書に従って日々の授業が組まれていく。先ほど永畑さんは子どもの勉強したいことを大事にしようと言いましたが、今のシステムはそうになっていない。

本当は、各学年の初めに「僕はこれを勉強してみたい」「私はこれを勉強したい」という希望を、せめて最初の1週間ぐらいでいいから、自由に話

合って、おたがいに学びたいことを知りあうようにすれば、ずいぶん変わってくると思います。しかし、現状は教科書に従って「教えること」を中心にしたシステムを取っている。子どもが「学びたいこと」を聞かないシステムになっている。そういう意味で、教えることの組織化から学ぶことの組織化へ、制度改革を思いきってやらなければ、学校は子どもが学ぶ場になりません。

教科書を習うことに慣れて、子どもに「教科書を習うのが勉強だ」という考えが定着しています。そうでなく、疑問をもち、それを追求し、議論を交わすことが学ぶことだというふうに、子どもの心性を変えていく必要を思います。教師はそうした学習への心性の変容を励ます授業を創りだしてほしい。

### 点数制からの解放

もう1つは、点数制からの解放です。ぼくは、「学力は点数に換算できるか」という疑問を持っております。学力を点数に換算する装置はテストです。問題を作って、100点満点法で配点して、○×をつけて、○に点数を与えるわけでしょう。テストによって学力という目に見えないものが点数という数字に換算される。点数に換算されるから、序列化や合否の選別が可能になる。じつに便利な方法です。

100点満点法というのは近代最大の発明だと思っています。19世紀になって登場したものです。それ以前はないんです。日本も江戸時代にはないでしょう。100点満点法によって、学力を点数に換算、これを成績とみなす。点数制です。これが近代学校の学力評価法です。いつのまにか、その逆も真なる意識が広まって、点数で生徒の学力を判断するようになりました。点数制がわれわれの学力評価意識の心棒としてあります。

ですから、点数制を問い直すということは、ぼくにとって近代学校の学力評価システムを問い直すことと等しいのです。学校制度改革という場合

には、このような点数制への疑問という本質的なところまで降りて、これを議論しなければいけないと思うんです。

### 教師本位から子ども本位へ

学校の問題を、教科書からの解放の問題と点数制からの解放の問題として、教育原理の授業では、わりと丁寧にしゃべっているんですが、問題はその評価をどうするか、です。いくつもの方法を提示して議論しますが、昨年度は自己評価の方法を取りました。今まで自己評価をやったことのある学生は、だれもいませんでした。いつも点数をつけられる側において、点数をつけられないと落ちつかない心性になっていました。自己評価をやって、学生諸君にも葛藤がありました。教師の評言を求めてきたのには参りました。点数制は教師にとってもっとも楽な評価法です。

教科書を使い、テストして点数をつけるやりかたは、じつは、教師にとって便利で楽な方法です。教師本位でしょう。子どもにとっては、食べたくないものを食べさせられ、おまけに消化してないといって悪い点数をつけられるのですから、楽しいはずがありません。子ども本位にどう変えていくか。今こそ深い深い学校改革論をたたかわすことが必要だと思うのです。

ぼくの学校改革論は、教科書の押しつけという

知識つめこみ型教授システムと点数制はセットのもので、ともに変えていくしかないというのですが、あえて先後をつけるならば、知識つめこみ型からの解放が先になりましょう。先ほどからの話の引き続きでいえば、自分の問題を出したり、生活を創ったりして、いろんな疑問をお互いに追求し合えるような場として学校を組み変えていきたい。

そう考えると、日本にもそれを求める流れはあります。例えば柳田国男は子どもの疑問を問題意識にまで高め、それを探求する場として学校をつくり直そう、東京でつくった教科書を使うのをやめ、地域で作ろうと言っています。子どもの学ぶことを組織するのが学校だという思想の系譜が日本に流れていますので、それらをもう一度たぐりよせてみたいと思いますね。

このように子どもの学ぶ場に学校が変われば、評価の方法もおのずから変わらざるをえない。点数制に固執するわけにはいきません。ぼくのゼミでは、留学生が来ていますから、よく料理を作るんです。ラオス料理を作ったり、キムチをつけたり。この夏には餃子を作ります。こんな授業は点数のつけようがありません。

もともと文化は、それが大人の文化であれ、子どもの文化であれ、点数となじみません。学校の評価法のほうに無理があるんです。

## 人と出会うことが基本

小沢 牧子

今度は「文化」の柱になるわけですが、この委員会は「文化」の問題はまだ手がついたばかりだというふうに私は思っているの、後半でここはガッチリ深めたいなという気がします。私自身「文化」の定義をきちんと押さえているわけではありません。それは任期後半の宿題として意識していきたいと思います。

私が、例えば第2回の公開研究会などで、やはり確信したのは、文化というのは道具がどのようなものであれ、それを介して「人と出会う」ことが基本なんだということ、それが1点目です。今の子どもたちはファミコン、テレビ、電話というふうな、他人と深く出会うにくい性質の道具に支配されている生活なんだけれど、そこで子どもた

ちが願っていることはなおかつそれを通して人とつながろうということで、それは文化への欲求なんだということです。そのことは、伊藤書佳さんや斎藤次郎さんのお話を中心に明らかにされたと思います。

ファミコンについて、「一人で閉じこもってやっている」と大人はきめつけがちですが、斎藤さんのような眼で見ると、背後に多くの観客がいる。「いまに自分がギャラリーの中でやるんだ」と、そこにつながっている見えない仲間があるからあれだけ熱中できるのですね。その視点がかつてのは、私には嬉しいことでした。テレビだってそうですね、「これを見ないと友達との会話に入れない」という感じで、背後に仲間を感じて見ている子は多いのだらうと思います。その辺を見落とすと、子ども文化へのきめつけになるなと思いました。本質はそんなに変わらないんだということね。

伊藤さんの話された「トーキング・キッズ」、あれは、かつての活字文化世代でいうならペンフレンド、投書欄を使ってペンフレンドをつくるという、あれなんですね。文字の代りに電話を使って友達をつくる。パソコン通信も同じなのでしょう。

日常生活で出会う等身大の知り合いと同時に、離れた、日常を共有してない仲間を得たいという欲求はかつてからあったわけで、手段は変わっても質として変わってないんですね。

### 子ども期は消えた？

2点目に、子ども文化を重んじるときに落としてはならない視点として、現在大人と子どもという仕分けは実はもう実質的になくなってきているということです。それを知っているのは子どものほうで、大人のほうが見えていないのではないかと、つまり大人は、自分が長く生きているし、いろいろなことを経験したり勉強してきたという思い込みの上に、「大人と子どもは違うんだ」、「大人は上で子どもは下だ」と仕分けしている。そして「子どもを大人にするのは学校である」という仕掛けに

なっていると思うんです。学校に行くことによって、子どもは大人としての市民権を手に入れる。子どももその仕掛けはわかっているから、学校に行かないことは大変なことだ、社会に入れてもらえないというふうに、子ども役割に甘んじていくわけですが、実はかつてのような大人と子どもの仕分けはもうできないと思います。

かつて人間が肉体労働をして暮らしていた時には、大人と子どもは出来ることが完全に違ったし、大人が子どもに教えることは自然であったし、そういう意味では、筋力や人生経験の違いは厳然とありましたね。

でも今は、社会のほうがより早く動いて、大人の年齢を追い越しているから、子どものほうが大人を追い越している部分がたくさんある。そういう意味では「子ども期は消失した」のではないかと思います。N・ポストマンというひとが『子どもはもういない』（新樹社）という本を書いています。それは、一口で言うと映像と音の文化になったことに関係している。映像は誰にでもわかる。それに対して活字文化の時代には大人期があり子ども期があった。なぜなら、活字文化は習得するのに時間がかかったからです。活字文化をマスターしているのは大人で、いまだにできないのは子どもという仕分けができたんだけれども、音と映像の文化が活字文化にとって変わったときに、子ども期を消失しはじめた。つまりテレビは小さい子ども大人も一緒に見ることができて、しかも大人に見えないものを子どもがみえたりして、平らな関係にいて違う視点で学び合うことができる。しかし実際には、社会の秩序の維持装置として子ども期と大人期が分けられている。それを機能させるために学校があるというところを、子どもは体でわかっているんじゃないか。そのあたりを私たち大人がきちんと見ることが、子どもを並び立ち学び合う仲間ととらえることを可能にする大事な視点だらうと思います。

ロック・ミュージックにしてもそうだし、映像



に小さいときから馴染んだ子どもたちは、これからいろんな映像を媒体として、人と出会って何かをつくっていくことになるだろうと思う。それは大人を超えるでしょう、完全に。そこをありのままに見ることが、さっき私が「学校」のところで言ったことにつながると思います。

「人と出会う」ことが文化をつくる最大の土壌であり、足場であるというふうに言ったけれども、今は実際に子ども・大人を取り巻いている状況は、人と出合いにくい形になっているのは事実だと思いますね。つまりテレビ、電話、パソコン等は個別に、人間が一人で機械に向かい合う形をとるものですから、人と出会うためには、ある意味で不利になっている。

これは佐々木賢さんの言葉だけれども、子どもたちは「人間飢餓感」を強く感じているということですね。これは私も子どもや学生たちと接していて感じています。この人間飢餓感を満たそうとする子ども、若者のものがきのようなものを、私たち大人の身分の者はまず体で感じたい、そこから出発していきたいと思いますね。

最後に、さっき原田さんが言われたことだけれども、子どもの事実、親の事実、教師の事実、そういう現実から出発して、いろんな立場の人が出合いながら自由に柔らかく学び合っていくことが何より大切だと思う。あまり固定観念で物事を整理したり、解説したり、解釈しようとするのではなくて、なまの姿で出合い学び合って新しい発想なり思想を生み出していくということを、この研究所はやらないと、極端に言えば存在する意味がないのではないかというぐらいに思うわけですよ。

そのために、第一委員会は少しスタイルなど他の委員会と違う流れをもっているけれども、この委員会の持ち味をもっと打ち出して、生かして、そこから今まで突破できなかった糸口をつかんでいくということを、後半はもっとやっていきたい。私たちもそこから大胆に学んでいきたい。そこか

ら、永畑さんが言われる「大ナタを振う」とはどういうことなのか、展望を見出していきたいと思います。

最後に一言、学問についてずっと自分が考えてきたことがあります。「学問とは何か」。私は学校教育に関する住民運動の中で、自分が解かなければならない課題に向き合って行動したときに本当によくわかったんだけれども、私がかつて学問だと思ってきたことは学問じゃなかったんだと。学問というのは、自分の生活の中でのっぴきならず出会った疑問を解くことなんだ。それはどういう糸口でもいいのですが、生活の中でのっぴきならず出会ったテーマというのは、すべての学問、そして世界に通じる。そのことを子どもたちとも共有したいと思うのです。学びの心というのは子どもたちの生活を肥やす中ではじめて生ずる。子どもは好奇心の塊なので、暮らしの中で「これは何だろう」と思ったことを解こうとする。学校がそこに応える場にならなければ押えこまれた子どもの好奇心は、決して復活しないだろう。だから「生活を肥やす」というテーマが「学問」という言葉をめぐっても出てくるので、それも文化の構築のところにつながるんじゃないか、そんなふうに思います。

# 「信じさせる教育」の危険

山部 芳秀

ほとんど牧子さんが言われたんですが、さっきのテレビの問題でいうと、もう2、3年前から「多チャンネル時代」「同時双方向化」と表現していますが、受け手だけじゃなくて意見も言える、それをすぐテレビが映して意見を交換する時代に入っている。すでに深夜放送などで、「ファックスで送ってください」というと、そのファックス番号に視聴者がボンボン送る。それを受け取ってすぐに答えるのがふつうになっています。若者の意識としてはテレビは一方的じゃない、自分たちは受け身じゃないと思込んでますね。一方、パソコン通信なども低年齢化してくるでしょう。これらがどんどん進んでいくと子どもをまきこんで、影響はどんなものになるかわからないが、とにかく、80年代に言われていた「大人の子どもの大人化」が一層すすむでしょう。大人は学校でしか威張れない時代に入っているのではないかな。

これまで考えていたのとは違う要素が入ってきちゃうということがあるので、僕もよく知らないが、子どもの人気を得るには、「テレビにはこんなことがある」「こんなことができる」と言える先生ではないかと思うんです。

その点では、文部省の側もそれをどう見て、どう入れていくのか。戦前われわれが受けた義務教育では、小学校などは特に「信じさせる教育」で、子どもが「なぜ」と言うことを許さなかった。子どもは次から次へ教えられ、信じこまされる。教師も教え込むのに一生懸命だった。

僕が中学校時代に、橋田邦彦が文部大臣になって、あの人は医者だったから「科学する心」が大事であると言い出すんです。それで、妹たちは、虫めがねを常に持っていて、道を歩いていて土手の叢に虫がいたらそれを覗くとか、花が咲いてい

たらそれを覗いて「観察する」。それを橋田邦彦が強調したんです。科学技術の振興のためには必要だった。しかし、「なぜ？」でいきだすと大日本帝国の拠って立つ精神的支柱＝神国日本、神格天皇はどうなっていくんだ、破綻してしまうんじゃないかと思ったものです。

海軍は船に乗ってますから、合理主義でないと戦争はできないが、陸軍はともかく「精神力」で突っ込んでいった。「神国日本」についても「あれは神話だ」なんて言うと、中学生でも危険だった。神話や天皇については、子どもたちに「なぜ」と問わせると、教師が未熟である、未熟以外のなにものでもない先輩教師や校長にどやされるという形で、「信じさせる」教育だった。

それが戦後の民主教育で変わったはずなんですが、また、70年代以後の教育は「信じさせる」教育になってきているんですね。「日の丸・君が代」問題などはまさにそれですよ。次々と疑問をもたせ、それを生かしていくのが子どものためだと思いう教師は、好奇心を大事にする授業をする。それはみんなわかっているはずなんじゃないかな。

日教組も「好奇心を大事にする」というようなことは、教育制度検討委員会や教育課程検討委員会ではずいぶん言ってきたんですよ。だから、後手に回っているというよりは、こっちも早く気がついて、ずいぶん早く提案するんだけど、それを担う主体が弱くて、やられちゃったんだなあという気がしますね。

今はとにかく、小沢牧子さんが言われたようにテレビやファミコンに代表されるような文化の急速な進行で大人と子どもの区別がわからなくなりつつある時代だと思いますね。そういうなかで学校のあり方、役割が問われているんじゃないか。

ただ大人になるために、働くためには、高校出てなくちゃいけないとか、大学を出てなきゃいけないとか、特別の目でみられないために大学へ行っておく、といった形式のための学校になりつつあるんじゃないかと思えますね。

「テレビ主導型社会」というものをかなり強く念頭に置いて、「文化」を考えていかなきゃならないと思ってます。

### 子どもの好奇心に向きあう

小沢(有) 「なぜ」という疑問を閉ざす。アメリカの学校生活を体験した青年たちの話を聞くと、日本の教室に戻ってから、質問を次々にすると周りの子どもからつぶされるというんです。「あいつは質問ばかりして」と。教師も嫌がるんだろけれども、友達からつぶされる。だから目立たないほうがいいとなる。

小沢(牧) かつて日教組が「好奇心を大事に」とやってきたというけれども、好奇心の質が、本物の好奇心じゃなくて、教室内に閉ざされた範囲の好奇心だったのでしょうか。教師好みの。だからダメだったんだと思うの。例えば「なぜ学校へ来るのかな」とか、「うちの親はなぜ喧嘩するのか」とか、「男と女が寝るってどういうことなんだろう」、「子どもはなぜ生まれるんだろう」、「死ぬとどこへ行くんだろう」、というような、大人もわからないような体ごとの好奇心に向きあおうとはしなかったんじゃないですか。学校の中で期待される好奇心などはたかがしれてる、だから失敗した

と思う。

山部 でも、それは仕方がない。

小沢(牧) 自分が全部教えなきゃと思うから、できなかったのよ。わからなければ一緒に考えたらよかったのよ。そしたら、自分も眼が開かれて、子どもといることが面白くてしょうがなくなるのよ。教えられないから触れないというんじゃ、子どもに相手にされない。なんで一人でそんなに全部知ってなきゃならないのか。一緒に悩んだり調べたらいいのよ。

小沢(有) そういっても、変わるのが大変なんです。教師は全部知っているものだという感じはずっときたから。僕にもそれが残っている。

山部 僕らがやっていたサークル運動でも言えるのは、50年代までのサークル運動は、わりにテキストを用いないやり方だった。まさに新聞を読んで、この問題がわからない、これは何だという問題を出していく中でテーマをつくり上げてやりました。それが60年代からは、組合も一緒にやり出したことだが、テキスト主義になるんです。一つ一つ同じようにやっているのを「労働大学」とか「組合学校」と称して、テキストは「日本資本主義発達史」とか「賃金論」とかいうふうになっていくわけです。

小沢(有) そして最後に卒業証書を出す。学校型になる。

山部 まさにそれになっていく。僕らの世代は、上の学校へ進めない人が多かったから、そういうものにしてほしいという要求もあったけどね。

## 子どもと大人、文化の違い

原田瑠美子

「子どもの文化」に関しては、私もまだ整理されていなくて、疑問だらけのところがいっぱいあります。私はお金と時間ができるとスペインに遊びに行くんですが、いつもスペインへ行って日本に

帰ってくると、日本とスペインとの違い、もちろんいろいろ背景が違うから異なって当然なんだけれども、いろんなことを考えてしまいます。

## 子どもと大人の区別が明確なスペイン

スペインでは、まだまだ子どもの文化と大人の文化ははっきりと分かれているわけ。子どもは子どもで道端で、こんなに早く学校は終わったのかなと思うほど、昼間から遊んでいます。スペイン人は遊びに行くのは夜、夕食も遅いけど11時過ぎ頃に夕食を食べて、朝方まで遊んでいるんだけど、そのときは子どもは寝ているわけ。だから「まだあなたたちは子どもだから、これから親の楽しむ時間」というふうにはっきりしている。

スペインへ行くと、犬と子どもはよくしつけられているんです。子どもは「パパとかママのようにしたいな」と思っているけど、自分はまだ子どもで、やがて大人になったらパパやママみたいに、ああいうこともできるんだなというので、子どもから大人にかわっていくというのがメリハリがあるとも言えるのね。

それは、まだスペインがいろいろ経済的なことなどで、昔の牧歌的なものがある、家族主義もある、宗教の背景もある、ということでももちろん違うんだらうけれども、日本へ戻ってみると、本当に大人と子どもの区別がなくなっているんですね。

## 子ども期がない日本

この間も、生活指導映画会というのがあって、たばことお酒の映画を見せた後、無記名でアンケートをとったんです。そしたら、高校2年生の女子でアルコールを、何らかの形で「飲んだことがある」と答えたのは7、8割。中には小学校のときから飲み続けて、今でも時々飲んでいるというのも何人かいるんですね。たばこの方は、減ってきています。

子どもたちでコンパなんていうと、高校生ぐらいでアルコールは普通です。また、女性に飲みやすいようなきれいな色のカクテルとかサワーにして、女子高校生でも抵抗感を持たずに飲んでいて前だったら考えられない状況になっています。あ

とはカラオケボックスで大人と同じようにカラオケ歌うわけでしょう。前は、バスで遠足などに行くと、みんなで歌う歌があったけれども、今はみんなで歌は歌えない、カラオケなの。大人の歌を歌ったり軍歌を歌う子がいたりして、「ありゃ、これはおじさん、おばさんのやり方とどう違うのかな」という感じになって、これで果たしていいのかと考えて、ずっとモヤモヤしてたんだけど、さっき牧子さんの話を聞いて、日本の経済的、社会的な背景が違うんだから、前みたいに子ども、大人というふうに分けられない、子ども期はなくなったのかなと…。

つまりスペインもドイツも大人の文化がちゃんとあるわけ。それで日本の大人の文化は何かというと、カラオケとお酒しかない。それをただ子どもが真似しているというか…。

それは、さっきの牧子さんの話によると、活字から映像文化になった中で、大人も子どもも平面的に一緒に情報が入ってくるからしょうがないというけれども、そうだとしたら他の国も同じでしょう。性などの問題は宗教と関係があると思うんですが、セックスの問題などでも大人と子どもの境目が見えなくなっているのは、どういうふうにかえたらいいのか…。アダルトビデオだって子どもが借りられるわけだから、18歳未満はお断わりといっても、私服を着ていけばわからないし、お父さんが借りてきたのを子どもが回し見したりしてね。

だから本当にどこが違うのかな、違わなくていいのかどうか。さっき牧子さんの話を聞いて「そうかな」と思いつつ、まだひっかかる場所が残っています。

## 「一人前になること」って何？

小沢(有) 大人が崩れているんですよ。ちゃんと持つべき文化の型を更新していないから。

小沢(牧) でも、そうやって分けるのがいいことかどうか。

原田 子ども期、大人期と分けないという発想の転換が必要なのではないでしょうか。昔は子どもは大人の成長の前みたいに思っていたけれども、そうじゃなくて、その時期、その時期なんだというふうに考えることができる。「子どもの権利条約」だってそういう発想で出てきて、今までの子ども観と違うわけでしょう。そうしたら、文化というときも、今までみたいに子ども文化と大人文化は違うものだ、子どもの文化がだんだん大人の文化に近づいていくというのではなくて、違う発想でとらえなくちゃいけないのかどうか、でもまだ今一つ整理できていません。

それから、確かに映像のテレビとかファミコンなどを学校の中に取り入れていく、子どもはそういう中で育ったから大人にはない優れたものを持っている。子どもはパソコンで遊んでいるからワープロなんてすぐ打てるし、そういう面では大人より進んだものを持っているし、リズム感もいい、ファッションセンスもいい、感覚では大人を越えた良いものを持っているんです。だけどそれでもひっかかる面は、二次元の映像の文化の、どこかで「二次元コンプレックス」という本を読んだことがあるけど、生身の人間と人間の触れ合いとか、自然と接する、泥に触れたことがない子がいたりする問題があるわけです。

例えば林間学校に連れて行って、「こんなにいい空気だよ、思いきり吸ってごらん」とか「いい自然だね」と言うと、「先生、何がいいの、そんなの。排気ガスのほうがいいし、騒音のほうが親しめる」って。だからそれは単なる大人のノスタルジアかなとか、でもやっぱり違う。人間の生命力はそういう中で備わってくるものがあるから、映像文化で進んだ面もあるけれども、人間に足りないものが出ていないのではないだろうか。とにかく友達を一番大事にします。ただ、それが、前のように深く友達とつながっていけない。そして友達関係で、何かあるとそれが決定的になって学校へ来られなくなってしまう。不登校の一番の原因は

友達関係みたいですね。勉強とか親とかいうよりも、友達と何かうまくいかなくなったときに自分で修復できないんですね。そうすると全部がダメになっちゃうんです。

だから、ビジュアルな進んだ面も生かしながら、現代文明の中で失われた面を学校の中で、それは学校でしかできないような気がするのね。私の授業は理科だから、なおのこと実験に生物などに触れさせたり…。テレビとか映像で見せたほうが簡単なんです、解剖なんかしないで、こうなっているんだよと見せればそれまでなんだけど、いろいろなものに接して、実際に解剖してみたり、そういう中で泣きながら、怖がりながらも命を実感していくとか、そういうものも今まで以上に大事にしなくちゃいけないなと思っています。

小沢(有) 大人と子どもの境界が曖昧になってきたということに、僕はまだこだわっています。「一人前になる」といういいかたがあるでしょう。友達で傷ついたら立ち上がれなくなってしまう、修復能力がないということですが、その修復能力を持つということが「一人前になる」ということでしょうか。人間というのは節目を持たないとちゃんとした人間になれない。竹みたいに節目があってしなやかに生きているのであって、今みたいにズルズルと節目がなくなってしまったら、一度折れたらそのまま倒れてしまう。その大事な節目として、かつて「一人前になる」という考え方があった。むしろ近代化はそのことを非常に曖昧にしたから問題だと思うんです。

永畑 その「一人前になる」というのはどう定義しますか、どういうことが一人前になるの、自分で食べていけるということ？

小沢(有) その現代的な定義をどう考えるかということ論じ合いたい。昔は、これより大人の文化の仲間入りするという意味で、イニシエーションがあった。

小沢(牧) 自分で食えるか食えないかということは、今の社会では金が取れるか取れないかという

ことですね。お父さんやお母さんたちは「自分で働いて食うようになってから言いなさい」と言うでしょう。ところが食えない人はいっぱいいるわけで、それこそ弱者の人たちは金を取りにくいわけですよ。食えない者は一人前じゃないという思想は怖いんです。

私は、子どもにそのテーマを突きつけられ、「大人と子どもはどう違うの、一人前になるって何なの」と問われて、考え抜いたあげく「やはり赤ちゃんも大人も基本的には同じ一人前」と考えざるを得なかった。もちろんそれは、全くアナーキーにしちゃって、節目なしにいけると楽観視できないんですよ、本当は。人間が安定して生きていくために枠組とか節目というのはないと危険なんだけれども、かんたんに開きなおるのはどうか。それが例えば今の学校なわけでしょう。それでいいのかといったときに、やっぱりそれでも子どもは幸せじゃないんだから、一度全部取ったところから考え直さないとダメで、その中で合意しながら、納得のできる節目を探さなければいけない時代だと私は思っていて、だからあえて取っているところがあるんです。

小沢(有) 学校が節目を崩したんです。学校はちょっと新しい節目をつくっていない。終了証書と卒業証書を出すけれども、それと人間の成長にとっての節目とはちょっと違う。だから、どういう新しい節目をつくるのかというのが、現在の課題…。

小沢(牧) 小沢有作さんはどういう節目だと思っ  
ていらっしゃるのかしら。

小沢(有) それがよく見えない、議論したいんです。

小沢(牧) それは、今どこまでとれるかという実験の時代だと思うんです、私は。学校とか親子とか年齢の節目を取り去ることが果敢に出来る子、自分に力があって耐えられると思っ  
ている子たちが実験している時代で、大人はそこに教わりながら、じゃあ、節目とは何なのかということ

ためて問い直していく時代だなと。性のことを含めて。性の規範っていうのもすごくあるでしょう。永畑 子どもたちは一体どう思っているか。自分たちはいつまでも大人にはなりたくない、「大人は不潔だ」とか「大人になると苦勞する」とか、彼女たちはよく言うわけね。だから、それはあの人たちはどう考えているかを非常に聞きたいところですね。これは非常に面白い問題だと思いますね。小沢(牧) 文化の根本の問題なんですよ。

活字文化を経てきた世代というのは、映像文化、音文化を持っている子どもとは違う力を持っています。それは子どもは知っています。活字文化に馴染んだ大人は、普遍的・抽象的思考に強いとか、いろんなことで現代の子どもとは別の力を持っている。そこから学びたいという思いは子ども・若者たちは持っている。子どもに迎合することは全然ないんだけど、何が上で何が下かという視点を取り除きながら検証していく。ヨーロッパのように子どもと大人をきちんと仕分けている文化と、日本のようにそれがゆるやかな文化と、どっちがいいとまだ言えないと思う。もしかすると、日本のほうが時代にマッチしているかもしれないし、抑圧が少ない構造をつくっていけるのかもしれないのね。だから面白い局面じゃないかと思っ  
ているんですけどね。

永畑 もう一つ、これも危険なテーマかもしれないけど、ポルノの問題で、全P研の昨年夏の大会で、性表現で女をさらしものにする、そういうことに対してすごい抵抗を覚えますと言った、これは中学校3年生ぐらいの子でしたね。あらゆる表現の自由とは言いながら、ポルノに登場する女は完全に男の視点の女であって、それに対して私たちは納得できないと、それを子どもらしい言葉で表現したんですが、私はこれもとても大事なことであると思うんです。そこにはまた人間の節目みたいなものが登場してくると思うけれども、成長しかけている女の子にとっては、そういう不潔感というのがすごくあると思うから。

私たち「女」を考える上でも「一人前」というのは重大な問題で…。

小沢(牧) そうよ、「女は一人前じゃない」というからね、自分で食ってないと一人前じゃないという…。

永畑 そこですごく差別されてきたわけだから。イニシエーションという、その問題でも、今の学会あたりではまだその問題は非常に深くあるでしょうね。

小沢(有) イニシエーションの場合は必ず性の自立というか、結婚の資格の問題と結びついているでしょう。

小沢(牧) 節目の問題、本当にあなどれないことだとは思うんですよ。

永畑 それは何と表現すればいいかな、例えば公開研究会の場では。

小沢(牧) ずばり「大人と子どもはどう違うか」みたいな…。先日若い人に、「大人と子どもはどう違うと考えていますか」と聞かれたんです。若い世代のテーマでもあるんですね。

ここの研究所のブックレットのタイトルにも、私が唯一提案したタイトルは「大人と子どもはどう違うか」なんです。

山部 前回ここで「子ども・青年」という話が出たでしょう、そこもあるね。「子どもの権利条約」の問題もあるし。

小沢(牧) 「子どもの権利条約」は本当は大変な条約で、本当にできますかと私は言いたい、推進してたりする人に。「大丈夫なの」って。

原田 だからアドバルーンだけ上げて、実際は進んでいかない。

山部 僕らの親の世代では、今は満で言うけれども、僕の伯母なんか14歳で結婚しているし、おやじなんか数えの13歳で丁稚奉公に行っているし、そういうのはザラだったわけね。僕も15歳になった時におやじに酒を飲ませてもらった。

小沢(有) 少年期、青年期がズルズル延びているんですよ。

小沢(牧) だって、それは人間が長く生きるようになったからでしょう。親がいつまでも生きていれば、青年期を延ばさなかったらバランスがとれないということもあると思うの。高齢化社会とも関係があると思いますね。だって、私なんか親がまだ生きてるから、まだ娘ですよ、身分上は。昔は55歳の娘なんてなかったと思うのよ。(笑) この問題はそういうことも関係しているね、きっと。  
永畑 これ、いつかやりたいですね。それでは、この辺でいいかしら。

## 第1委員会〈子どもと文化、家庭と学校のかかわり〉

委員長 永畑 道子（作家）  
研究所員 小沢 牧子（心理学研究者）  
研究委員 小沢 有作（東京都立大教授）  
" 山部 芳秀（国民文化会議）  
" 原田瑠美子（東横学園中・高教員）

---

教育総研 理論フォーラム 2

### 家庭と子ども・青年の文化

1992年8月25日 発行  
国民教育文化総合研究所  
東京都千代田区一ツ橋2-6-2  
日本教育会館内  
TEL 03-3230-0564  
FAX 03-3222-5416

---